
魔法少女リリカルなのは～永久に受け継がれる意思～

混沌の使者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 永久に受け継がれる意思

【Nコード】

N0115T

【作者名】

混沌の使者

【あらすじ】

過去に戦争があった。

また戦争があった。

終わりは悲しみを生み……しかし、同時に希望を生む。

その希望は未来に向かい、過去を清算するためのモノとなる。

そして今、不幸を背負った一人の少年の物語が始まる。

少年は不幸を背負い、何を思うのか……。

この作品は『魔法少女リリカルなのは』の続編です。

一応、前作は見てなくても、大丈夫ようにしたいと思います。気兼ねなく見てってください。

尚この小説は、テイルズオブの技、Get Backersの技、用語を真似ていたり、そのまま使っていたりします。

只今、執筆を止めています。復活は10月、11月辺りを目処にしています。

あらすじ

新暦65年。

この年、少年、少女の運命を変える2つの事件があった。

1つは“PT事件”と称される事件。

この事件で、本来出会うはずがなかった少年少女達が出会った。

その魔法と呼ばれる非現実的なものを通じて。

少年少女達は、この事件の根本——ロストログア“ジュエルシード”を巡り戦いあった。

しかし最終的には、悲しい終わりが待っていた。

それから約半年ほど経ち。

闇の書事件と呼ばれる事件が起きた。

闇の書という因縁のロストログアを巡る事件。

少年少女達の苦悩の末、それは一種のハッピーエンドに終わる。

しかし、それは本来あるはずの未来に歪みを与えたもの。

歪みは肥大していく……歪みは歪みを生み、さらに歪みを生む。

そうしてあるはずのない未来が生まれる。

この世界は歪んだ未来を進む……。

魔法少女リリカルなのは、永久に受け継がれる意思、

始まります……。

番外編 『光輝達の中学期』

●番外編『部を作ろう』

【新暦66年 6月5日】

ここは、聖祥大付属中学校のとある教室の昼休み。

「よし、部を作ろうぜ」

「バカ“は”休み休み言え」

“も” だろ！ 全バカに対して、言うんじゃない！」

話し出したのは、筧秋平。茶髪の少年で、中学一年生。それに答えるのは、八神光輝。黒髪の少年で、同じく中学一年生。

二人は、小学校からの悪友同士。小学校の頃は、二人合わせて、龍虎と呼ばれていた。

「ハア、急に何だよ？」

「だってよお、お前は中学卒業したら、時空管理局で働くんだろっが。ここで思い出作っとかねえと後悔するぜ」

溜め息を吐いて聞く光輝に、秋平は肩を組んで、そう言ってくる。秋平は数ヶ月前の闇の書事件に居合わせたため、光輝から事情は聞いている。

「……で？ 何作るとか、どうやって作るとかわかってんのか？」

「さあ？」

「実家に帰らせていただきます」

「何でだよ！？ てか、早退する気満々じゃねえか！」

光輝が手早く荷物を纏めて、家に帰ろうとするのに、秋平がそうツツコミを入れる。

「あのなあ、俺だつて暇じゃねえんだ。何の計画性もないもんに付き合つてられるか」

「じゃあ、計画性がありやいいんだな」

「ああ、ハイハイ。あつたらなあ」

「約束だからな！」

光輝はどうせそんなこと出来まいと思い、適当に返事をする。それに秋平は、急いで教室を飛び出していった。

（つたく、相変わらず、下らねえことばかり言いやがつて。まあ、どうせ飽きて、また違うバカなこと言い出すんだろぅが……ああ、面倒くせえ）

「光輝！」

光輝がそんなことを考えていると、教室のドアが勢いよく開かれ、秋平が飛び込んでくる。

「今度は何だ？」

「フツ、これを見る」

光輝がそう言つと、秋平が一つの紙の束を差し出してくる。

「あ？ 部の申請方法？」

「おおよ！ どうだ！ これでいいだろ！」

「こんなもんどっから」

「俺にだって独自のルートが——」

「——どうせ美咲だろうが。ったく、余計なことしやがって」

秋平の言葉を途中でかつさらい、嘆息する光輝。

こうして、二人は部を作ることになった。

●番外編『その部の名は』

「さて、ざつと読んだところ、部員が5人と顧問が1人、後は部の活動内容の有無で、部として認められるみてえだな」

光輝が秋平の持ってきた資料に目を通して、そう言う。付き合う宣言をした手前、やらないわけにはいかなかったのである。

「そうか」

「で、どんな部にすんだよ」

「……………」

光輝にそう問われ、秋平は腕を組み、チクタクチクタクと考える。そして、ピンツと思い付いた。

「人々の願いをどんなことでも対応する部活！　ってのはどうだ？」

「実家に帰らせていただきます」

「二度も同じネタはやめえい！」

秋平の発言にええゝつとなった光輝は、再び実家に帰る宣言。しかし、秋平に止められた。

「あのなあ、よく考えてみる。自慢じゃねえが、俺達が小学生時代に、一つでも人の助けになるようなことをしたか？」

その光輝の言葉で、秋平は考える。

ある先生にカツラ疑惑が生まれた。真相を確かめるべく、釣竿を用意。セツトアップ。先生が入って来た瞬間——ッ！　捕ったどー！！

光輝と喧嘩して、教室崩壊。廊下に立たされる。再び喧嘩。廊下崩壊。今度は外に立たされる。グラント崩壊。最終的に帰らされました。etc

そう思いを馳せ、秋平はウンツと頷き――

「人の助けになることしかしてねえじゃねえか」

「今のどこにそんなシーンがあつた！！　ねえよ！　全くねえよ！」

そう言う秋平に、光輝は盛大にツツコミを入れるのであつた。

「まあ部の方針はこれでいいんじゃない？　次は部員だな」

「ハア……勝手にしろ」

何をする部活かが決まり、次に部員集めに入ろうという話になる。だが、ここで一つ問題がある。それは今の時期に關係している。今は6月である。6月なんて、既に皆部活が決まっているだろうし、帰宅部は部活に入りたくない連中の集まりだろう。部員が集まるのだろうか。

「よし、ここはセオリー通り、身内から攻めるとしようぜ」

「誰だよ？」

「美咲とザベルだ」

「反対だ」

秋平の発言をわずか零コンマの速さで、否定する光輝。

「何でだよ」

「美咲はともかくザベルと一緒にいるなんざ、ヘドが出る」

「お前どんだけ嫌ってんだ。おんなじとこで働くんだろ？」

「違うな。俺とあいつの働いてる場はちげえから、実質違ふところだ」

「そつなのか。まあいいや。聞きいくぜ」

「テメエは話し聞いてたのかよ！ 反対だっつったんだよ！」

とか何とか言いながら、光輝はザベルの元へ向かう秋平についていくのであった。ちなみに、光輝と秋平は同じクラスだが、ザベル、美咲はそれぞれ違うクラスだ。

そしてザベルのいる教室。

「ザベル君、誰か呼んでるよ？」

「え？」

ボサボサの長い金髪をした少年——ザベルがボーツと椅子に座っている、クラスの女子に言われ、教室のドアを見る。そこにいたのは、秋平と光輝であった。それに気づいたザベルは、急いで向かう。

「どうかしたの？」

「実は話があつて——」

「——ポケッとしてねえで、すぐ来いつてんだバーカ」

「なんだと！」

秋平が話そうとしたら、光輝の罵声が飛び、ザベルと口喧嘩に発展する。

「いい加減、俺を嫌うのやめろよな！」

「ハッ！ 嫌いなもんは嫌いなんだから、仕方ねえだろうが！」

「だからつて会う度に、罵声浴びせるなよ！」

「俺はお前に罵声を浴びせないと、死ぬ病気にかかってんだよ！」

「どんな病気だ！ 病名を言ってみろ！」

「ザベルバセイアビセナイトシヌーだよ！」

「そんなもんあるかー！」

激しい口争である。何というバカな口喧嘩だろうか。

「あーはいはい、お前らが仲良いのはわかったから、とにかく俺の話を聞け」

「仲良くねえ！」 / 「仲良くない！」

秋平の言葉に、光輝とザベルは同時にそう返す。しかし意に介さない秋平は、無視して話し始める。

「それでだ。ザベル、部活をやらないか？」

「部活？」

「そう、部活だ。俺らとやんねえか？」

「でも俺、管理局の仕事があるし、毎日とかになると無理だよ」

ザベルはそう言っただけで秋平の誘いを渋る。

「そこは問題ねえよ。暇なときに来てくれりゃあ良いし、条件はこのバカも同じだ」

「嫌なら無理して入んなくて良いぜ。てか、入んな」

「……（ムカツ）。じゃあ入る」

光輝の言葉にムカついたザベルは、売り言葉に買い言葉的な感じで、部に入ることになった。これで3人。残り2人。

「よし、じゃあ美咲のトコいっくかー！」

秋平が意気込んで、歩き出すのに、光輝とザベルがその後ろをついていった。

そして美咲のいる教室。

「美咲さん、また呼ばれてるよ」

「ハア……またですか」

女生徒に言われ、黒髪ロングストレートで、振り袖を着ている少女――美咲は溜め息混じりに立ち上がり、ドアの方へ向かう。

「今度は何ですか？ ザベル君まで、引き連れて」

「フッ……お前を我が部の参謀に迎える！」

「お断りします。それでは」

秋平が明言すると、美咲はコンマ数秒の速さで断り、身を翻し、去ろうとする。しかしそれは肩を掴む秋平に阻まれた。

「何故だ！」

「何故も何も、いきなりそんなこと言われて、はいと言う方がおかしいですよ」

「くっ……！ あまりの正論に言い返せない……だと……！」

美咲の至極全うな意見に、秋平が悔しがる。バカさ丸出しである。

「てかよお、美咲は生徒会役員だろ？ 部活は無理じゃねえか？」

「そうですね」

光輝と美咲の会話に、秋平が沈黙し、フツと笑い――

「もう誘わねえよおおお！」

涙を流し、爆走して、去っていった。

「秋平は一体どうしたんですか？」

「思春期ってやつじゃねえか？」

「それはなんか違うくないか……？」

残った3人は、そう会話を交わし、解散した。

さてさて放課後。

「よし、部員探すぞ光輝！」

「1人で探せ」

「じゃあ！ 出発だ！」

「人の話を聞け！」

結局押された光輝。2人は校門前で、部員集めを始めた。ちなみに光輝は今日、仕事はない。ザベルは仕事があるのでパスだ。

「誰かー！ 俺らが作る部に入らないかー！」

秋平が大声で呼び掛けるが、引かれるだけで、何の効果もなかった。というか、この2人は小学校時代から、奇異の目で見られていたため、好き好んで近づこうと言う奴は、そうそういない。

「何か面白いことしてる？」

と、思いきや一人いた。

「神戸凜奈か……何の用だ」

「むう……光輝君は相変わらずつんけんしてるね」

「ツンデレ仕様なんだよそいつは」

「ちつげえよ！ ぶっ飛ばすぞゴラァ！」

「やってみるやあ！」

緑色の髪の少女——神戸凜奈の登場に、何故か光輝と秋平は喧嘩に発展しかける。

「まあまあ二人とも落ち着いて。落ち着いてくれたら、私の今日のパンツの色教えちゃおっかな」

「……光輝……争いは……悲しみしか生まないよな……」

「俺はお前を見てると（情けなくて）涙が出るよ」

凜奈の一言に、急に遠くを見つめ、憂いを帯びた秋平に光輝が呆れる。

「そんなわけをお願いします！」

争いを止めた秋平は、凜奈に向かって、頭を下げる。

「……（チラッ）」

「ガハッ！」

凜奈のまさかのパンチラ行動に、秋平は空気に殴られたかのように倒れる。

「我が生涯に一片の悔いなし……（ガクッ）」

その言葉を残し、秋平は倒れた。しかし、忘れてはいけない。彼は戦い抜いたのだ。モテない男の生きざまを。さあ、彼を称え——

「黙れ」

「ぐへあ!？」

とりあえず、何となくウザったかった秋平を踏み潰し、黙らせる
光輝。

「で？ 結局何しに来やがった？」

「そんなにツンツンしないでよ。私もあなた達の部に入ってあげる
から」

「お前が？」

凜奈の言葉に光輝が、何企んでやがるといった目線を向ける。

「やだな、何も企んでないってば」

「……………」

凜奈がそう言うが、光輝は信じられないといった感じに、凜奈を
見る。

「もお……じゃあもう一人連れてきたら、入れてくれる？」

「は？」

その言葉を残し、凜奈はその場を去っていった。何だっただ
と、頭を掻く光輝。

「てか、足を退ける！」

そんな光輝に秋平が足を掴みながら、訴えてきた。とりあえずそ
んな秋平を、ゴミを見るような目で一瞬見て、シカトした。

(しっかし……あの野郎、何企んでやがる……)

光輝は下のゴミは気にせず、思考する。

「あゝいゝ」

と、そんな状態の2人に、凜奈が近付いてきた。てか、まだ数秒しか経ってない。よく見ると何かを引き摺っている。

「オイ、バカヤロウ。一体何だ……」

茶髪の少女——鮎原千鶴が抵抗するのも無駄と悟っているのか、面倒なのかわからないが、ズルズルと引きずられていた。

「千鶴ちゃん！ 君を部員の一人に任命するよ」

「ふざけるな、このバカヤロウ！」

「そしてお前はまだ部員でもないし、部もちゃんと出来てねえけどな」

「うわあああん！ 千鶴ちゃんと光輝君が私をいじめるよ」

千鶴と光輝の攻めに、二人に背を向けながら、大袈裟に泣き叫ぶ。

「女を泣かせるなんて、テメエは何様だ！ ロリコン様がコノヤロ

ウ！」

「ああ……！！」

「……す、すまん……んな射殺すような目で見んなよ」

ゴミ——じゃなかった秋平は下から光輝に叫ぶのだが、光輝の凄まじい殺気に萎縮した。

「何はともあれ、これでメンバーは揃ったんじゃないかや？」
「ん？」

光輝は凜奈の言葉に、順に指で指していく。

(このゴミ(秋平)と……俺……屑^{ザヘル}……えと、名前忘れた(千鶴)
……はて？ 4人しか……)

「ひどいよお！ 光輝君のバカーー！」

「ってちよつと待て！ 何で私は無条件で入ってるんだ！」

外された凜奈がまたも大袈裟に泣き叫び、何故か強制的に連れられた自分が入られているのに、千鶴は理不尽だとも言つように叫ぶ。

「ああ……何かもう面倒だな……オイ、ゴミ、もうこの二人でいいか？」

「俺は人数がそろえば問題ない！ さらに女の子だしなおい！」

「つか誰がゴミだゴラァ！」

「だそうだ。入っていいぞ」

「ヤッター！」

「私が了承してないだろ！」

スルースキルの発動した光輝には、もう誰の声も届かない。勝手にすべてが進められ、結局5人が部員となるのであった。

そんなこんなで、翠屋に集まった4人。

「でだ後は顧問なわけだが、それはまあ明日でいいだろ」
「面倒だから帰っていいか？」

「私も帰っていいか？」

「二人が帰るなら、私も帰ろうかな」

「お前らは協調性がねえのか……」

「そうだそうだ。もう少し協調性をつけたらどうなんだ？」

……………？

1、秋平。 2、光輝。 3、千鶴。 4、凜奈。 5、秋平。 6、？？
？。

「って誰だよ！」

数えた結果、人数に合わない声に秋平がツツコミを入れる。

「オレか？ オレは——「バカナ子」——だ！ って何すんだよ姫
！」

「姫って言うなー！」

「あう！」

突如始まった千鶴とバカナ子の漫才に皆が疑問符を浮かべる。とにかく、こいつ誰だよといった感じに。

この子はバカナ子。それ以上でもそれ以下でもない存在。ただただ存在しているバカナ子。

「そんな奴が何だってこんなとこにいんだよ？」

「楽しそうだったからついてきた！」

秋平が訊くとそう明るく話してきた。ていうかつまりは最初からいたはずなのだが……誰も気づかなかった。なんという影の薄さだろうか。ある意味才能である。

「じゃあもうそいつも入れたらどうだあ？」

「お前も興味が薄れてんだろ？」

「気のせいだよ。そんなことないよ」

「明らかにやる気ねえじゃねえか！」

もう椅子にもたれかかり、ぐでーつとする光輝。そんな光輝に喝を入れるように秋平は叫ぶが、光輝の反応はイマイチ。もう完全にやる気が削がれている。

「ああ……まあいいぜ。これで6人だ。人数的にはもう充分だろ。それでだ部の名前を決めたいんだが」

秋平はそう言って、部のやることを皆に話す。大雑把に言えば“なんでも屋”である。

「凜奈ちゃんとその仲間部」

「別に俺たちはお前の仲間じゃねえ」

凜奈の意見は光輝が、瞬時に却下。それに凜奈がお得意の泣き真似をするが、光輝は完全無視である。

「秋平と共に歩もう部！」

「お前は墓まで歩いてけ」

「俺に死ねってか！」

「良く言うだろ。Go To Helen、逝って良しってな」

「言わねえし、意味わかんねえよ！」

秋平の凜奈に被せた名前の部は、光輝に打ち返された。

「バカヤロウ撲滅部」

「もう部の活動内容と何ら関係ないよな、それ」

千鶴のやる気のない半目の状態から放たれた言葉も、光輝の前には通じなかった。

「ら——」

「『『『お前は黙れ』』』」

バカナ子の発言は全員に止められた。バカナ子涙目。

「てか、お前ら真剣に考える気あんのか？」

「たりめえだ！」

「それなりに」

「ない」

「あ——」

「『『『お前は黙れ』』』」

光輝の質問に秋平、凜奈、千鶴と続き、バカナ子の発言は皆に打ち消された。

「そういうお前は何かあんのか？」

「面倒だから帰ろうぜ部」

「それは今のお前の気持ちだろうが！ てか、それはただの帰宅部だ！」

そして光輝も結局やる気はなかったのであった。

「何だか楽しそうだね」

「士郎さん、すいません。騒がしくて」

「いや、構わないよ」

光輝が士郎に謝るが、士郎は手を振って、構わないと言う。それに光輝は「本当にすいません」と返した。

「光輝君は店長さんと仲がいいの？」

そこに凜奈が尋ねてきた。

「まあ、一応な」

「気になるな。教えて！」

「嫌だね。お前に教えると下らんことになりそうだ」

「ひどいよ！ 私のことをなんだと思ってるの！」

凜奈のその言葉に光輝は、うんと腕を組んで悩み、出た結論は

「しつこい取材班」

こんなもんでした。小学校時代は、インタビューとか言って、何度か迫られていたから出た答えだろう。

「何かリアル過ぎてやだよ……」

うるつと目に涙を溜めて、そう言う。

「仕方ねえ！」

秋平がだらけた空気を払拭しようと、机を叩き声をあげる。

「明日だ！ 明日俺が色々と考えてくる！ そんなわけで解散だ！」

その秋平の発言に皆立ち上がり――

「やっと帰れるか」

「あー、面白かった」

「ようやく解放か……」

「や――」

「……お前は黙れ」「……」

そうして全員やる気なんかなく、帰ったのだった。

●番外編『優しき光』

「くあ……」

解散した後、ダラダラと欠伸をしながら、歩く光輝。

「ん？」

「あつ……」

そんなとき、偶々なのはとフェイトに出会う。

「今帰るか？」

「うん。光輝君は？」

「バカに付き合ってたな」

なのはの問いに光輝はそう答える。それになのはとフェイトは、誰だろうと疑問符を浮かべる。

「秋平だよ秋平。まったく、面倒だったらねえなアイツは」

「友達にそんな言い方したらダメだよ光輝」

「フェイト、良く訊けよ」

光輝はそう言うフェイトに、屈んで肩を掴み、真剣な眼差しを向ける。フェイトは戸惑いながらも、訊く体制になる。

「バカの話ってのはな真剣に訊くと、こっちがバカを見るんだ。良く覚えておけ。バカに会ったときの役に立つ」

光輝の発言にフェイトは、えとつと悩み、なのはに困ったと視線を送る。それになのはが、わ、私！？といった反応を取り、どうしようかと悩み――

「た、たいへんなんだね！」

無難な返答をするのだった。

「なのは、フェイト……わかってくれるか……」

その言葉にジーンツと来た光輝は、2人の頭を撫でながら言う。

「さて、大分暗くなってきたし、送ってくぞ」
「え……でも……」

フェイトが悪いんじゃといった反応を取り、なのはも同じような反応を取る。それに光輝は溜め息を吐いて、2人の頭に手を乗せると、後で大きなしっぺ返しが来るぞ」

「お前らは遠慮し過ぎだ。もう少し年長者に甘えな。気張り過ぎると、後で大きなしっぺ返しが来るぞ」
「なのはとフェイトは、2人で目配せし、」じゃあ、お願いします」と言つて、送ってもらうことになった。

「訓練はどうだ？」

「にやはは、まあまあかな」

「私も」

「そうか」

光輝は2人の顔を見て、充実してるんだな と思う。だが同時に、なるべくなら普通の生活の中で幸せを見つけて欲しいがとも思う。だがこの2人がそう決めているのだから、今更止めることは出来ないし、尚且つ光輝は、なのは達と敵として戦ったことがあり、その想いの強さを知っている。止められるはずがない。

「光輝君はどうなの？」

「……そうだな。相変わらず扱かれてるさ。そりゃあもう死ぬほどな」

「大丈夫……？」とフェイトが尋ねる。

「問題ない。自分で撒いた種だしな」

「それは言えてるね」となのはが冗談混じりに言い、「ホントに」とフエイトも続く。

「言っじゃねえか、コノ」

「「キャッ」」

それに光輝が頭をグリグリしようとして、2人はそれを避けようと逃げる。3人とも笑顔だ。仲が良いことこの上ない。

そんなことをしていると、2人の家に着き、さよならをして、光輝も家に帰ったのだった。

●番外編『始動』

【新暦66年 6月6日】

明くる日の朝の教室。

「お前ら2人を呼んだのは他でもない。昨日の部活についてだ」
「アレ続いたのか？」

「お前らはどうあつても私を巻き込みたいんだな……」

秋平が真剣な面持ちで話すのに、光輝はまず秋平が覚えてたことに若干驚き、千鶴はもう解放してくれといった感じに言う。その2人の反応に秋平は、聞こえていないのか真剣な面持ちのままである。ちなみにこの3人は同じクラスである。3人は1つの机を囲むように座っている。

「これを見る」

秋平が1枚の紙を取りだし、机に置く。そこに書かれていたものは、様々な部の名前だった。

「どうだ？」

「却下だ」

「な・ん・で・だ・よ！」

その速すぎる返しに秋平は、若干涙目だ。

「お前の出すもんがまともなわけねえだろうが」

「ついでに言えば、意見を出すのも面倒だ」

「なんだ、意外と意見が合うじゃねえか……えゝ、ち……ちる？」

「千鶴だ！ このバカヤロウ！ 小学校の6年間一緒に一緒のクラスだろうが！」

「すまんすまん。小学生のときは、周りを気にしたことがなくてな。そんなことより、これまだ続くのか？」

「何で終わる方向なんだよ！ てか、お前のためだって言ってるだろうが！」

その秋平の叫びは、光輝には届かず、だるうっといった態度をと

られる。その態度に秋平がプルプルと震えだす。

「……もう知るかー！！勝手にしろー！！」

怒った秋平はそのまま自分の席に戻ってしまった。その秋平の様子に2人は肩を竦めて、席に戻った。

それから、昼休み。

「おい、3人とも」

3人の教室に凜奈とザベルが訪ねてきた。呼び掛けたのは凜奈だ。

「部活申請の準備できたよ」

その凜奈の言葉に、3人がドカドカドカと椅子から落ちた。

「ホントか！」

秋平が一目散に飛び出し、歓喜するように凜奈に近寄る。

「うん、さあ皆行くよ」

「マジかよ……」

「何で私まで……」

凜奈のまさかの手際に、光輝と千鶴は絶望した。

こうして、部が作られた。

その部の名は――

番外編 『光輝達の中学期 2』

●番外編『魔法少女?』

【新暦66年 6月6日】

まさかの部活始動。顧問は光輝と秋平、千鶴のクラスの担任教師——島崎寅二しまざき うんじ。無精髭を生やして、やる気の無さそうな先生だ。光輝が「アイツが良く引き受けたな」と言ったら、凜奈が「私に逆らえる先生なんていないよ」と身震いするような台詞を明るく吐いたらしい。そんな感じで今光輝達は、ある空き教室の前にいた。これから始まるのだ。その部の名は——

「“よろず部”、ここがその部室だよ」

よろず部。そしてこの空き教室が、部室だという。そして凜奈がガラッとドアを開けて、皆を招き入れる。

「何かスゲエごちゃごちゃしてねえか？」

「元演劇部の部室だからね」

光輝が入った矢先部屋にある大量の段ボール箱を見て、そう感想を話すと、凜奈がそんなことを言った。それに光輝が お前まさか……といった視線を送る。それに凜奈が慌てて、手を振って否定する。

「勘違いしないでよ！ 元々今年で演劇部は、終わってるんだから」
「なんだ、てつきりお前が潰したのかと思ったぜ」
「私はそんなことしないよ！」
「どうだか？」

光輝の態度に凜奈が、「光輝君のバカ！」と言って、不貞腐れて段ボールの物色を始めた。

それを見た秋平も何か楽しそうに思ったのか、ザベルを連れて、自分も物色を始めた。

その様子に光輝と千鶴は、肩を竦めて2人揃って、壁に寄りかかるように座った。

その2人の目の前では、凜奈が小道具用の魔法のステッキを見つけ、妙な呪文唱えて、妙な決めポーズをしている。それに秋平、ザベル、バカナ子が「おおー」と拍手を送っていた。

「なあ、チル」

「千鶴だ。略すな、このバカヤロウ」

「それはどうでも良いが、あのバカはいつの間にかいた」

「私的にはどうでも良くないんだがな。どのバカだ？」

「あの特徴のねえバカだ」

「アレか。気にするだけ無駄だろうな」

光輝は そんなもんか と特に気にも止めずに、ダラダラと目の前で、繰り広げられる良くわからん魔法戦を見る。

「お前は混ざらねえのか？」

「冗談言つな。あんなもの私に似合うか」

光輝はそれに「ふむ」と頷き、何かを考える。

半目のやる気無さそうな少女が、フリフリの服を来て、「リリカルマジカル」とクルクル回り、「リリリリリ〜ン」と回転を止めて、正面を向き「目覚ましだ〜いすき（キャピ）」と決める。

「ぶわーはっはっはっはっ！！」

光輝はあまりの可笑しさに、腹を抱えて笑った。

「死ぬまで殴って良いか……？」

「すいませんでした」

が、千鶴から発せられたすべてを殺さんとするような、凄まじい殺気に謝ざるを得なかった光輝だった。

●番外編『憐れ……君に幸あれ』

【新暦66年 6月28日】

聖祥大付属中学校。今日は雨が降り、陰鬱とした空気。どうやら明日まで続くような雨らしい。その放課後。よろず部では、珍しく全部員が部室に集まっていた。

「——ということなんです」

「なるほどな。わかった。任せときな」

そこに1人の客がいた。どうやら、よろず部に依頼のようだ。応対しているのは、秋平だ。他の皆は周りに散らばって訊いている。何気に初の依頼だ。客は話し終わるとその教室を去っていった。

「お前は正真正銘のバカだな」

と光輝が秋平を罵ると――

「バカヤロウは後先を考えないから困る」

と千鶴が続き――

「秋平君だけじゃないの？」

と凜奈が言つて――

「皆、言い過ぎじゃ……」

とザベルがフォローに回る。
それに秋平は――

「だあー！ 文句ばつか言っくんじゃねえ！ 部長は俺だー！ 俺の言うことは絶対なんだー！！」

まるでだっ子のようにキレるのだった。

「じゃあどうすんだよ？」

「うっ……」

「もちろん何か計画があるんだよね？」

「うっ……」

「もし無いなら正真正銘のバカヤロウだな」

「うっ……」

だが、秋平は光輝、凜奈、千鶴に責められ、ノックアウト寸前だ。

「ま、まあまあ、とにかくさ、何かやってみようよ」

「ザベル……なんて良い奴なんだお前は……！」

秋平はザベルの優しさに、感動の涙を流し、手を取る。

「甘やかすんじゃねえ。つけ上がる」

ザベルのその行為に光輝が、怒りを露にする。何だか犬の睨みた
いである。

「まあ、でも引き受けちゃったものはしょうがないよね。みんなで
どうするか考えよう」

凜奈がそう提案して、批判してた者も溜め息交じりに、了承を示
す。

さて、一体何故にここまで秋平が非難を浴びているのかというと、先程の客の依頼が原因である。その依頼というのが――

「それで“明日までに雨を止ませる”っていつてもどうする？」

今、光輝が発した“明日までに雨を止ませる”である。まあはっきり言って不可能だろう。自然の事象を人間がどうか出来るわけがない。故に皆ああして怒っていたのだ。

「任せときな！ 俺が何の計画もなく受けたと思ったのかよ！」

「ああ」

「うん」

「……………」

秋平はあまりの自分の評価に、膝から崩れ落ち、両手を地面につけて、落ち込むのだった。

「それで何だよ？」

「フツ……………よく訊けい！」

光輝が訊くのに復活した秋平が、勢いよく立ち上がり、何故か偉そうにする。

「日本には昔ながらの雨を止ませる方法がある！ 人はそれを“てるてる坊主”という！」

「……………」

その発言に皆の冷たい視線が、秋平に注がれる。その視線は「あれだけ言ってそれ……………」と言っているようだった。

「他にはねえか？」

とりあえず光輝はなかったことにして、他に何かないか問うが、何もなかった。

「はっはっはっ！ 俺に従うしかないようだな！」
「チッ」

片手を腰に当て、もう片方の手を光輝に指さし偉そうにする秋平に光輝が、悔しくて舌打ちする。

「仕方ねえな。アイツに訊いてみるか」
「そうだね」

だが秋平の意見は通らず、光輝は部室を出て、どこかに向かうことにした。それに続いて、凜奈も出ていき、更には千鶴、ザベル、バカナ子も出て行った。残された秋平は偉そうな体制のまま固まり、状況がわかった瞬間、フツと息を吐き――

「俺って一体……」

自分の権限の無さを嘆くのだった。

●番外編『てるてる……少女……？』

「……えっ……？ 雨を止ませる方法……ですか？」
「ああ」

会いに来たのは、風鳥院美咲。現在、生徒会の部屋まで訪れ、美咲を呼び出して、こうして話している。

「急に押し掛けてきて何かと思えば……」
「そう言うな。てか、言うなら部室でイジケてるであろっバカに言え」

美咲が呆れて言うのに光輝は、部室の方角を指差し、そう言う。

「それより何かない？ 美咲ちゃんだけが頼りなんだよ」
「そんなこと言われても……」
「何かないかな美咲」
「え〜と……」

凜奈とザベルの追求に、美咲は困り顔。

「じゃあ……てるてる—— “坊主” ならバカと同じレベルだぞ」
——…… “少女” ……はどうですか？」
「」「」「」「」「」「」

美咲の明らかに苦し紛れな答えに、皆が沈黙する。

「ち、違っんですよ！？ ちゃ、ちゃんと代々伝わってるものなん

ですから！？……………その……………きっと……………」

顔を真っ赤にしながら、すごい苦し紛れな言い訳に、最後は消え入りそうな声で言う。

「ハア、どうなんだよ？」

「え、えっと……………ち、小さい女の子を布団が何かで、簀巻きにしたら……………その……………吊るして、その女の子があ、雨雲に来ないようにお願いするんです……………」

溜め息混じりに訊いた光輝に、美咲は赤い顔を見られないように俯きながら話す。実際、今考えついたものだし恥ずかしいのだろう。

「も、ももも面白いでしょう！？わ、私、生徒会があるので！」

もう恥ずかしくてこの場にはいられないと思い、美咲は生徒会室へと逃げ込んだ。

「バカバカしいな。私はもう帰る」

「……………」

「なんだ、バカヤロウ」

もう付き合ってられないと帰ろうとする千鶴を、光輝と凜奈が後ろからそれぞれ肩を掴み、進行を妨げる。

「珍しく気が合うじゃねえか、神戸凜奈」

「そうだね。それより、いい加減そのフルネーム呼び止めない？」

「ザベル、部屋に布団が何かはあったか？」

「え？ ああ、確か」

「無視しないでよ光輝君！」

「ちょっと待て、私に何をさせる気だ？」

「「ふふふ……」」

不気味な笑みを浮かべる光輝と凜奈。嫌な予感しかない千鶴。何なのかわからないザベルとバカの子の構図が今出来上がった。

ところで部室では――

イジイジ。

秋平がイジケていた。部屋の隅で体育座りで、床にのの字を書くという典型的なイジケ方である。

「あ？ 何だ、やっぱり、イジケてたか」

「イジケてねえよ」

そこに光輝達が帰ってくる。光輝の言う事に秋平はそっぽを向いて言う。

だが言葉とは裏腹に、確実にイジケている秋平。

「まあいい。準備するぞ神戸凜奈」

「うん。それとフルネーム呼び止めてって言ったよね」

「気にするな。ザベルもさっさと手伝え」

「う、うん」

「気にするよ！」

「なあ、オレは何すればいい？」

「廊下に立ってろ」

「わかった！」

こうして光輝は千鶴を捕らえ、凜奈とザベルは準備に取り掛かり、

バカな子は廊下に立ち、秋平はイジケるといふ構図が出来上がった。

そして――

「オイ、バカヤロウ。これは何のマネだ？」

千鶴が布団を顔が出るように包まれながら、天井に吊られた状態で光輝と凜奈に訊く。

「「てるてる少女」」

すると2人はさも当然であるかのように答えた。

「なんでだよ！ 何で私がこんなことしてるんだよ！ 理由を説明しろこのバカヤロウ！」

「仕方ねえなあ。説明しよう――」

この際やってみよう！

「ってわけだ」

「どういうことだよ！ 理由になってないんだよバカヤロウ！」

理由がもう適當すぎるのに、千鶴が吊るされながら、憤慨する。
するが、結局吊るされて何も出来ないため、手は出ない。

「それにしても千鶴ちゃん、そうしていると可愛いね♪ お持ち帰りしたい気分♪」

「だあー！ ふざけるなバカヤロウ！ 降ろせー！」

揺れる揺れる。しかし、解けない。それに悔しがる千鶴。

「……何してんだ？」

そこにイジケていた秋平が、気になって話しかけてきた。

「てるてる少女だ」

「なんだよそれ？」

「てるてる少女だよ」

「だからなん——」

「てるてる少女だって」

「……そうか……てるてる少女か……」

「心を折られるなバカヤロウ！」

もう何を訊いても無駄と判断した秋平の心が折れた。

「さあ願うんだ千鶴ちゃん！ 貴女の想いが雨を止ませる！」

「止むかバカヤロウ！」

もつともである。

「せっかくだしやってみるよチル」

「だからその名で呼ぶなバカヤロウ」

「頑張れ姫！」

「呼ぶなって言ってるんだよこのバカヤロウ！」

もうふざけてるだけだろコイツラ……と思わなくもないが、大真面目である。

「……ねえ、光輝君？」

「何だ？」

「何で千鶴ちゃんは今アダムで呼んでるのに、私はフルネームで呼ぶの？」

「……ノリ？」

「むう……名前で呼んで」

凜奈がふくれっ面で言う。どうやらフルネーム呼びは、どうしても嫌らしい。

「面倒——」

「光輝君ってね、妹に大嫌いって言われて号き——」

「凜奈様と呼ばせてください」

「“様”はいらないよ」

「了解した。だからここでそのことは言うな」

光輝が従順になった。やはり、凜奈には逆らえなかったようだ。

「私を無視するな！」

そこに千鶴が憤慨。まあそりゃあ簀巻きにされて、吊るされた上に無視されれば怒るだろう。

「みんな、そろそろ降ろしてあげようよ。こんなことで雨が止むわけないし、千鶴も可哀想だよ」

「ザベル……」

「じゃあお前は何か他に案はあるのか？」

「それは……ないけど……」

「なら口を出すな。意見を通すなら、それなりの道理を持って臨みな」

「うつ……ごめん千鶴……」

「負けるなよ！ 戯言だよ！ 引くことないよ！」

ザベルも光輝の言葉に、心を折られてしまった。こうなるともう止める奴が誰もいない。やるしかない状況である。

「……どうすればいい……」

千鶴は観念した。正直このままだと、一生吊るされたままな気がしたのである。

「そうだなあ……とりあえず、雨雲様に丁寧に帰っていただく旨を謙譲語で言ってみよう！」

「無駄に細かいよ！」

「トライレッツ！」

「それを言うなら逆だよ！ レットトライだよ！ 間違えるなよ！」

ツッコミの忙しい千鶴であった。

まあそんなこんなで、とりあえず千鶴は、雨雲に向き合う。

「あの……雨雲様、実はですね、もう雨の方は十分なんです。あ！ 違うんですよ！ 雨雲様が要らないと言ってるのではないのです。ただ、最近雨雲様が働き詰めなのを見て、そろそろお疲れではないのかと心配になった所存でして……」

そう千鶴が雨雲に向かって、敬語を話す。実にシユールな光景だ。てか、謙譲語は無視か。こんなもので雨が止むはずが……。

「ん？ 小降りになつてきたぞ？」

って止んだら!? まさかの千鶴の願いが届いたのか否かわからないが、段々と小降りになつてきている。どういうこっちゃ？

「わーはっはっは！ そうだ雨雲！ さっさと去れってんだ！」

ザーッ！ ザーッ！

秋平の言動で、雨の威力が増した。

「このバカヤロウ！ あ、いえ、違っんですよ雨雲様。雨雲様に去って欲しいなんて、思う人なんていません。ですが、もう田んぼも潤いましたし、そろそろお疲れかと思えます。休まれてはいいがですか？」

また雨が小降りになってきた。

「千鶴ちゃん、スッゴイ！ 雨乞いの家系？」

「違っよ！」

「呼んだか？」

「呼んでないよ！ コテコテのボケかますなよ！」

千鶴は“ツツコミ少女”、“てるてる少女”の称号を得た。

「要らないよそんな称号ー！ー！！」

千鶴のツツコミが大炸裂した。

「なあ、オレはいつまで廊下に立ってれば良いんだ？」

「一生立つてろよバカヤロウー！ー！！」

●番外編『深まる絆』

あの後、雨も止み全員で、下校途中。

「いやあ止むもんだねえ」

凜奈が楽しそうに笑いながら言う。本当に楽しそうだ。

「あんなことをさせられた私の身にもなれ」

しかし千鶴はドツと疲れたといった感じに、言葉を発する。まあそりゃあ疲れるわな。

「それにしても本当に止むなんて……」

「世の中不思議なことがあるもんだなあ」

ザベルと秋平も不思議そうに言う。

「しっかしあの秋平のイジケようつたらなかったぜ」

そこに光輝がケラケラとバカにするように笑う。

「あ……？　だとオラア……！　あ？　殺る気かよ？」

「ああ……？　殺つてやろうか？　あ？」

「あんだよテメエよお……！　いつの間に上目線で話すようになったんだよ？　あ？」

「あ？　うるせえんだよイジケ虫がよお……！」

「ああ……！ イジケてたんじゃねえんだよ……！ ただ床と話してただけだつつうの！」

光輝と秋平が物凄いメンチを切って、今にも喧嘩しそうな雰囲気である。

「ちょ、ちょっと2人とも止めろって！」

「すっこんでろ甘ちゃんが！ 帰って乳でも吸ってろ！」

「わりのこイツは、ぶっ飛ばさなくちゃわからねえ奴なんだなあ！」

ザベルが止めにかかるが、光輝も秋平も完全に聞く気がない。そしてザベルもそんな言われように、段々ムカついてくる。

せつかく怪我とかしたら、痛いし危ないから止めようとしてるのに、今まで何度も注意してるのに止まったことがない。しかも光輝に関しては一言多い。いい加減ザベルも我慢の限界である。

「ああそうかよ！ いいよ！ だったら俺も力ずくでわからせてやる！」

「上等だ来いよ甘ちゃん！」

「いいねえ！ 楽しくなってきたあ！」

撃！！

そんなこんなで3人の殴り合いが始まった。

「アハハ、やっぱり男の子は血気盛んなのが一番だね」

「バカヤロウばっかりだ……」

凜奈と千鶴はその3人の行動に、それぞれ楽しんだり、呆れたり

と反応を示す。

「でも、ま、喧嘩してるのにさ……」

凜奈は喧嘩をする3人を見る。殴ったり蹴ったりと、暴力を振るっているのだが……。

「楽しそうだね」

アハッと笑って言う凜奈。皆、笑っているのだ。言葉では罵っていても、楽しそうに笑っている。コイツらはこうして身体でぶつかって、友情を深めていくタイプなのだろう。だから、幾ら罵ろうが、憎まれ口を叩こうが、喧嘩をして、終わった後には、もう仲直りをしている。そんな関係なんだろう。

「いいなあ……」

「……………」

羨ましそうに言う凜奈が、一瞬影を落としたように見えたが、千鶴はそれを見逃した。他人の過去に、干渉する気はないのだろう。そういうのも一種の友達関係なんだろう。

そうして終わっていく。

初めての依頼の終了と共に……。

ブローグ

「はあはあはあ……」

「どうした？ その程度かよ」

そこでは黒い長髪を後ろで纏めた男が息を切らして膝を付き、それを黒い短髪の男が見下ろしていた。

「ま……だだ……！」

「ふん……らあ！」

「ガハッ！」

長髪の男が立ち上がり、短髪の男に殴りかかるが、短髪の男は軽くそれを避け、蹴りを入れる。その時、短髪の男のポケットから、何かが落ち、長髪の男の前に落ちる。

「はあはあ……」

「もう諦めな。はやてにはもう近付くんじゃねえ」

「い……やだ」

「どうやら、まだわかんねえみてえだなあ！」

短髪の男から凄まじい威圧感が襲いかかり、長髪の男は一瞬怯むが、その瞳は光を失っていない。

「はやては……俺を受け……入れてく……れた……俺の秘密を知つても……まだ、友達だと言ってくれたんだよ……！ だから、俺は

……絶対にはやてを裏切らねえ！ はやてが友達だと言ってくれ
なら……俺はずっと友達でいる！」

その瞬間、長髪の男の目の前に落ちていた短髪の男から落ちた――
黄緑色の宝石が光を放つ。

「なん……だと……！」

「これは……？」

短髪の男は驚きに目を見開き、長髪の男は吸い寄せられるように
その宝石を手につった。

《マスター 認証開始………終了。マスターの想像する服装をお決
めください》

「え……と……動きやすいのがいいな……よくわかんねえけど」
《了承。服装を生成します》

その宝石から発せられた機械音声とともに、さらに光が増し、長
髪の男を包み込む。

そして光が消えた時にいたのは、黒いインナーに、肩が隠れるほ
どの白い上着。白い短パンと動きやすそうな服装をした長髪の男が
いた。その拳には機械じみた籠手をはめていた。

「これは……何かすげえ……これなら戦える」

「まさか……リンカーコアを持ってるなんてな……」

短髪の男はそう呟き、自分も長髪の男のように変身をしてみせる。

「ぜってえ負けねえ」

「潰してやるよ」

再び2人は戦闘に入った。

「ん……？」

1人の少年が目を覚ます。

「夢……か……」

ベッドから体を起こし、先程の光景を思い出し、そう呟く。

「思えば、あれから俺の道が決まったんだよな」

少年はそう呟き、早々に着替えを済まし、朝ご飯を食べに行った。

第1話 『平穏な日常の中に潜むモノ』（前書き）

【それは平穏だった】

【いつものように学校に行って、いつものように帰る】

【そんな何でもない日常】

【でもそんな日常がみんな好きだった】

【だけどそんな日常に招かれざる客が来て】

【それでも私たちは……】

第1話 『平穏な日常の中に潜むモノ』

【新暦71年 7月3日】

そこにはごく普通の一軒家が立っていた。その家の玄関に、一人の少年とおじいさんとおばあさんがいた。

「じいちゃん、ばあちゃん、行ってくるよ」

「ああ、いつてらっしゃい」

「うん、いつてらっしゃい」

少年は鞆を持って、優しそうなおじいさんとおばあさんにそう言っ
て、出掛けていった。

少年が向かった場所は――

聖祥大付属中学校。

の門が閉じかけていた……。

「って、待った待ったー！」

少年はギリギリ間に合い、学校の敷地内に入る。

「また遅刻ギリギリか獅童。いい加減、余裕を持ってきたらどうだ？」

門を閉めようとした先生が、呆れ半分で、少年——獅童蓮弥を注意する。

「スイマセンデシタ。ハンセイシテマス」

「なんだその一欠片も誠意の籠っていない謝辞は」

「キノセイデスヨ。ヤダナアセンセイツタラ」

「その片言をやめんか！ お前は全く……」

「まあ気にすんなよ先生。じゃあ、早く教室行かなきゃいけないんで」

蓮弥はその先生を置いて、自分の教室に急いだ。それに先生は、つたくと呆れるのだった。

そして、蓮弥はガラガラと教室のドアを開け、中に入る。

「蓮弥！」

「おわっ！」

ドアを開けると、目の前には、八神はやてが居り、怒鳴られたことに蓮弥は驚く。

「またこんなギリギリに！」

「はやて、いつもの事だろ」

「だからゆうつるんや！」

はやてに説教を食らった蓮弥は、諦めの境地を開き、自信満々に

そう言う。だが即座に、はやてに、ツッコまれた。
そんな様子を微笑ましく、見つめる四人組。

「相変わらず仲良いわねえ」

——アリサ「バニングス。

「いつもの事だよ」

——月村すずか。

「でも、こう毎回見せつけられると、なんだか恥ずかしい感じが」

——フェイト「T「ハラウン。

「ほんとだよね」

——高町なのはである。

そんななのはに——

「なのはちゃんにだけは言われとうない」

「なのはにだけは言われたくないな」

はやてと蓮弥が、同時にツッコミを入れる。

「え？ え？ なんで？」

「ユーノ君と一緒にいるとき、いつもラブラブしとるくせに」

「そ、そんなことないと思うけど……」

はやてに言われ、少し顔を紅潮させて、あははとごまかすように笑うのは。

そんななのは横で――

（そんなことあるよ、なのは）

と、言葉にはしないが、心の中で呟くフェイトだった。一緒にいると疎外感が、全身を襲うため、いたたまれなくなるようだ。

「はい、みんな！ 席に着いて！」

そんな和やかな雰囲気は、担任の先生がやってきて、払拭された。

さて、では此度の男――獅童蓮弥について、少し話しましょう。

彼の名前は獅童蓮弥^{じやうどうぜんや}。中学3年生だ。彼は中学入学時にこちら――海鳴市に越してきたため、聖祥大付属小学校にはいなかった。彼には運命の分岐点が二つあった。

一つは、八神はやてに会ったこと。二つ目は、八神はやての兄――八神光輝に会った――というのは些^{いさ}か語弊があるかもしれないが、この二つが、獅童蓮弥の未来を大いに変えることになったのは確かだろう。

そうそう、彼の容姿についても触れなければならない。

彼は一瞬、見間違うほどの女顔である。あと声変わりもしていない。さらに後ろで一つに纏められてるが、相当長い黒髪をしている。そして、今は母方の両親に引き取られて、暮らしている。

ちなみに八神はやてとは、特になんでもないが、ある一件以来、獅童蓮弥が特別視してるのは確かである。

今のところはこんなところだろうか。他はまた追々。

それでは、あっという間に昼休み。

「はやて、師匠は帰ってきたのか？」

「兄さんはまだや……連絡はくれとるから、大丈夫やと思うけど……」

皆で昼御飯を食べながら、蓮弥がはやてに話しかけ、それに、はやてが答える。

「管理局のお仕事ってそんなに忙しいの？」

「うーん、寮で暮らしてない限り、4ヶ月も帰れないなんてことそうじゃないと思うけど……」

さすがが尋ねるとなのはがそれに答える。すると、はやての表情が少し暗くなる。

「はやて、また変なこと考えてない？ 私のせいで、とか」

表情の暗くなったはやてをフェイトが、問い詰める。

「私のせいなのは間違いないやろ。私がしっかりしottaぶあ」

「は、や、て」

はやてが悲観的になるのを、フェイトがはやての両頬を手で、包み込む。

「そついう自分を責めるところ、はやての悪い癖だよ」

「そうだよ、はやてちゃん。大体あれは光輝君が、勝手にやったことだよ」

フェイトとなのはは、少し怒るように、はやてに言う。なのはは、はやての他に光輝にも怒っているような、雰囲気もある。

「……うん。ごめんな二人とも。変なことゆつてもうて」

あははと努めて明るく笑い、頭をかきながら、謝辞を述べる。

「でも、悪い癖っていったら、なのはとフェイトもよ。すぐ無茶するんだから」

「ご、ごめんなさい」

「反省してます……」

アリサがそう言うのに、フェイトとなのはは、素直に謝る。なんだかそんな雰囲気がおかしくなり、皆笑い出す。

この二人は前に大怪我を経験したことがあり、それはやはり無茶をしたからである。そんな二人を周りは心配してみたりする。本人にもある程度、自覚はあるが……あっても無駄というか……とにかく、無茶は治らないのだ。だからこそ周りは、この二人を注意深く見てたりする。無茶をしないようにと。

そして、どこか和やかな雰囲気は終わり、放課後。

「さて、帰るか」

「ちよい待ち」

そそくさと帰ろうとする蓮弥の肩を掴み止める、はやて。

「今日は図書館で勉強の予定やる？ テストも近いんやから。このままじゃ赤点やで」

「別にいい……」

「……よくない！」「……」

「どわっ！？」

五人娘に一齐に詰め寄られ、言われたために、驚く蓮弥。

「別にこんな勉強役に立つ訳じゃ……」

「そうゆう問題やないやろ……もう、あいな——」

『——獅童おお蓮弥あああああああ！！』

その瞬間、クラス中の男子から、地響きでも起こさんばかりの聲が轟く。

「きいさまあ！ 我らが学年——いや！ 学校のマドンナ五人の誘いを受けながら、断るだとお！ 成敗だあ！！」

『成敗だあ！！』

先頭の中学生とは思えぬ屈強な男が、蓮弥に物申し、それに続くように他の生徒が、大声を上げ、蓮弥に一齐に襲いかかる。

またこうなのかよ！

心の中で、悪態付きながら、蓮弥は教室を飛び出した。

そして、男子のいなくなった教室で、はやて達は、「はあ」とため息を吐くのであった。

そして、蓮弥は逃げ切れず、校門前で囲まれる。

「何でお前のような“女”みてえな野郎がモテるんだ!!」

「……今、なんつった……」

「何でモテるんだつつたんだよ!!」

「……その前だ……」

「あ……？ 女みてえな顔……？」

ピキッと何かが割れた音がした。

「誰が超絶美少女顔だゴラァ!!」

「誰もそこまで言ってねえが、殺っちまえ!!」

キレた蓮弥と男子共が、ぶつかり合う。

「おおらぁ!!」

蓮弥は迫ってきた男子達を回し蹴りで、数人を吹き飛ばす。

その瞬間、止まった蓮弥を一人の男子が、後ろから羽交い締めにする。

その状態の蓮弥に男子が殴りかかる!

蓮弥はそれを羽交い締めにした男子を持ち上げ、殴りかかってきた男子に向かって投げる。

そこから蓮弥は、驚異的なスピードで、男子生徒共の懷に飛び込むと、鳩尾に拳をめり込ませる。

さらに跳躍!

――八神流闘術『はっしん薺波・拳せいば』――

蓮弥が下に向けて空気を殴ると、下にいた生徒は短い悲鳴をあげ、倒れていく。

蓮弥は着地すると、その場で逆立ち。その瞬間、開脚し、飛び掛かってきた生徒を、回転して蹴り飛ばした。蹴り飛ばされた生徒たちは、全員気絶した。

「最後はお前だけだな山田」

「俺は佐藤だ！ ふんっ！ そう何度もやられると思うなあー！」

山田——ではなく佐藤は、地面を走り、蓮弥に突撃する。

山田——じゃなくて佐藤が、蓮弥に迫るとその拳を振り上げ、蓮弥の顔面に向かって、その拳を放った！

「甘いぜ山田！」

「だから佐藤だ！ この細腕で止めるか蓮弥あ！」

山田——そうではなく、佐藤の巨軀から、放たれた拳を蓮弥は、片手で受け止める。

「戦いつてのは、力だけで決まるもんじゃねえんだよ山田！」

「佐藤だ！ ならば対格差では、俺の勝ちだ！ このまま押し潰ししてくれる！」

山田——もう山田でいいや。山田は止められた拳に力を込め、蓮弥の体を押し潰そうとする！

「！！」

「体格差がなんだって？」

蓮弥が山田の拳を自らの拳で、撃ち抜くと山田の拳は、力を失っ

たようにだらんとたれる。

―八神流闘術『波動掌・衝破』―

「ぬう……！ 流石だ蓮弥。しかし、まだ負けん！」

山田は片腕が使えなくとも、再び立ち上がる。

負けられないのだ。このリア充には、絶対に。すべてのモテない男子が力をくれている。声だ……声が聞こえる。

―頑張れ山田！―

―俺達の想いを奴に思い知らせてやれ山田！―

―リア充を滅してくれ山田！―

―リア充には死あるのみ、鉄槌を下してやれ山田！―

―リア充死ネ、山田殺レ―

だから……！！

「俺は佐藤だああああ！！」

山田の涙の咆哮が轟き、山田と蓮弥の姿が重なる。山田の放った拳は、蓮弥の顔の横を掠め、蓮弥の拳は山田の鳩尾を捉えていた。

「そういう熱いところ……嫌いじゃなかったぜ山田……」

「俺は……佐藤……なんだ……」

まるで、山田が死んだようだが、ちゃんと生きてます。山田は倒れ、周りの生徒は動けるようになるも戸惑い始める。

「まさか山田がやられるなんて……」

「仕方ない……ここは……」

「撤退だー！！」

そしてこの場には、倒れる山田と勝利を噛み締める蓮弥がいた。

「れ〜ん〜や〜」

「はっ！」

しかし、はやて達に捕らえられた蓮弥は、図書館に向かうことになったのだった。

さてさて、図書館では。

しかし、真面目すぎだろ全く……アリサやすずかは、高校に行くから当たり前かもしれないが、はやて達は管理局の仕事に専念するために、高校には行かない予定だったのに。俺も管理局で本格的に働くつもりだし、勉強なんかしたところで……。

「蓮弥！」

「うおっ！　っと……何だ？」

色々と考えているところをはやてに急に呼び掛けられ、焦る蓮弥。

「聞いてなかったんか……」

はやてはそんな蓮弥に呆れて思う。

最近兄さんに似てきてる気いしてたけど、勉強嫌いなどこまで似んでも……。

「どうした？」

蓮弥は自覚ないしなあ。

「はあ……」

「????」

そんな風に、はやては思い、ため息を吐く。そんなはやてを蓮弥は、不思議そうに見るのだった。

それから、蓮弥にまた説教し、勉強を始める。

「皆さん、お勉強ですか？」

「美咲さん!？」

突如後ろから声を掛けられ、振り向くといいたのは、ふうちゅういんみさき風鳥院美咲。

黒いすらりとした長髪。束ねた髪を垂らし、束ねた部分には鈴がついている。美女。背が高く178cmほどある。八神はやての兄

——八神光輝の小学、中学時の同級生であり、風鳥院流絃術と呼ばれる古流術派の使い手でもある。今は聖祥大付属高校3年に通っている学生だ。

「蓮弥、お前も勉強か……面倒だよなあ」

「秋平さん……ですよね！」

「意気投合すな！」

「意気投合しない！」

次に現れたのは、かけいしゅうへい 笥秋平。

茶髪のボサボサ髪。不良っぽいが、なかなか格好良さげな顔。背は高く183cmほどある。こちらも八神光輝とは小学、中学時の同級生で、笥流針術と呼ばれる古流術派の使い手。そして、今は聖祥大付属高校に通う学生。

「ということは、美咲さん達も勉強ですか？」

「ええ、秋平は“バカ”ですから」

「はつきり言うなよ……」

すずかの質問に美咲が応え、その言葉に秋平が落ち込む。だが、そんな雰囲気で場が和む。

それから、美咲や秋平も加わり、勉強をして、閉館になり、帰ることになった。

そんな帰りの時間、蓮弥がはやてを家まで送る途中。

「蓮弥……」

「何だ？」

「“あの事”はまだみんなに言えないんか？」

「……すまない。まだ怖いんだ。この事がバレて、みんなからさけられるのは」

「そんなことにならないのは、この一年近く関わってきて、わかつとるやる？」

「……すまん」

「はあ、わかった。ま、そんなに焦ることでもないかもしれへんね。でもこれだけは、覚えといてや。私は何があっても蓮弥の味方やから」

「ありがとう、はやて」

その会話で、ちょうどはやての家に着く。

「じゃあね蓮弥。夜道に気を付けるんやで」

「大丈夫だよ」

おどけて微笑むはやてに、蓮弥は苦笑いを浮かべる。

そのやり取りで、はやては家のドアを開け、中に入ってしまった。

確かにこのままみんなに、黙ってるわけにもいかないか。いつか話さないといけない日が来るんだよなきっと。その時、俺は……。

「どうするのかな……」

蓮弥は家に帰る道すがら、さっきの事を考え、呟くのだった。

それから蓮弥は無事家に着き、おじいさん、おばあさんと一緒に飯を食べ、食べ終わった後、部屋に入りベッドに寝転がる。

師匠はまだ帰ってないのか……そういえば、師匠って一体どの所属なんだろう？　いろんな所転々としてるみたいだから、よくわからないな……。どうにも仕事に関しては、はぐらかすんだよな師匠は。今ごろ何してんだろ……？

そんなことを考えながら、まぶたを閉じ、眠りについた。

第1話 『平穩な日常の中に潜むモノ』 2

【新暦69年 3月某日】

「これで卒業……か。よろず部も終わりだな……」

聖祥大付属中学校の卒業式。卒業証書を手に持ち、感慨深げに言うのは、笥秋平。よろず部の部長で、部の発足者。

「何だ寂しいのか？」

「まあ、何だかんだ楽しかったしな」

「確かに」

その笥秋平と話すのは、同じく卒業証書を持った男性——八神光輝。よろず部の第二部員。

「はあ、それに困らされた私の身にもなってください」

ため息を吐くのは、同じく卒業証書を持った女性——風鳥院美咲。1年は生徒会役員、2年には生徒会長として、働いた。影からよろず部を支えた者だ。

「光輝君！」

「またか、抱きつくなくなっつてんだろ」

後ろから、女性が抱きついてきて、光輝は嘆息する。

「いいでしょ。これで、しばらくお別れなんだもん。充電充電♪」

「なんだそりゃ。だったら、ザベルにもやってこいよ。あいつも高校には行かねえんだし」

「つれな〜い」

不貞腐れたような声を出して、光輝から離れる。

彼女の名は神戸凜奈。同じく卒業する。よろず部に所属しており、そのムードメーカー的な存在だった。耳が隠れるほどの長さの緑色の髪をした活発そうな少女。光輝と大体同じ背丈である。ちなみに、光輝は160cmと男性にしては少し小柄だ。

「じゃあ、千鶴ちゃんに抱きついちゃう!」

「離れろ、暑苦しい」

「離れない〜」

「いいから、離れろ! このバカヤロウ! 大体私たちは同じ高校だろうが」

千鶴と呼ばれた少女は、無理矢理、凜奈を引き剥がした。

彼女は鮎原千鶴。小柄で、眠気眼な少女。よろず部所属で、なんとなく巻き込まれ型。髪は茶髪。

「なんだか、みんな元気だね」

「何だいたのか」

「さっき俺の名前出したの誰だよ!？」

「誰だ？」

「お前だあ!」

そう光輝と話す少年は、ザベル「グライム」。金髪の男。よろず部の部員である。

これで、全員。ちなみに全員卒業だ。

「待て！ まだ俺がいる！」

「……何だいたのか？」／「何だいたの？」／「何だいたんですか？」

「何でだー！！！」

そんなこと言う5人のよろず部員＋1人に少年はツッコんだ。彼はバカな子。名前はまだない。細かい設定も考えていない。ただ、よろず部員ではある。

彼らは、中学時代の仲間達。よろず部という部の仲間だ。どんな言い争いをしてても、どこかで信頼し合っている。3年間の絆がそこにはあった。

【新暦71年 7月4日】

つつか々と時空管理局本局の廊下を短い黒髪をなびかせ一人歩く。

それは、八神はやての兄——八神光輝その人であった。

しかし、まあ、あの頃は色々やったなあ……。思い出してみるとバカなことしかしてねえ。

光輝は中学卒業の事を思い出し、自重気味に笑う。

いや、それよりも今は、まさかあいつの所に、行くことになるなんてな。会うのも久しぶりか……。元気にしてっかな。

そんなことを考えながら、八神光輝は廊下を歩く。そんな八神光輝の左肩には、全身が紅く、尾の長い鳥がいて、頭の上には、全身が白と黒の模様のネコのような、生き物がいた。すると、鳥とネコが警戒を表すように、羽を広げ、全身の毛を逆立たせる。

「どうした、朱羅^{しゅろ}、白亜^{はくあ}？」

そんな、鳥——朱羅とネコ——白亜の様子に疑問を投げ掛けるが、光輝もすぐさま気づき、嫌そうな顔をする。

「おやおや？ これはこれは八神光輝君ではないですか」
「クラウド＝グラフィット……」

光輝は前から歩いてきた男——白い白衣を来て、眼鏡を掛け、ボサボサ髪——クラード・グラフィットとその横にいる女性——感情を示さない瞳に、緑色の髪、女性局員の服を着た——を睨み付ける。

「お久しぶりですねえ。いやぁホントなつかしい。何年振りですかね？　ざっと2年振りといったところですかぁ？」

「うるせえよ屑野郎。黙ってられねえのか」

3人は立ち止まると、クラードが嫌味つたらしい言い方で話す。それに光輝は怒りを隠そうとせず、怒気を孕んだ言い方で話す。

「屑とはまた言いますねえ。ですがそれを言ったら、あなたは“大罪人”でしょう？　あの闇の書事件を裏で操り、大事件を引き起こした」

「別に釈明するつもりもねえし、俺はその償いのために、ここで働いてんだ。お前みてえな奴につべこべ言われる筋合いはねえ」

「償い……ですか。クフフ」

「何がおかしい」

「おかしいですよ。ええ全く。あれほどの事をして、何故君は管理局で働けるのか？　君の事だ。見当はついてるでしょう？　クフフ、すべては謀られたこと——」

その瞬間、光輝の腕が伸び、クラードの顔を掴もうとして、クラードの隣の女性に止められる。

「……マスターに手を出すな……」

「失せる木偶人形が……！　ぶっ壊されてえか……！」

光輝は殺気を込めて、女性を睨む。女性は全く動じず、ただ感情のない瞳が、光輝を見据えるだけだった。

「クフフ、落ち着きなさいカエデ。光輝君も腕を下げて」

「ちっ……！」

光輝はその発言にムカつきはしたが、ここで暴れるのは、確かにまずいと思ひ腕を引っ込める。カエデと呼ばれた女性も引っ込む。

「まあいいでしょう。クフフ、それではまた」

「待ちなクラウド、今の事俺の仲間に言ってみろ。その瞬間、てめえは殺す」

「それはそれは、怖いですね」

クラウドとカエデは、二人ともこの場を去っていく。

「……よかったですかマスター……」

「何がですか？」

「……御所望とあれば、今すぐ消しますが……」

「クフフ、まだワタシの出番には、早いですよカエデ。あの老人共

にも指示は受けてませんからね。クフフフ……」

不気味な笑いと共に二人は姿を消した。

その頃八神光輝は、本局の廊下を歩き、目的地を目指していた。

胸糞わりいなあのマッドサイエンティストが！

しかし、管理局の考えね……ま、大方検討は付くがな。俺を死刑か何かにすれば、折角取り入れられるはずのはやて達に不信感を与えてしまうことになる。それがたとえ正しいことでも。

だから俺を管理局で働かせることにより、不信感を取り除き、管理局に取り込んだ。

後は不安分子である罪人の俺を任務の不慮の事故で、死んでもらう。ついでに言えば、俺はよくわからん組織にも狙われているしな。邪魔なのは、当たり前。

ま、こんなところだろうな。だが、それだけの事が出来る人物は限られる。上層部、それもその中でもトップクラス。もしくはさらにその上の存在。

まあ、俺にとっては、そんなことどうでもいいんだが。

そんなことを考えていると、目的地のドアの前に辿り着く。ノックをすると「入れ」と声がし、ドアが横に開く。

「失礼します。八神光輝、一等陸尉、これより、艦船アースラに配属になりました」

光輝は部屋にいる座っている人物に敬礼し、そう言う。

「フツ、君がそんなに丁寧なのを見るのは、初めてだな」
「そう言うなよクロノ。俺だってこのぐらいはちゃんとするさ」

目の前に座る男——クロノ。ハラウンが砕けた言い方をすると、光輝も砕けた言い方になり、親しみのある雰囲気が出る。

「しかし、お前のところに来ることになるなんてな」
「……フェイトに君が今何をしてるのか聞かれてね」
「そういうことか。あいつらには話すなよクロノ」
「そう言うと思った。だからまだ言っていない。だけど、驚いたよ」

クロノの手元の資料には、光輝の今までの仕事の記録がある。それには、危険度がSランク級の事件が、びっしりとあった。

「これほどの事をやらされているとはね。いくらなんでもやりすぎだ」

「そうでもないだろ？ 罪人に課す仕事なんだし。俺は構わねえよ」
「それだって君が勝手なことを言わなければ」
「過ぎたことだ。その分俺は強くなれる」

「……はあ、わかった。もう何も言わない。それより、一つ気にな

つてたんだが、聞いていいか？」

「何だよ？」

「その頭の……ネコは何だ？」

クロノは光輝の頭に乗る白亜を指差す。ちなみに、朱羅のほうは、すでに知っている。

「ああ、こいつも朱羅と同じ、卵から生まれた奴だ。それとこいつ虎らしく“ネコ”って言うのと噛む——「痛！？ やめろ！ 噛むな！」——遅かったか」
「遅すぎだ——！！」

ネコと言った人物——クロノの頭に噛みつく白亜。叫ぶクロノに仕方ないという風に、白亜を宥め、クロノから離す。白亜も許したのか、【ミ〜】と鳴くと、光輝の頭の上に戻った。

「大丈夫かクロノ？」

「なんとかね……それより、何で君は、そういう大事なことを早く言わないんだ……」

呆れるクロノ。

ここで朱羅と白亜について、話したいと思います。

朱羅は新暦65年、闇の書事件の後、光輝が夢で渡された卵から、孵化した鳥だ。

白亜は新暦69年、ある事件の時に、孵化した虎だ。

この2匹は特殊な召喚獣らしく、独自の魔力回路を持っているため、光輝の魔力提供は受けていない。

戦闘時には、基本自らは戦わず、光輝と融身と呼ばれる行動を取

る。

この融身と呼ばれる行動を取ると、光輝の魔力を奪っていく。そのため、光輝はあまり使うことはない。

しかし、融身をすることで、光輝は強くなれるので、相手が強ければ、迷わず使うだろう。

「ま、何にしても、感謝するぜクロノ。ここの方が、色々動きやすいしな」

「勝手に動かれては困るんだがな。まあ、今は本局で調整中なんだ。少し日数がかかる。その間は多少動いて構わない。フェイト達に顔を見せてやれ」

「そのつもりだよ。はやてに早く会いたいしな。メールのやり取りだけじゃ寂しくて」

ちなみにここでいうメールは、地球の携帯電話を、管理局の方でアレンジしたものだ（マリエル「アテンザ作」）。ちなみにこれは次元を越えて、メールの交換も出来る。

「相変わらずシスコンだな」

「お前には言われたくない」

「どういう意味だ！」

「言葉通りの意味だ！」

「くっ……少なくとも君ほどじゃない！ 君ははやてに“大嫌い”と言われて、しばらく泣き崩れてたろ！」

「当たり前だ！」

「威張るな！」

「だったらお前はフェイトに“大嫌い”って言われたら、どうなんだよ！」

「うつ……それは……た、確かに落ち込むかもしれんが、君ほどじゃない！」

「へっ、だったらお前はフェイトに、妹としての愛情が足りないぜ」
「そ、そんなことはない！　僕はフェイトに愛情を持って——ガシヤン——ッ——！」

入り口付近で、何かを落とす音がした。

「クロノ君……今のこと？」

「エ、エイミィ……？」

明らかに怒っている雰囲気のエイミィに、後ずさるクロノ。ちなみにクロノとエイミィは、婚約しています。

「ち、違っんだ。今は……その……！」

クロノはどうにも混乱してしまい、うまく言葉が出ない。

「少しお話ししようねクロノ君」　光輝君は外してくれる？

「了解です大佐！」

「ま、待て光輝！」

光輝はあまりの怖さに敬礼し、そのまま出ていった。言っとくが、別にエイミィは大佐ではない。その後クロノの部屋からは、絶叫が響き渡ったとかなかったとか。

クロノ……南無……。

光輝はとりあえず心の中で、合掌し、廊下を歩く。

しかし、この空気も懐かしいわな。そうだ、せっかく本局に来たことだし、あいつに会いに行くか。

光輝はそう考えると、本局のとある場所に向かった。そこは――

「ユーノ！」

「ん？ 光輝！？」

無限書庫。光輝はユーノに会いに来た。ユーノは光輝の襲来に驚き、急いで、光輝の元へ降りてきた。

「今、大丈夫か？」

「ちよつと待つててくれ」

ユーノはそう言い残すと、他の無限書庫の司書と少し話して、光輝の元へ戻って来た。

「いいよ。それより、久し振りじゃないか」

「まあ、色々あつてな。ここじゃあ何だ、食堂にでも行こうぜ。そろそろ飯時だ」

「わかった」

そうして、光輝とユーノは、食堂の方へ、歩いていった。

そして、食堂で飯を食べる二人。

「それで、一体姿も見せず何やってたんだ？」

「ん？ 仕事だよ仕事。厄介な仕事で、長引いちまったんだ」
「ホントか？」

「本当だよ。つたく、お前こそ、ちゃんと鍛えてたか？」

光輝は話題を変え、割り箸で、ユーノを指しながら訊く。

「む……まあ、それなりにね」

ユーノは話題を変えられ、少しムツとするが、まあいいかと思い、自分も食べながら、返答する。

「謙遜すんなよ。筋肉の付き具合が、前見たときと違うぜ」

「わかってるなら、訊くなよ」

「ハハハ、まあいいじゃねえか」

「まあね」

光輝は明るく笑い、ユーノもそれに微笑を浮かべる。この会話を聞いているだけで、何となくわかると思うが、光輝とユーノは仲が良いい。ちなみに、ユーノは新暦67年以降から、光輝やアルフ、ザフィーラに手伝ってもらいながら、身体を鍛えている。

「そういえば、ザベルとは会ったかい？」

「は？ 何で俺があんな奴と会わなきゃいけないんだよ」

ユーノの言動に、光輝が一気に不機嫌になる。

「あんな奴って……はあ、相変わらず君達は、仲が悪いね」

「あいつと仲良くなることなんざねえな。生理的に受け付けん」

「こらこら……まあ、ザベルともあんまり会わないよね。今ごろ何してるのか」

「どうでもいいな。それより、地球にこれから行くんだけどよ。お前も来ないか？」

「僕も？ うゝん、でも僕は仕事がああ」

「司書長」

光輝とユーノが、そんな会話をしていると、横から、女性が司書長——ユーノに声をかけた。

「ミルダさん、どうしたの？」

「失礼ながら、お話をお伺いさせて、頂きました。そこで、司書長、いい機会ですので、休暇をお取りください。ここ数カ月一度も取っていないでしょう」

「で、でも、流石にそんな急に……」

女性——ミルダの言うことに、ユーノが反論しようとするが——

「そう言うと思ひまして、すでに休暇の準備は整っております」

「あ……はは……」

先手を取られていた。これには、流石にユーノも苦笑いだ。

「完敗だなユーノ。素直に好意に甘えとけよ。久し振りに、なのはにも会えんだしよ」

「はあ……わかった。ありがとう、ミルダさん。それじゃあ後お願いするよ」

「はい。良い休暇を」

そうして、光輝とユーノは、第97管理外世界『地球』に、向かうことになった。

同日同時刻、とある世界で。

「ファイアボール！」

炎を纏った魔力弾が、10個飛び、眼前にいる敵——体は黒く、目は紅く染り、背中には蝙蝠を模した羽根が生え、槍を持った化物に直撃。燃やし尽くし、光になった。どうやら、もう少年の周りに、そいつらはいない。

少年は息を吐いて、他の戦っている者を見る。

「ヤッフー♪ 吹き飛ばネ〜！」

女性の手のひらより、放たれた蒼い何かは、敵を貫き、光へと変えた。

「ふう、これで終わりかネ〜。少し氣を使いすぎちゃったヨ〜」

蒼い髪をした女性が、その場にへたれ込む。その女性に、まだ残っていた敵が槍を突いてきた！

「油断するな」

しかし、それは女性を傷付ける事は出来なかった。敵は、音もなく近付いた男性の刀により、斬り裂かれた。

「ごめんごめん。油断しちゃったネ」

テヘッとおどける女性に、男性はハアとため息を吐き、少年の方を向く。

「これで全部だな」

「うん、そうだね。お疲れ様、リン、静也^{せいや}」

「お疲れヨ、ザベル」

「お前もな」

少年の名はザベル・グライム。年齢は18歳。長いボサボサした金髪。炎の魔力変換資質を持ち、フラム式と呼ばれる術式を使う。

女性の名前はリン・ミヤオ。年齢は23歳。肩ぐらいまで伸びる蒼髪で、中国系の顔をしている。というより、出身国が、第97管理外世界『地球』の中国である。彼女の使うエネルギーは、氣と呼ばれるモノ。彼女の使う武術は、氣功術という。氣を内に溜め、体外へ放出する武術。氣は魔法のように、非殺傷などはないため、手加減をしなければ、相手が死ぬ。

もう一人の男性は、剣静也^{けんせいじゃ}。年齢は21歳。短い黒髪で、無口そう。地球出身。腰には刀を差している。もちろん真剣。管理局の許可は、得ているため、問題ない。彼も氣と呼ばれるエネルギーを使う。武術は特にない。我流である。だが、実力はこの場では、一番だろう。

「何だか最近アンゲロイ共が、増えだしたかい？」

「ええ、確実に」

女性の声に反応し、ザベルが返事をする。

女性の名は、アルラ・K・ビサイデン。この4人を纏める部隊の隊長。年齢は26歳。長い橙色の髪を後ろで、纏めている。魔法戦で言えば、実力は相当。ミッド式で、ビサイデン流双銃術というのを使う。今、アルラが発言した“アンゲロイ”とは、先程戦ってい

た黒い体の化け物どもだ。

この者達は、管理局三提督直属部隊『タイタン』。管理局内でも極少数しか知る者はいない。言うなれば隠密部隊だ。元々は、新暦69年に結成され、ザベルとアルラだけだったのだが、新暦70年に、世界を放浪していた静也とリンに会い、色々とあり、仲間になった。

それぞれの階級は、ザベルが二等空尉、魔導師ランクはS+。リンは陸曹。静也は陸曹長だ。アルラは二等空佐、魔導師ランクはS。

「何かの予兆か……」

「夜蝶だったら、出てくるのはきっと夜だヨ」

キリツと言うリンに、シーンと静まり返り――

「やはり、そろそろ奴等が、本格的に攻めてくるんでしょうか？」

「どうだろうねえ……。とりあえず、要警戒といったところさね」

「了解だ」

ザベル、アルラ、静也と話し、リンはそのまま固まる。そして――

「何で無視するネ!」

「仕様もないことを言うな。ツッコむのも面倒だ」

「静也はツッコミの魂が足りないネ!」

「そんなものはいらん」

リンは一方的に怒鳴り、静也は静かに返す。二人は大体こんな調子。

「ふう……」

「疲れたかい？」

「あ、いえ、違うんです。その……みんな元気にしてるかな……と、思いました」

「まあ、また会えるさね」

「そうですね」

ザベルとアルラが、会話をし終わり、皆は次元航行艦に戻った。

第1話 『平穏な日常の中に潜むモノ』 3

【新暦71年 7月4日】

「地球に降りたのも久しぶりだな」

「俺もだ」

ユーノが感慨深げに言うと、光輝も同意し、んーと身体を伸ばし、ゆったりとする。

「そつえば、なのは達には連絡したのか？」

「してねえよ。せつかくだし、驚かしてやろうぜ」

光輝はそうユーノに、悪戯っぽく笑う。ユーノはそれに、まったくと嘆息するが、次の瞬間には――「それも面白いかもね」――と、同意した。

「と言っても、特に作戦は決めてねえんだが、どうするか？」

「そうだね。今は多分学校だよな」

「成る程、わかったぜ。さあ乗り込むか」

「何でそうなる！ 別に僕はそんなこと言っていない！」

何故か早期に決断を下した光輝は、学校に向かって歩きだす。それにユーノが怒りながらもついていく。こういうところはお人好しだ。

そして、結局、聖祥大付属中学校の校門前まで、辿り着く。

「ところで、僕はこの学校の出身でも、何でもないんだけど……」
「何言ってるんだよ」

そうして、光輝は頭の上に乗る白亜と右肩に乗る朱羅を指差す。

「まさか……」
「そのまさか」

ハアと溜め息を吐いたユーノは、変身魔法を使って、フェレットもどきになり、光輝の左肩に乗る。

「これになったのも久しぶりだ」
「俺は中学校に入るのが久しぶりだ」

そうして、光輝は門を潜り、中学校に侵入した。

「ところで、何かアテはあるのか？」
「任せろ。中学時代の部の顧問に話しつけてやる」

光輝は職員室に向かって、歩き出す。どうやら、授業中のように、人はいなかった。そして、職員室のドアの前に着いた。

そこで、光輝はニヤリッと笑う。

「なんだその不吉な顔は……」

「フッフッフ……」

ユーノは光輝の笑みに、若干の不安を覚え、光輝はそれに不適に笑う。

その瞬間、ガラツと勢い良く、ドアを開け放つ！

「全員動くな！　ここは俺が占拠した！」

な——っ！？

光輝のまさかの行動に、ユーノは心の中で、盛大に驚く。職員室は、驚き、ガタツという音が、連鎖的に起こる。

「お……お前は！」

「八神光輝！？」

「何でお前が！」

職員室にいる先生方から、そんな声をあげられる光輝。中学時代、一体何してたんだこいつは。

「ああ……まあまあ、あの馬鹿は、俺が相手するんで、皆さんは仕事しててください」

そんな中、一人の男性が、前に出て、他の先生方を宥める。無精髭を生やし、どこかやる気のない雰囲気がある。

「よお、島崎！　元気だったか？」

光輝はフランクに先生に向かって、手を振って言う。それに島崎と呼ばれた先生は、溜め息を吐きながら、頭を掻いて歩いてきて――

「いだっ！」

ゴンツと光輝の頭をぶつ叩いた。

「あにすんだ島崎！」

「お前なあ！ 尻拭いするこっちの身にもなってみろ！ お前のせいで、何回首が飛ぶかと思ったか！」

怒鳴る光輝に、ドアをピシャツと閉めた島崎は、光輝に負けず怒鳴る。

「知るか！」

「わかるうと思え！」

その後も、言い争いが続き、はあはあと息を切らせている二人がいた。

「はあはあ、ところで、何しに来た？」

「はあはあ、はやて達に会いに来てな」

「はやて？ ああ、お前の妹か。そういや、あいつらのクラスは、次は俺だ」

その言葉を聞いた光輝は、何かを企むような顔をする。

「何企んでやがる」

その顔に、島崎は長年部の顧問をしていた勘か、何かを感じ取った。

「その授業に俺を紹介しろ。いいだろ？　俺はこの卒業生だしな」
「アホかお前。無理に決まって……」

と、そこで、島崎の言葉は止まり、何かを考える。

待てよ。どうせ、面倒だと思ってたんだよな。こいつに任せるか。

「いや、いいぜ」

「やっぱ、話がわかるな島崎」

「そうじゃねえとお前等と付き合ってらんねえよ」

会話が終わり、とりあえず、この廊下ではなんなので、外に出た。

「……フウ、で、何が目的だ？」

「……フウ、あ？　ただはやて達に会いに來ただけだったの」

二人して、煙草を吸って、会話を交わす。ちなみに、光輝は18歳なのだが、20歳にならないと煙草は吸っちゃダメだぞ。

で、光輝！　何煙草吸ってるだよ！

気にするな。仕様だ

おい！

ユーノと光輝が、念話でそんな会話をする。念話とは、魔導師が使う普通の人には、聞こえない会話方法である。

「まあいいか。それより、お前はいつの間に、アニマルティマーになったんだ」

「何だよアニマルティマーって」

「動物使いだ」

「変なこと言うんじゃないよ。好きでこんなに動物を集めた訳じゃない」

島崎は、光輝の頭と両肩に乗る動物を見て、そう結論付けるが、光輝は真つ向から否定。実際、朱羅も白亜も成り行きで、光輝と一緒にいるだけで、フエレットもどきは、ユーノだし。

そこに授業をサボっていると思われる、煙草を吸いながら歩く、不良のような三人組が現れる。

「おい、お前ら授業はどうした？」

「あ？ テメエ島崎じゃねえか」

「なんだよ？ 説教か？ ああ？」

「上等じゃねえか」

島崎が立場上注意すると、逆ギレした三人組は、島崎に近付いていく。

「おいおい三バカトリオ、学生が煙草吸ってんじゃないよ」

光輝が喧嘩腰にその三バカトリオに言う。てか、お前が言つな。というツツコミをかましたいが、まあほっとく。

「ああ？」

「誰だテメエ？」

「お、おい待て！ こいつ……！」

二人が喧嘩腰になるのに、一人が光輝の顔を見て、慌て出す。

「何だよ」

「知らねえのか！ あいつ“シスロリの兄”、八神光輝だぜ！」

シスロリ＝シスコン＋ロリコン。そして、はやてのピンチなどに現れる兄である。

「ぐえっ」

「えぶっ」

「ひでぶっ」

次の瞬間、三バカは地面に叩き落とされた。そして、禁句を発した一人の頭を踏む。

「ああ……！ 今なんつった？ 殺されてえのか中坊が……！ あ……！」

「すいま……」

「聞こえねえんだよなあ……！ もっとこの俺様に敬意を込めて、謝らねえか……！ ああ……！」

光輝は中学生相手に、大人気なく、凄んでそう言う。しかも、光輝なら本気で、殺りかねない。

「やめねえか光輝」

「離せ島崎！」

そんな光輝を島崎は、後ろから羽交い締めにして、押さえつける。

「ほれ、さっさと逃げろ」

島崎の言葉で、倒れていた三バカは、立ち上がりその場を去った。

「チッ……いい加減離せ」

光輝は舌打ちし、島崎の拘束を外す。島崎も特に抵抗せず、簡単に手を離す。

「つたく、ホントお前と秋平には、参るぜ」

「それほどでもねえよ」

「別に褒めちゃいねえ」

そんな会話で、チャイムが鳴る。どうやら授業が終わったようだ。

「さてと、軽く準備していくかな」

「ああ」

二人とも煙草の火を消し、再び校舎に戻った。

そして、はやて達の教室。

次の授業のチャイムが鳴り、先生が来ないので、何となくざわつく教室。

「静かにしろー」

そこに島崎が入ってきて、生徒達を黙らせる。

「今日は卒業生の話聞く授業にするからな」
「先生」

島崎がそう言うと、一人の生徒が手を挙げる。

「何だ？」

「何で化学の授業で、そんなことするんですか？」

「俺が授業すんの面倒だからだ」

全く悪びれずに言う島崎に、生徒達は、ダメだ、この人ダメ人間だ、と思ったのは、言うまでもない。

「入れ」

「おお」

島崎がそう言うとなりの卒業生が、入ってくる。入ってくる際の声に、5人娘と蓮弥が、エツという声をあげる。

そして、入ってきた人物——黒髪に両肩に鳥とフェレットもどきを乗せ、頭には猫のような虎を乗せた少年に、5人娘と蓮弥は、言葉を失った。

そんな5人娘と蓮弥を尻目に光輝は、壇上の前に立ち、咳払いをして、机を叩く。

「諸君！ 私は高らかに謳おう！ 妹を愛してこそ兄である」と！

光輝のあまりに突飛な発言が、教室に響き渡った。

「——って、色々とおかしいやろ！！」

だがそこに、はやてがツツコミを入れる。そして、教室がざわめきだした。

「あ、あれって！？」

「そうだぜ！ あの黒髪紫眼、“龍虎の龍”だ！」

「え？ “告白潰し”じゃないの!？」

「は？ “シスロリの兄” だろ」

「いやいや、“光速のシスコン” だろ」

「ちげえよ！ “輝きし神聖なるロリコン” だろ」

何故だか様々に異名が飛び交う。ていうか、こいつはマジで、中学時代一体何をしたんだ。

「おい、今発言した奴は前に出る。俺がフルコース地獄巡り60秒の旅に御招待してやる」

光輝の殺気のこもった言葉に、教室がシーンと静まり返る。

「まあいい。俺がお前達に言いたいことは一つだ」

さっきの冒頭の台詞は、何だったんだよと生徒達が、心の中でツコンだ。

「はやてに手を出したらぶっ殺す」

その言葉にまたも教室は沈黙。とにかく、光輝の言ってることは、意味がわからない。

「以上だ。諸君、存分に学園生活を謳歌したまえ」

そう光輝は言い残し、この教室を出ていった。

「さって、授業始めんぞ。教科書の35ページを開け」

そして、島崎が何事もなかったかのように、そう言って、黒板に

向かう。生徒達も何となく雰囲気を押され、教科書を開き、そして

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」
「「「何しに來たんだよ！……！」「」「」「」「」「」「」「」「」

やはり、無視出来なかった生徒達のツツコミが、炸裂したのだっ
た。

兄さんのアホー！

照れること言うなよ、はやて
褒めてへんわあ！

聖祥中学校の校舎を出た光輝は、自動販売機から、缶コーヒーを
買って、飲みながら、はやてと念話で会話する。ちなみに回線は、
他にも、ユーノ、なのは、フェイト、蓮弥にも繋がっている。

兄さんのせいで、今めっちゃ恥ずかしいんやで！

今、はやては、クラス中の注目を浴びている。光輝が、はやての
兄であることは、周知の事実。だが、実物を見たものはそうはいな

い。なので、光輝を初めて見た生徒達は、はやてと見比べているのだ。

その状態に陥った、はやては、顔を紅潮させ、俯きながら、授業を受け、光輝と念話している。

にやはは、相変わらず大胆な事するね。光輝君は
ホントにビックリしちゃった。それにしても、光輝と一緒にユー
ノまでいるなんて

あはは、成り行きでね。ここまで来ちゃったよ

なのは、フェイト、ユーノと会話が、為されていく。

師匠、戻ってきたんですね

蓮弥、はやてに手え出してねえだろうな

してませんよ。ていうか、会う度に確認するの止めてください
そうしねえと、意識が薄れるだろうが

蓮弥と光輝が、会話を交わす。この二人は、弟子と師匠の関係で、
光輝は自分の武術である『八神流』はっしんりゅうを蓮弥に教えている。とは言っ
ても、『八神流』は、光輝の考えた我流流派である。それに光輝が、
教えているのは、技ではなく、その戦い方や考え方である。そのた
め光輝と蓮弥は、同じ流派でありながら、基本の技以外は、使う技
が違ったりする。

ま、何にしても久し振りだな

光輝が代表してそう言うと、皆も口々に久し振りと声に出してい
く。

さてと、久々に遊んだことだし、俺とユーノは翠屋にいるからよ。

学校終わったら来な
そんな勝手な――

光輝はそれだけ言うと、はやてが言いかけにも関わらず、念話を切った。

いいのか？

「ん？ ああ、一旦家に帰りたくてな。早い方がいい」

光輝は缶コーヒーを一気に飲み干し、ゴミ箱にシュート。見事に入り、光輝はそのまま聖祥中学校を出ていった。

……にしても、何だこの海鳴市に広がる不穏な空気は……。前より濃くなつてやがる。裏に何かあったのか？ ……嫌な予感がするな……当たらなければいいが。

どうかしたのか光輝？

光輝が考え事をしていると、何かを感じ取ったのか、フェレットユーノが念話で、様子を聞いてくる。

いや、何でもない。些細なことだ

……光輝、全部一人で背負い込もうとするなよ
してねえよ。自分のツケは自分で払ってるだけだ
それが一人で、背負い込んでるって言ってるんだ。お前は一人じゃないんだ。僕たちがいる

……ありがとよ、ユーノ。だが、ホントに何も無い。俺の思い過ぎ
しだ

そうか

そんな会話を念話でしていると、目的地である八神家に着いた。
そこで、とりあえずチャイムを鳴らし、呼び出す。

「……ふむ……アイはいるはずなんだが」

しばらく待っても反応がなく、光輝はそう呟くが、次の瞬間、ドタバタと廊下を走ってくる音がした。

そして、ガチャツとドアが開く。

「やっと来——ブツ！」

「ブハッ！」

現れたその者に光輝とユーノは、盛大に吹いた。その開いたドアから、現れたのは、銀髪を濡らし、その体をタオル一枚で覆ったりインフォース・アインスであった。

「光輝？ どうし——「このバカ！」——むっ……」

アインスは頭に疑問符を浮かべ、小首を傾げるのに、光輝は速攻で、家に入りドアを閉める。

「久し振りに会って、いきなりバカとは何だ」

アインスは心外だと言わんばかりに、胸を張る。でもそんなことをしたら、ただでさえ、大きいお胸が強調されて……。

「——ッ！ いいから、服来てこい！」

「何なんだ……」

光輝はとにかく目のやり場に困るので、アインスの背中を押して、

風呂場に送ろうとする。

「あゝ！ 光輝ですゝ！」

「リン、お前まで……」

今度現れたのは、宙に浮きハンカチを纏ったアインスを物凄く小さくして、活発にしたような小人——リンフォース・ツヴァイの姿。

「ああもう！ いいから、さっさと着替える！」

光輝は怒鳴って、二人共風呂場に押し込んだ。

「ハア……で？ 何でお前ら風呂に入ってたんだよ？」

光輝がそうドア越しに、話しかける。光輝は髪が濡れてることに、そう結論付けていた。実際二人はお風呂に入っていたのだが。

「……いや、過程は省くが、お菓子を作ろうということになった」

「まさか……」

「失敗したですゝ」

つまりは、お菓子を作ろうとしたら、鍋やらその他色々とひっくり返したりと、服が汚れてしまったということだ。

「ということは……」

光輝は恐る恐るリビングの戸を開け、厨房に向かう。そこには、荒れ果てた惨状があった。

「何で出来ねえことやろうとするかなあ……」

そんな惨状を見た光輝は、頭を抱え嘆いた。

「仕方ねえ。ユーノ、人間に戻って、手伝ってくれ」
「わかったよ」

ユーノは人間に戻り、光輝と厨房の片付けを始めた。

「ああ、すまない……片付けをしてってくれたのか」
「すまないと思うなら、手伝え」

着替えてきたアインスが、そう言ってくる。それに光輝はそう命令する。

「リンも手伝うです」
「お前はいい。逆に邪魔だ」
「どういう意味ですか」！

ツヴァイがそう言ってきたのに、光輝は突っぱねた。ツヴァイはそれに怒るが、自分でもわかっていいるのか、大人しく下がった。そして、片付けを終えた。

「つたく」
「すまない……」
「ごめんなさいです……」

光輝は片付けを終えると、アインスとツヴァイを正座させ、反省させる。

「光輝、そろそろ行かないと」

「ん？ ああ、そうだったな。アイ、リイン、お前らも来い」

「どこにだ？」

「どこですか？」

そう聞くアインスとツヴァイに、ついてくりやあわかると言つて、光輝は家を出る。アインスとツヴァイは、疑問符を浮かべるが、大人しくついていくことにした。その際、ツヴァイはアウトフレームになり、小学校低学年くらいの身長になった。

ちなみにだが、リインフォース・アインスは“アイ”と呼ばれ、リインフォース・ツヴァイは“リイン”と呼ばれている。

「そついや、何でリインまでいるんだ？ 大体、はやてといるくせに」

「今日はメンテナンスで、アイと一緒にだったです」

光輝がそう言うのに、ツヴァイが元氣一杯に答える。そのツヴァイの答えに、光輝はアインスに振り向く。

「問題は？」

「特にない。正常だ」

「そつか。なら、よかった」

アインスは今から6年前の闇の書事件時の最後に、とあることがあり、夜天の魔導書本来の姿を取り戻している。そのため今もまだこうして、生き長らえている。だが、やはり夜天の魔導書の改変の爪痕は深く、正直デバイスとしては、中々使えないものになっている。

一応、アインスは単体で戦える力は持っているが、マスターとのユニゾンは付加が大きいものとなるようだ。言ってしまうえば、アインスとのユニゾンは最終手段だろう。

そして、そうこう話していると、翠屋に着いた。

「ん？ 光輝君」

「お久し振りです、土郎さん」

「ああ、久し振りだね」

光輝と翠屋の店長——高町土郎が会話を交わす。土郎は光輝にとつて、剣を習った師匠でもある。習ったといっても、本格的に習ったわけではない。どちらかと言うと、見てもらったが正しい。光輝は小学校時代に、修行に明け暮れていた。様々な道場を巡り、鍛えていた。その一つが、御神流の道場である。一度、光輝が御神流の道場を訪れて、光輝の才能を見極めた土郎は、ある言葉を光輝に告げて、家に返した。光輝はその言葉を今もしっかりと覚えている。それから、剣を使いだした光輝の剣捌きを、ちよくちよく見てくれる関係になった。

「あん？ 光輝？ 光輝じゃねえか！」

「あ？ 秋平？」

その時、光輝は遠くのテーブルから、こちらに呼び掛け手を振る男——笥秋平を発見。その他にも、世に言う美人と称されるのに相応しい——風鳥院美咲に、何故か目が半目しか開いてない眠気眼の少女——鮎原千鶴がいた。ちなみに少女といっても、同い年だ。背は140cm前後しかないが。

「お前ら……こんなとこで何してんだ？」

「勉強ですよ。今日は翠屋でしようと思ひまして」

光輝の問いに、美咲が答える。光輝はそれに——「大変そうだな」

——と頷く。

「他人事かコラア……！」

「他人事だ……！ 文句あるか」

秋平がメンチを切らしてきて、光輝もそれに負けじとメンチを切る。

「相変わらずバカヤロウだな」

「こいつはそうだが俺は違え！」

千鶴の言葉に、光輝と秋平が息ピッタリに返す。

「やっぱり、お前らはデラックスバカヤロウ共だよバカヤロウ」

「ほう……だったらお前はデンジャラスバカヤロウだな」

光輝が反撃と言わんばかりに、挑発的に返す。

「何で危険なんだよ！ それに私はお前にバカだと言われたくはない！」

「そうかそうか。そいつはすまなかった。スモーレストバカヤロウだな」

「小さくないよ！ 周りが少しデカイだけなんだよ！ 大体お前も小さいだろうが！」

「な——ッ！ テメエ！ 人の気にしてることを！」

「お前も言っただろうが！ このバカヤロウ！」

激しい口争である。お互いの嫌な所を言い合うという、どちらも得のしないパターンだ。そんな様子を美咲と秋平は、何となく懐かしいような目で見ており、ユーノ、アインス、ツヴァイは、少し呆

気に取られて見ていた。

まあ、こんなのは中学時代によろず部では、日常茶飯事だったわけだが。

そして、落ち着いたところで、近くのテーブルの4つ席に、光輝、ユーノが座り、対席にアインス、ツヴァイが座る。

「それにしても珍しい組み合わせですね。ユーノさんにアイさん、リインちゃんなんて」

「僕は光輝に無理矢理です」

「私もだ」

「リインもです」

美咲の言葉に、ユーノが苦笑して返すと、アインスとツヴァイもそれに続く。

「お前らな……まるで、強引に引つ張ってきたみたいな言い方すんなよ」

「実際そうだろ？」 / 「実際そうだ」 / 「実際そうです」

三人同時に言われた光輝は、ぐうの音も出なかった。

「……そっぴや、凜奈はどうしたんだ？」

（逃げたな……）

話題を変えた光輝に、その場にいた全員が、そう心の中で、呟いたのだった。

「なんだよ光輝、気になんのか？」

「ちげえよバーカ。ただ単にこのメンバーで、あいつがいないから、

少年の絶叫染みたツツコミが炸裂したのだった。

彼はバカナ子。名前はまだない。でも、そこに存在している。それは素晴らしいことである。

「全・然！　素晴らしくない！！」

バカナな会話をしている中、翠屋のドアがカランカランと鳴り、店に6人、来店してくる。

「はやて〜」

そこに来店したのは、八神はやて、高町なのは、フェイト・テスタロッサ、月村すずか、アリサ・バニングス、獅童蓮弥。はやては、光輝に嬉しそうに手を振られ、ずかずかと無言で近づいていく。そして――

「いたっ！？」

近づいたはやては、無言で光輝の頭を殴り、そのまま近くの2人テーブルに座る。

「はやて……とうとう家庭内暴力を……」

「ちやうわ！　兄さんがあんなことするからやる！」

よよよと悲しげに言う光輝に、はやてが全力で否定。

「まあまあ、その辺で」

蓮弥が、はやての反対の席に座りながら言う。

その後は、4つ席に、なのは、フェイト。その反対に、アリサ、
すずかと座っていく。

「しっかしまあ……勢揃いだなこりゃ」

光輝が落ち着いたところで、辺りを見回してそう言う。

実際凄いメンバーではある。

八神光輝。現在は時空管理局で働き、一等陸尉というエリート。
術式は古代ベルカ式、魔導師ランクも陸戦AAAランクと優秀だ。
二つ名として、“疾風の盾”という名を持つ。その仕事振りは凄く、
慕う後輩もまあまあいる。しかし、過去の功績から、嫌う人も多く
いる。大体半々くらいである。

ユーノ＝スクライア。現在は時空管理局の無限書庫で、司書長と
して働いている。新暦67年冬のなのはの墜ちた事件から、ユーノ
は好きな人を守れなかった悔しさから、体を鍛えその実力を上げて
いった。今では、魔導師ランクは総合AA+となっている。術式は
ミッド式。彼を慕い、尊敬する者は少なくない。あの無限書庫とい
う本が大量に、尚且つ雑に置いてあった空間を、整理して、効率良
く使えるようにしたのだ。彼に憧れて、司書になる者は少なくない。

リインフォース・アインス。言わずと知れた闇の書と呼ばれてい
た夜天の魔導書の管制人格。現在は時空管理局で働き、はやての傍
で、補佐のようなことをしている。階級は曹長。術式は古代ベルカ
式、魔導師ランクは総合AA+。前にも言ったが、ユニゾンはそ
う簡単には出来ない。単体で戦う分には、そこまでリスクはない。

皆からは“アイ”と呼ばれている（命名：八神光輝）。

リインフォース・ツヴァイ。蒼天の書を扱うユニゾンデバイス。はやての苦手な所をカバーするために作られた八神家の末っ子。基本は、はやてとのユニゾンだが、シグナムやヴィータといった、はやての固有戦力——ヴォルケンリッターの2人ともユニゾン可能。階級は空曹。術式は古代ベルカ式、魔導師ランクが総合Aランクである。生まれてまだ4年のため、少し幼い。皆からは“リイン”と呼ばれている。

高町なのは。階級は二等空尉。術式はミッド式。魔導師ランクは空戦Sランク。現在は教導隊の戦技教官として、時空管理局で働いている。相当なエリートで、部下からは絶大なる信頼を持っている。二つ名に“エースオブエース”を持つほどだ。ユーノとは新暦68年から、恋人同士である。

フェイト・テストロッサ。階級は武装隊では、二等空尉となっている。術式はミッド式。魔導師ランクは空戦Sランク。現在は執務官として、時空管理局で働いている。補佐にはシャリオ・フィニーノがついている。二つ名は“雷神”。新暦69年に大怪我を経験している。なのはのような飛べなくなるほどではないが、それでも相当な大怪我である。

八神はやて。階級は一等陸尉。術式は古代ベルカ式。魔導師ランクは総合S+ランク。現在は特別捜査官として、時空管理局で働いている。さらには、上級キャリア試験にも合格してたりと優秀な人材だ。はやてはその特殊性からか、戦う際に、非人格型アームドデバイス『騎士杖』シュベルトクロイツ』と魔道書型ストレージデバイス『夜天の書』、ユニゾンデバイスである『リインフォース・ツヴァイ』、さらに、リインフォース・ツヴァイの所持する『蒼天

の書』を扱っている。機能としては、インテリジェントデバイスが1機で、行えることを分担している。インテリジェントデバイスを使わない理由としては、繊細な機構を持つインテリジェントデバイスとの相性が悪かったためである。ちなみにこれらの製作には、リインフォース・アインスも携わっている。

獅童蓮弥。階級は三等陸尉。術式は近代ベル力式。魔導師ランクは陸戦Sランク。現在は武装隊に所属している。進路は決めかねている模様。時空管理局に入ったのは、新暦69年で、光輝とのある一悶着で、魔法に目覚める。そのため、色々事情を訊いた蓮弥は、管理局に勤めることを決めた。

アリサⅡバニングス。この地球で、なのは達の正体や魔法を知る数少ない一般人。学校の途中で、仕事でいなくなるなのは達のノートを録ってくれたり、優しい一面を持つ。しかし、普段はつんけんしている。成績は優秀で、常にトップクラスだ。今は髪を短くしている。犬好き。

月村すずか。アリサと同じく、魔法などを知る数少ない一般人。成績優秀運動抜群と非の打ち所のない天才児。しかし、気取らない。物静かで温厚な性格。猫好き。

風鳥院美咲。こちらも魔法などを知る数少ない一般人。一般人とはいっても、氣と呼ばれるエネルギーを使い、さらに風鳥院流絃術という武術の免許皆伝者。その実力は、なのは達に勝るとも劣らない実力者。聖祥大付属高校では、中学に引き続き、生徒会会長に抜擢されるほどの成績優秀、運動抜群、容姿端麗と生徒の人気者である。秋平や光輝とは小学校低学年からの付き合い。千鶴や凜奈とは小学校6年からの付き合いだ。なのは達とは、新暦65年の闇の書事件時に出会った。

筧秋平。魔法などを知る数少ない一般人。氣というエネルギーを使い、筧流針術という武術の免許皆伝者。実力は美咲とほとんど変わらない。聖祥大付属高校では、平凡な帰宅部として暮らす。小学校、中学校と続いて、頭は悪い。光輝やザベルと共に成績は最悪である。付き合いは美咲と同じ。

鮎原千鶴。ここでは、完全な一般人。魔法なども知らない。機械やその他システム作りが得意。成績は美咲には劣るも優秀。常にトップクラスだ。どうやら、先祖（？）は何かの研究をしていたらしく、残された文献から、その解析をしているようだ。

バカな子。バカだお。

といった具合に、豪華メンバー揃い踏みである。

「それで今日はどうしたの光輝君？」

「ん？ ん……久々に休暇もらったんで、遊びに来ただけだな。また明日には、仕事だ」

光輝はすずかにそう訊かれ、どこかうんざりしたように答える。まあ仕事があって嬉しいなんて人間、そうはいないだろう。

【ミ〜】

そこで白亜が鳴き声をあげて、光輝の頭から降りると、蓮弥の頭に向けて、かけ上がっていった。

「ちょ、白亜……ったく……」

急に来た白亜に、驚いた蓮弥だったが、しょうがないといった風にそのままにする。

「蓮弥は白亜に好かれとるよな」

「私達が触ろうとすると、噛みついて来るんだよね」

「にはは、頑張ったけど結局触れなかったんだよね」

「蓮弥君、いいなあ」

はやて、フェイト、なのは、すずかと会話がなされていく。どうやら白亜は、あまりなつかないらしい。みんな残念そうだが、すずかが一番残念そうである。見た目猫なので、触りたくてしょうがないのかもしれない。

「ったくよお、俺のために生まれたなら、俺になつけての。朱羅もシグナムになつきやがるし」

「お前が雑に扱うからだ。もっと大切にしろ」

「しろです」

「うつ……痛いところ突かれたが、お前らに言われると腹が立つ……！」

光輝がアインスとツヴァイの言葉に怯む。だがいつも天然で、色々やらかす二人には、言われたくないようだ。きつと、悪意がある俺より、あいつらの方が悪いと思う光輝。いや、断然悪意ある方が、悪いだろと言っておく。

「それより、アンタは一体何してたのよ？」

「何してたつっても、仕事だよ」

アリサの言葉に光輝はそう返す。なのは達が色々知る必要はない

からだ。すべて、自分で片付ければいい話なのだから。

「訊いても無駄ですよアリサちゃん。この人はそう簡単に真実は語りませんから」「そうそう、このバカは肝心なこと話しやがらねえからなあ」

「中学の時もそんな感じだったしなあ」

「人の事を独りよがりのバカヤロウみたいに語るな」

「「実際そうだろうが」／「実際そうでしょう」

「ひどい……」

美咲、秋平、千鶴の言葉攻めに光輝はノックアウト寸前だ。

その時――

――ッ!!

魔法が使える者達に衝撃が伝わる。

光輝！

落ち着け

ユーノが光輝に念話送るのに、光輝は全員にそう念話で伝える。

（秋平）

（わかった）

光輝と秋平がアイコンタクトのみで、会話を交わす。これは小学校時代から、喧嘩をし、馬鹿をやり続けてきた2人に出来る芸当で、アイコンタクトのみで会話を行える。

「美咲」

「……はい、それじゃあ、そろそろ終わりにしましょうか」

秋平の声音に何かを感じ取った美咲は、そう言い出す。

「もうか？」

「まあ、もうこれ以上続けても、出来そうにありませんし、この場で解散としましょう」

千鶴の言葉に美咲がそう言い、千鶴も——「まあそうだな——」
と言って、片付け始める。

そして、全員外に出て、千鶴とバ力な子は去っていった。

「光輝、何があつたんですか？」

「……ハア、お前と秋平はどうせ来る気だな」
「たりめえだ」

美咲が訊いてくるのに、光輝は諦めたように言い、秋平が太鼓判を捺す。それに光輝はポケットから、アンテナのような物を取りだし、美咲と秋平に投げて渡す。

「なんだこりゃ」

「それを耳につける」

秋平が訝しんで見るのに、光輝が一方的にそう言う。2人は大人しくそれを耳に着ける。

聞こえるか？

「何だ！？」

急に頭に響いた声に、秋平が驚きの声をあげる。

声に出すな。思えば伝わる

こう……ですか？

へえ、なんだこりゃ？

魔法が使えない者も念話が、出来るようになる装置だ。試作品だが、マリーと一緒に造った

光輝はそう説明し、今の状況説明に入る。

今、丁度ここから東西南北の4箇所にも多数の魔力反応がある。ここは管理外世界だしな。局員が来るのは、時間がかかる。俺達で対応するぞ。チームは北に“俺と秋平”、南に“ユーノと美咲”、東に“なのはとフェイト”、西に“蓮弥とはやて、アイ、リイン”でいいか？

ま、待って！ 私は……その、ユーノ君と……

それになのはが異論を唱える。何となくユーノが、他の女の人と一緒にいるのが嫌なのだろう。

お前な……

私は構いませんよ

すまん。じゃあ、変更して、南に“ユーノとなのは”、東に“フェイトと美咲だ”。他は変更なし。恐らくだが、相手は“アンゲロイ”に“アルヒアンゲロイ”、“アルヒヤイ”だろう。指揮してんのは、アルヒヤイだ。アンゲロイと同じ容姿だから、分かりにくいだろうが、見極めて倒せ。後は雑魚しか残らねえからな。行け！

光輝のその言葉で、皆が一斉にそれぞれの場所に駆ける。

「すまないな。こんな慌ただしくて」

「いえ、頑張ってきてください。ちゃんと帰ってきてくださいね」
「ま、全員元気に帰ってくるなら、何にも言わないわよ」
「ああ、行ってくる」

光輝はそう言って、すずかとアリサの頭を撫でる。すずかは嬉しそうだが、アリサは恥ずかしそうにしていた。

「行くぜ、秋平」

「ああ、ロリコン！」

「ちっげえよ！ 俺はロリコンじゃなくてシスコンだ！」

「どっちも同じだろうがバーカ！」

「全然ちげえ！」

そんなアホな会話をしながら、2人は目的地に向かった。

第1話 『平穏な日常の中に潜むモノ』 4

東方面の結界内。

ここに来たのは、フェイトと美咲。フェイトはバリアジャケットを着込み、バルディッシュを手につ。美咲は学校帰りだったので、制服のままだ。氣術士は姿は変わらないが、氣を体に巡らすことで、魔導師のバリアジャケットと同じような効果を得る。

「よろしくお願いしますねフェイトちゃん」

「はい、こちらこそ。でも無理はしないでね。美咲や秋平は管理局員じゃないんだから」

「局員かどうかは関係ありませんよ。あいつらがここに現れるなら、叩くだけなので」

美咲とフェイトの目の前の空には、黒い人間のような体に黒い蝙蝠のような翼、紅い瞳で、体長は170cm程度の化け物が浮かんでいた。これらはアンゲロイドだ。他にも体長5mほどのアンゲロイドと同じ容姿の化け物も何体かいる。これらはアルヒアンゲロイド。そして、アンゲロイドの中には、アルヒヤイというのも混ざっているようだ。

アンゲロイド共は獲物を見つけると、その持っている槍や剣などを携えて、一斉に飛び掛かってきた。

フェイトは即座に回避。だが美咲はそこを動かなかった。

「美咲！」

フェイトが叫ぶが、美咲は動かず、アンゲロイの武器が美咲に刺さりそうな瞬間——美咲に向かってきたアンゲロイ共の動きが止まる。

「風鳥院流絃術『絃呪縛』」

それは絃であつた。周囲に絃が張り巡らし、アンゲロイ共に絡み付けたのだ。

「フェイトちゃん！」

美咲の声にハツとしたフェイトは、左手を構え、環状魔方陣を發動。美咲はその場を跳び退く。

「プラスマスマッシャー！」

その瞬間、雷光を伴った魔力砲撃が放たれ、動きを止めていたアンゲロイ共を撃ち抜き、光へと変えた。アンゲロイやその他は、体にあるコアを破壊することで、光となって消える。

フェイトちゃん、私はアルヒヤイを探しますから、雑魚はお願いします

うん、任せて

美咲は絃を張り巡らし、アンゲロイとは違う感じの者を探す。美咲と絃は感度を共有しているため、絃が感じたものは美咲も感じる

ことが可能。アンゲロイとアルヒヤイは、容姿が似ているだけで、異質なものだ。ならば、必ず何かが違うはずである。

そうやって探している間も、アンゲロイを細切れにしている。

一方フェイトは――

《フォトンランサー》

「ファイア！」

槍のような魔力弾を発射し、アンゲロイにぶつける。アンゲロイにヒットするが、ヒットした場所は何もなかったかのように再生した。

（再生速度が上がってる……？）

フェイトはそう考える。フェイトがアンゲロイと戦ったのは、闇の書事件時の最後のみ。あれから6年だ。強化されていてもおかしくない。

と、その時、アルヒアンゲロイがフェイトに向かって、棍棒を振り落とす！

フェイトは即座に退避。だが、退避した先にアンゲロイが居り、フェイトの体を押さえつける。

「――ッ！」

そこに杖を持ったアンゲロイが、その杖の先端に魔力を溜めていた。その魔力は砲撃となつて、フェイトに突き進み、フェイトを押さえつけていたアンゲロイもろとも消滅させる。しかし――

「はあ！」

一閃！

杖を持ったアンゲロイは、いつの間にか後ろに移動していたフェイトに斬り裂かれた。だが、驚異的なスピードで、回復したアンゲロイは、振り向き様に杖で殴り付けてきた。

フェイトはそれにディフェンサーを発動して受け止める。

「——ッ！——」

動きを止めたフェイトに、アルヒアンゲロイが棍棒を振り回してきた。フェイトは直ぐ様ディフェンサーを解除し、その場を飛び退く。アンゲロイは棍棒により、光となって消えた。

「はあはあ……」

フェイトは多少息切れするが、すぐに立て直し、デバイスを構える。

（連携が上がってる……？　そっか、アルヒヤイってというのが指揮してるから……）

フェイトはそう考えながら、アンゲロイを打倒し、アルヒアンゲロイの攻撃を避ける。

一方美咲は——

（数が多すぎますね。それに倒した先から、アンゲロイが出てきたのでは……）

そう思考する。とにかくアンゲロイの数が多い。しかも、倒した先から、再び現れたり、キリがない。美咲は、こうなったら……

！ と、心の中で呟き――

フェイトちゃん！ 一旦下がって！
はい！

フェイトに念話を飛ばす。フェイトは美咲からの念話に、その場を即座に離れる。その時、美咲が蒼い氣を纏う。

――風鳥院流絃術――

「流星！！」

蒼い氣を纏った絃が、一つの束になり、アンゲロイ達を押し潰していく。これは蒼光氣そうこうきと呼ばれるもので、通常の無色の氣より、威力やその他総合的に能力値が上がる。

複数体のアンゲロイが光となって消えたが、再び空間の歪みから、アンゲロイが現れる。

キリがない！
待ってください…… 見つけました！ あのアルヒアンゲロイの後ろにいる奴です！

美咲はなるべくアンゲロイの数を減らし、より正確に探せるようにした。その際、アンゲロイが歪みから出てくるとき、妙な行動をしたアンゲロイがいた。それがアルヒヤイだ。

私が動きを封じます！ その内に！
はい！

美咲が絃を張り巡らし、複数のアンゲロイ、アルヒアンゲロイの動きを止める。フェイトはその間に一瞬にして、指定されたアルヒヤイに向かって駆けた。

「はあ！」

アサルトフォームに変えたバルディッシュで、アルヒヤイを一閃！だが、それは避けられる。アルヒヤイはお返しと言わんばかりに、手に持つ剣で、斬りかかってきた。

《ソニックムーブ》

フェイトはそれを高速移動魔法で避けて、カートリッジロードと共に、プラズマランサーをセット！

「ファイア！」

それを撃ち出す！
アルヒヤイは避けるが――

「ターン！」

プラズマランサーは方向を変え、避けたアルヒヤイに向かう。アルヒヤイはシールドを張り、それをガード。

「ハーケン……セイバー！」

その動きが止まった瞬間――ハーケンフォームに変えたフェイトの魔力刃が、高速回転しながら、アルヒヤイに向かい、その体を斬り裂く。

しかし、アルヒヤイもコアを破壊しない限り、再生する化け物だ。瞬時のその体を繋げる……が！

アルヒヤイの体をバインドが、押さえつける。動きさえ止まってしまうえば、バインドは架けやすい。

「トライデント……！」

フェイトは左手を構え、その先に魔方陣が生まれる。その魔方陣の中央に、魔力が溜まり、さらに中央を基点に上下に魔力が溜まっていく。

「スマツシャーー!!」

3つの砲台から発射された砲撃は、アルヒヤイに直撃！ 凄まじい雷撃を伴い、アルヒヤイを光へと変えた。だがその瞬間、近くにいたアルヒアングロイの拘束が解けてしまう。

「しまっ!?!」

美咲がそのことに焦るが、拘束が間に合わない。油断したフェイトは、動けずに振り下ろされる棍棒を見やる。と、その時——蒼い砲撃のようなモノが、アルヒアングロイを貫いていく。

「氣術!?!」

それに美咲が驚き、術者を探すが、見当たらなかった。もっとよく探そうとしたが、アングロイ共が再び襲いかかってきて、それは叶わなかった。

その後、体勢を立て直したフェイトと美咲は、指揮を失ったアングロイ、アルヒアングロイと対峙。だが連携のない奴らは、フェイ

トたちの敵ではなかった。

南方面の結界内。

「デイベイイン……バスター！」

なのはのレイジングハートから放たれた桃色の砲撃が突き進み、
アンゲロイを貫き、光へと変える。

「はあ！」

ユーノはバインドを展開し、複数体のアンゲロイを縛り上げる。
今のユーノは両手にグローブを嵌めて、右手には小型の弓の発射台
のようなものが仕込んである。さらに、腰の辺りに短剣が仕込んで
あるようだ。これはユーノのデバイスで、名を『シンラ』という。

アンゲロイを縛り上げると、弓の発射台に魔力の弓矢を生成。

「レイ！」

発射！

複数の翡翠色の弓矢は複数のアンゲロイにぶつかり、炸裂効果を
持ち爆発。アンゲロイを光へと変えた。

「見つけた……」

その時、ユーノの元にサーチしていた情報が来る。アルヒヤイの位置情報だ。ユーノは戦闘開始直後に、サーチの魔法を発動していたのだ。

なのは、僕が全員縛り付けるから、その間にアルヒヤイを
うん、わかった！

なのはにアルヒヤイの位置情報を送り、ユーノは魔力を練り込む。
より強固にするため。

「チェーンバインド！」

ユーノを中心に発動した魔方陣から、大量の魔力の鎖が現れる。

その鎖は複数のアンゲロイを同時に縛ったり、5mという大きさの
アルヒアンゲロイを動けないようにしたりと、凄まじい効力を発揮。

「デイベイイン……！」

と、その時、ユーノのバインドをアルヒアンゲロイが力づくで外
す。そのアルヒアンゲロイは砲撃を溜めて、隙だらけのなのはに容
赦なく棍棒を振り落す。だがそれは――突如として飛んできた複数
個の魔力弾に阻まれ、なのはには届かなかった。その間にチャージ
を溜めたなのは。

「バスター……！！」

凄まじい砲撃が情け容赦なく、アルヒアンゲロイを貫通すると、

その後ろにいた拘束されているアルヒヤイを飲み込み、光へと変えた。

「今のは……？」

ユーノが突如飛んできた魔力弾の主を探すが、見当たらない。

ユーノ君、今の……？

わからないけど、今はこいつらの掃討に専念しよう
うん

西方面の結界内。

はやては背中に黒い羽根を生やし、髪を白く染め上げて戦っていた。ツヴァイとのユニゾンである。片手にはストレージデバイス——シュベルトクロイツを持ち、もう片方には魔道書型デバイス——夜天の書を持つ。そして、アインスは戦闘には参加せず、自らを中心に魔方阵を広げ、アルヒヤイの探索をしている。

「ふんっ！」

アンゲロイを一体全力で殴る。それを為したのは獅童蓮弥。彼は籠手型のデバイスをつけている。このデバイスはデバイスマイスターである八神光輝が、初めて作ったデバイスで、名をチェンジデバイス

イスという。チェンジデバイスの特性は、マスターによってその姿を適当なものに変えることにある。他は大体インテリジェントデバイスと同じ機構をしている。バリアジャケットは黒のインナーに、その上に白い肩が隠れるくらいの上着を羽織り、ズボンは動きやすそうなデザインをしている。

「ブラッディダガー！」

次にはやてが、赤黒い短剣のような魔力弾を生成し、アンゲロイの周りを囲み、炸裂効果を持って爆発させ光に変える。

流石にキリがないな……コイツら何なんだ……？

わからへんけど、前——6年前にも、出てきたことがあるんよ。

兄さんを狙ってるみたいなんや

師匠を？ どうして？

わかったら、苦労しないわ

念話で会話を交わす2人。その間にもアンゲロイを潰していくが、減る気配はない。

その時、アルヒアンゲロイが蓮弥に向かって足を上げ、振り落としてきた。

「チッ」

蓮弥は瞬時にその場を飛び退く。だが飛び退いた先にはアンゲロイが。

「八神流闘術風式……」

アンゲロイが剣を振り下ろす！

「薺波・拳風！」

蓮弥の拳から放たれた拳の形をしたものに、風が纏いアンゲロイが持つ剣とぶつかり、剣を粉々にする。当然そうなれば、アンゲロイの一撃は空を切り、蓮弥には当たらない。

その瞬間、光輝は腕を伸ばし、2体アンゲロイの頭を掴み、2つをぶつけ合う。更に1つに纏めて投げた。そして、拳を腰ために構え、目の前に環状魔方阵を展開。

「竜胆・風拳波！」

拳で魔方阵を打ち抜いた瞬間、風を携えた魔力の砲撃がアンゲロイに突き進み、光へと変えた。

主、見つけました

ほんまか！

はい。主から見て――

言う必要はないよ

「「「！？」」」

突如かけられた念話に全員驚く。

「いくぞバルムンク」

《しくじるなよ》

「わかつてる」

はやて達の遙か上空にそれはいた青いインナーに銀のプレート、白いズボンを着た男――

「ザベル君！？」／「ザベルさん！？」

ザベル「グライムがいた。ザベルは杖を掲げると、その先に炎が集まり、巨大な球体となる。

「バニシングソロウ！」

巨大な業火の球体は、杖を振り落した瞬間、アルヒヤイの元へ向かう。それを阻止しようと、アンゲロイ、アルヒアンゲロイが身を呈して止めにかかり、そいつらの体に業火が触れた瞬間、火柱と化して、奴らを飲み込む。しかし、アルヒヤイは打ち取られていない。今のうちにアルヒヤイはこの場を離れ、アンゲロイの中に紛れようとするが――

「業火……」

そのアルヒヤイの前には、すでに魔力刃を剣のように杖の先に展開したザベルがいた。

「一閃！！」

その一撃はアルヒヤイを真つ二つに斬り裂き、アルヒヤイは身を包む炎に焼かれ光となった。

ごめん。後は頼んだよ
ザベル君！

その言葉を残して、どうやらザベルは転移してしまったようだ。

はやて今は

そつやな。とりあえず、残りを倒すで

北方面の結界内。

「地を駆け」

「天を駆け」

秋平と光輝が背中合わせに立ち、何かの口上を垂れる。

「我らが爪は」

「すべてを斬り裂き」

「すべてを貫く」

「天を翔る龍——八神光輝！」

「地を駆ける虎——笥秋平！」

「「ここに見参——！」」

シーンと辺りは静まり返る。聞こえるのは、風の音だけだ。

「光輝！ ウケねえぞ！」

「いや、そりゃあそつだろ」

「この嘘つきめ！ テメエがウケるつつたんじゃねえか！」

「嘘こけえ——！ テメエがやりたいつつつからやっただろうが！」

敵を前にしながら、口喧嘩をし出した2人。そんな2人に2体のアンゲロイが、「無視するなー！」と言わんばかりに、槍で突きに来た。

しかし――

「あゝあ、仕方ねえ、この論争はこれが終わってからにするか」

秋平の投げた飛針が、アンゲロイの槍の先端を捉え、刃の部分を粉々に破壊。

「ま、仕方ねえか」

光輝のアイアンクローが2体のアンゲロイの顔面を掴み、ギリギリとアンゲロイの顔を軋み上げる。

「てなわけで！」

光輝が一気に力を込め、アンゲロイの顔を握り潰す。

「開幕花火と！」

そして体に蹴りを入れ、距離を離し――

「いきますか!!」

パチンと指を鳴らした瞬間――

爆発!!

2体のアンゲロイは砕け散った。

「……………お前何したんだよ……………」

秋平が口をあんぐりと開け、呆然と光輝に質問する。

説明しよう。

アレは、光輝が持っている火薬入りの煙草（の形をした物）を複数敵の全身にくくりつけ、導火線にライターで、火を付けたのだ。ちなみに煙草に火薬を入れても、大した量ではないので、大量に一気に使わない限り、威力はクソ低い。ただの目眩ましだ。煙草の形にしているのは、ただの隠れ蓑。管理局にバレると質量兵器保持の容疑で、逮捕されてしまうためだ。

「ということだ」

「……………はあ、お前は会う度に戦闘方法が変わるな……………相変わらずやりづらい奴だよ」

その説明の間も、敵の攻撃を避け、攻撃を入れてと倒していく。

「せっかくだ秋平。勝負と行こうぜ」

「勝負？」

「ああ、アンゲロイは1点、アルヒアンゲロイは10点、アルヒアイは50点だ」

「いいねえ、面白そうだ。腕が鳴るぜ」

光輝と秋平は背中越しに語り、一斉に飛び出す！

その瞬間、飛針が飛び交い突き刺していき、斬閃が次々と斬り裂いていく。

秋平の飛針は全身を貫き、コアに当てているが、光輝は起動した大太刀型デバイス——ファルシオンで一刀の元、斬り伏せている。

お前——10——コアがどこにあるか——30——わかってんのか？

大体——20——な。俺はコイツらと——30——何百回と——40——戦ってるからな

なるほどな——40——ま、無事なら——50——それでいいがな！

死にかけ——50——ではあるがな！

そんな念話交わしつつ、恐ろしい数のアンゲロイを潰していく。

（しかし、相変わらず目的がよくわからねえな）

光輝は心の中で考える。

（元々コイツらが本格的に攻めてきたのは、6年前だ。そして狙いは明らかに俺。そのために実力のある奴が出てきたのに、何故あの時しか出てこない？ その後は無駄に戦力を小出しにするだけ……正直あの男が来たら、今でも勝てるかどうか……これじゃあまるで鍛え上げてるみてえじゃねえか）

光輝は思考しながらも、アンゲロイを潰していく。そして数がどんどん減っていく。虚空から現れているのだが、その瞬間には潰されると、減ることはあっても増えることがない状態になっている2人とうとう残りがアルヒアンゲロイとアルヒヤイのみとなる。3体のアルヒアンゲロイは光輝と秋平を囲むようにする。

「さて、残りだな」
「一気に決めるぜ」

光輝と秋平が決めにかかろうとした瞬間――

「――ッ！」

アルヒアンゲロイ、アルヒヤイの体に閃が飛び、その体が斬り刻まれた。その瞬間、光と化し、この戦いは終わった。だが、それを為した者が、光輝達の目の前に立っている。

「何者だ」

光輝はその男にデバイスであるファルシオンを向けて、殺気を込めて言い放つ。

オイ光輝、助けてくれたんなら、敵じゃねえんじゃねえか？
少し確かめたいことがある。お前は下がってろ

光輝は秋平に念話でそう言い、変わらず男に殺気を送る。
男は無言のまま、剣を光輝に向ける。そして――

「――ッ！」

同時に駆け出し、鏢迫り合いが起こる。ギリ……ギリと力が拮抗する。

「あの身の毛がよだつほどの静かな剣閃。そしてそれは氣術だな。
この2つのことに該当する奴を1人、俺は訊いたことがある」
「……………」

罅迫り合いのまま、光輝は男に言及していく。男は無言のまま、光輝を見やり、フツと笑う。

「剣静”だな”」

その一言で、光輝と男は剣を弾き合い、離れる。

「……紫燕もお喋りになったな。それともお前にだけか？」
「さあな。それより何故貴様がいる？」

男はそれには答えず、鞘に剣を納めていく。そしてカチンと仕舞い終わった瞬間――

「――ッ！」

光輝の身体から無数の切り傷が生まれ、血が飛び出る。光輝は思わず膝を着く。

「……それは置き土産だ。とっておけ」
「とんだ置き土産もあったもんだな」
「また会おう」

男はそれを言い残し、その場を去っていった。男は一瞬にして見えなくなる。

「大丈夫か、光輝！」
「問題ねえよ。薄皮一枚斬られたただけだ」

心配する秋平に光輝は立ち上がり、そう言う。

（剣静……何故裏の住人である奴が、表に出て、尚且つ奴等を倒しているんだ？ ……ハア……とにかく裏で何か起こってるのは、間違いないさそうだな。何も起きなきゃ良いが……）

「秋平、一応、警戒だけはしておけよ」

「何のだよ？」

「なんでもだ」

秋平とそれだけ話し、各方面でも戦いは終わったらしく、一旦海鳴臨海公園に集まり、情報を共有し、帰ることになった。ちなみに光輝と秋平の勝負は、引き分けだった。

とあるビルの屋上。そこに4人の姿があった。

「静也！」

「……なんだ？」

「なんだじゃないよ！ 光輝に何してるんだよ！」

「……挨拶だ」

「挨拶って……」

「落ち着かないかい」

「むぎゅ」

ザベルの訴えに静也は冷静に返し、ザベルが何か言おうとしたところをアルラが頭を叩いて宥めた。

「静也もあまりああいうのは感心しないねえ」

「……すまない。少しやり過ぎた」

「わかればいいさね」

アルラはそう言って、未だに少し怒っているザベルを宥める。

「あれが“波動掌”？」

「ああ」

リンが静也に尋ね、静也も肯定の意を表す。

「あんま強そうに見えないネ」

「そうでもない」

静也はそう言う^{おもむろ}と徐に、脇腹辺りの服を捲る。そこにはアザのよ
うなものがあつた。

「あの一瞬、間隙を突いて、蹴りを入れてきた。大した判断の早さ
だ」

「静也に一撃入れた力。流石はあの“拳聖”——村雨紫燕の弟子
ネ」

「それより気付いたか？」

「お、海鳴の雰囲気に変なことネ？ 気付いてるヨ。近々戻る
かもしれないネ」

「ああ、アレが何かしようとしているならば、止めねばな」

リンと静也はそう他の2人には聞こえないように話し、その後、

アンゲロイ達の撃破を確認したアルラが「戻るよ」と言い、次元航行艦に戻った。

八神家。

「え？ 兄さん、クロノ君の艦で働くん？」

「ああ、アースラでな」

夜飯も食べ終わり、一家団欒としている。はやてと光輝が話している――

「久々に帰ってきたと思ったら、今度は巡航艦任務か……」
「世話しねえ奴」

シグナムとヴィータがどこか呆れたように言い――

「それにまた傷だらけで帰ってきて」
「……ソイツの性分だろう」

シャマルがプンプンと怒るように言い、ザフィーラが仕方がないと諭す。

「そつえば、それは誰にやられたんだ？」

「そつえばそうです。光輝は誰にやられたですか？」

アインスとツヴァイが、光輝の全身の切り傷について訊いてきた。それに光輝はポリポリと頭をかき――

「通り魔だな」

と口にした。

それにその場の皆が、ズコツとなる。

「……答えになっていない」

「と言われてもな……それ以外表現しようがない」

アインスの追求にも光輝は、飄々と答える。光輝は真実を伝える気はないらしい。まあ実際通り魔みたいなものだったが。

「まあいいだろ。それより、色々あって忘れてたんだが、お前に見て欲しいもんがあったんだ」

光輝がアインスに何かの設計図のようなものを渡し、アインスが「これは？」と訊き、「実はカートリッジシステムの――」と光輝がどうたらこうたらと話す。

「何か信じられへんなあ、兄さんが難しい話しとるのは」

「そうですね」

「でもはやてちゃん、光輝君はあの頃も一人で、カートリッジを造ってたみたいですし」

「案外そういう才能もあったんじゃないかねえの」

「アイツは思いもよらないことをするからな……」

上から、はやて、シグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラと

光輝の感想を述べていく。

光輝は小学、中学と決して成績は良くはない。寧ろ悪い。だがそれは光輝が、学校の勉強に全く興味がなく、勉強をしなかったのが原因であり、別に頭が悪いわけではないのだ。だから、勉強さえすれば出来るといった人種であった。

こうして日常は終わっていった……。

第2話 『現れる敵、深まる陰謀』（前書き）

【 まだ日常が続けば良いと思っ た 】

【 だけど世界の流れはそれを赦してくれなくて 】

【 確実に私たちは何かに巻き込まれていく 】

【 何もわからなくて、何が起きてるのかもわからなくて 】

【 それでもなんとか頑張っ て 】

【 傷ついてでも突き進ん で 】

【 そうしたら私たちは何かを得られると信じて 】

第2話 『現れる敵、深まる陰謀』

【7月17日】

艦船アースラ。

「しかし、巡航艦任務は暇だなあ……」

「気を抜くな。いつ何があるかわからん」

「そんなに気を張らんでも」

「君は気を抜き過ぎだ」

艦長席に座るクロノと光輝が、そんな会話を交わす。そこにエイミイが、お茶を持ってやってきた。

「艦長、お茶です」

「ああ、ありがとうエイミイ」

渡されたお茶をクロノは、素直に受け取り、そのまま飲む。決して、俗に云う“リンディ茶”にはしない。

「てか、お前ら結婚式挙げねえの？」

「ぶっ！？ な、な何言ってるんだ！」

「うっん、なかなか時間がないんだよねえ」

光輝の一言に、お茶を吹いて恥ずかしがるクロノに比べ、エイミ

イは余裕の表情で答える。

「別にもう婚約してんだから、ンな恥ずかしがらんでも」

「そうだよクロノ君」

「……………」

光輝とエイミィの言葉に、恥ずかしがった自分が、更に恥ずかしくなり、目を伏せて俯くクロノ。

その時――

「通信…………？」

通信が来た。

た…け…こ…れ…

通信は所々途切れており、しかももう切れた。クロノは何かあったのだと感じ、クルーに何処から送られた通信かを調べさせた。

「近くだな……光輝行けるな」

「もちろん」

「よし、武装局員は第一種戦闘待機だ！」

その救難信号を受けて、クロノは行くことを決めた。クロノは通信で、全クルーにそう伝えた。

光輝はそのクロノの発言で、転送装置のところへ向かう。

転送出来る地点まで、着いたら転送でそのまま行きためた。

光輝が転送装置の場所に着く頃には、武装局員はすでに揃っていた。

そこで光輝が、全員に声をかけるため前に立つ。この中では、光輝が一番階級が高いためだ。つまりは隊長だからである。

「えゝ、目的地に着いたら、恐らく戦闘になるだろう。一応、どこかの施設からの救難信号みたいだ。俺達はこの施設を襲った敵を捕まえるのと同時に、施設の生き残りを救出するのが、今回の主な任務だ。何か質問はあるか？」

「……ちつ……犯罪者が偉そうに……」

光輝がそう言った後、呟くような声でそんな陰口が聞こえた。しかし、光輝は意に介さず「ないな」と言うと、バリアジャケットを展開する。

それは、黒を基調とした衣服に、胸には水色の十字。そして赤いマントを羽織っている。

そして転送出来る地点まで着き、全員転送される。

転送されたもの達は、光輝の後ろについて、施設へ向かう。

いくら転送装置でも、細かい場所の指定は出来ないため、こうして自ら飛んで、目的地に行かなければならない。まあ、でも近くに転送されてるのは、事実なため、すぐに着く。

全員が地面に足を着け、その施設の惨状を見る。

酷いものだ。施設は焼かれ、所々崩れ落ち、正直もう生きてる人間はいないだろう。

そう考えていた光輝は、目の前から気配を感じ、臨戦態勢に入るとはいつても、構えているわけではなく、ただ手をぶらんとさせているだけだが。

「どうしたんですか？」

そこにこの武装隊の副隊長が、光輝の雰囲気が変わったことに、

質問を投げ掛ける。

「気配くらい読めるようになれ。来るぞ」

光輝のその言葉で、施設の壁が急に壊れ、こちらに一陣の風が、突っ込んできた！

撃！

その一陣の風——フードを目深に被った人間の放った拳は、光輝の拳とぶつかり、拮抗する。

その拮抗した力は、行き場を失い、周りに風となって駆ける。

フードの人間は、押しきれないと悟ったのか、その場を離れる。

「なるほどお前か」

光輝はフードの男とぶつけ合った拳を見て、合点がいったという風に言う。

「聖響騎士団団長ハルス〃サバイブ」

「……………」

光輝のその言葉に、フードの男は黙りながらも、微かに見えるその口角を上げる。

「だったら捕まえるか？」

「それもいいけどな……お前の相手をしてる暇はなさそうだし、さっさと行けよ」

フードの男——ハルス「サバイブがそう言っと、光輝は手を振って、逃げるように言う。

それに副隊長が、慌てて声をかける。

「八神一尉！ 聖響騎士団といたら、第一級次元犯罪組織！ 様々な施設を破壊して、回ってる者たちです！ 逃がすとは、どういうことですか！」

「本性現したな犯罪者！ 犯罪者を逃がそうとするなんざ、やっぱり犯罪者は犯罪者か！」

そこに先程、陰口を言った局員が、参加してきた。

光輝はその2人の言葉に、肩を竦める。

「随分な言われ具合だな光輝」

「耳にタコだよ」

ハルスと光輝は、まるで仲の良い友人のように、会話を交わす。それに無視された局員は、光輝の肩を掴み、強制的に自分の方に向かせる。

「こっち向けよ！ 犯罪者と仲良く話しやがって！ どういうつもりだよ！」

「お前、止めんか！ 飯にも上官だ！ 口の訊き方に気を付けろ！」
「くっ……」

局員は副隊長にそう言われ、口を閉じる。確かに犯罪者とはいえ上官。口が悪かった。

だが——

「だったら俺が捕まえてやらあ！」

納得は出来ない。犯罪者は捕まえる。でなければ、管理局員である意味がない。犯罪者を捕まえて、人々が平和に暮らせるようにするのが、管理局員の仕事なのだから。

局員は1人で、自分の持つ杖型のストレージデバイスをハルスに向ける。そして――

撃！

砲撃を放った。

ハルスはそれに手を翳す。

その手とぶつかった砲撃は、一瞬拮抗するが、ハルスが捻るように握った瞬間――砲撃は消え去った。

「な――ッ！」

それに驚く局員。

光輝はそれに溜め息を吐く。

「では、お言葉に甘えて、去らせてもらっ」

そしてハルスは多重転移で逃げた。

「教えてください八神一尉。何故逃がしたのですか？ もっともな理由がなければ、牢獄ものですよ」

「……知らねえだろうが、アイツは元管理局員。それもエリート揃いの戦技教導官出だ」

「それは……」

副隊長はそれに驚く。まさか、元管理局員が第一級犯罪組織の団

長とは……、と。だが――

「実力で敵わないから、逃がしたということですか？」

それは問題だ。たとえ、実力で敵わなくとも、犯罪者を捕まえるためには、立ち向かわなければ、他に示しがない。

「それもまああるが……それは一部だ。本当の理由じゃない。お前は感じないか？ あの施設から感じる……まるで、獣みてえな殺気を」

「……………」

副隊長は光輝の言葉に、施設の方に目を凝らす。

「正直、俺はハルスと戦ったら、そっちにつきつきりになる。だがな、多分そうなったとき――」

爆！

その瞬間、施設の方から爆音が轟き、何かが上空に飛び出し、滞空する。

「あ……それは……」

「お前らだけじゃあアイツは倒せない」

そこに滞空していたのは、体はライオンのようにでいて、足はチーターのようで、尻尾は蛇であり、その背には黒い翼が生やしている体長4 m級の獣がいた。

「合成獣か……。どうやら、違法な研究をしてみたいだな」
キメラ

光輝の言葉は届かず、全局員がその異様な獣に言葉をなくし、呆然とする。

「ハア……結界班！」

『は、はっ！』

「奴を逃がすな！ 急いで結界を張れ！ 武装班は奴と対峙する！

囲め！」

『はっ！』

光輝の突然の激励に、全員目を覚まし、光輝の指示通り動く。その間、キメラは沈黙。まったく動く気配がない。そして周囲を囲むことに成功し、光輝以外の全員が砲撃を溜める。

「撃て！」

撃！

その砲撃はキメラの元に向かい直撃！ したかに見えた……。

消えた……？

光輝はそれにいち早く気づき、キメラの行方を探す。

「が……はっ！？」

次の瞬間、1人の局員がキメラに鋭い爪により、切り裂かれた。そのまま局員は落ちていくのに、他の局員が助けるために追っていく。

キメラは再び獲物を変え、駆ける！

速い……！

その速度はまさにフェイト並みの速さで、視認できる速さを超えていた。そして2人目もやられる。

こうなると、局員はパニックになり、烏合の衆と化した。それに光輝は舌打ちをし、キメラを見る。

キメラは再び移動！

光輝はその進行方向と局員の配置で、キメラの大体の位置を測定し、駆ける！

次狙われたのは、あの光輝を罵った局員。

「……！」

その局員は、突如現れたキメラに死を覚悟し、目を瞑った……が

撃……！！

衝撃は来なかった。予測に成功した光輝は、キメラにかかと落としを食らわせた。

「デメエら全員邪魔だ！ 怪我人連れて、さっさと結界の外に出ろ……！」

その瞬間、光輝はそう言い放った。

「な、何言つて……！」

そこに光輝を罵った局員が、意見しようとする——

「足手まといだっつってんだよ！ さっさと結界の外に出やがれ！
！ 上官命令だー！！」

その場にいた全局員が、光輝の言葉に多少の不満を漏らしながらも、事実であることに変わりはないため、大人しく速やかにこの場を去った。

《坊ちゃん、もう少し言い方があるんじゃないですか？ そんなことだから、嫌われるんですよ》

「俺は本当の事を言っただけだ」

《素直じゃないんですから》

「メンテナンスしてやんねえぞファル」

《坊ちゃん、なんて鬼畜な！ デバイスの安らげる時間を奪うなんて！》

「じゃあ余計なこと言うな」

《……わかりました》

会話を交わす光輝とそのデバイス——ファルシオン。

デバイスにしては、妙に話すこのデバイスは、インテリジェントデバイスでもなければ、アームドデバイスでもない。このデバイスは、新しくカテゴリに加わったソーディアンデバイスというもの。

しかし、これは現代の技術では、作れないもので、古代の人物が作ったとされている。

大体の機構は、インテリジェントデバイスやアームドデバイスと同じだが、違うところも多々ある。

そんなデバイスを扱うのが、この八神光輝である。

光輝はファルシオンと会話をしながら、キメラが落ちた地上に立つ。その時、肩に乗っていた朱羅は飛んで離れ、白亜もある程度離れた。

そこには砂埃を被りながらも、しつかり4本の足で立つキメラがいた。先程の攻撃は効いてないようだ。

だが、それも当たり前だ。光輝は勘で蹴り抜いたため、しつかりと相手の急所も狙えず、十分に力を入れることも叶わなかったのだから。

さて……どうするか……。

そうキメラに注意をやりながら、思案する光輝。キメラは光輝を敵と定めたようで、グルル……、と警戒しながら、唸りを上げている。

奴のスピードはフェイト並み……正直俺じゃあ追い付けないな。

その瞬間、再びキメラが消えた。

「後ろか！」

撃！

光輝の回し蹴りとキメラの爪が、ぶつかり合う。
全くの互角で、どうやら力は同程度のようだ。

ちなみに光輝は、氣と呼ばれるエネルギーを使える。これは自身の精神力や生命力といったものを使う。

この氣と魔法を混ぜ合わせることで、氣功魔術と呼ばれるものを使う。

この氣功魔術というのが、魔法をそのまま使うより、威力や防御力が上がるようになる。このエネルギーを魔氣力という。

光輝は今それを使っている。

キメラと光輝はお互い弾き——ブンツと消える。

次の瞬間、再びお互いの爪と拳がぶつかっている。

また消え、またぶつかる。

傍目には互角の勝負だ。

だが——

くそがっ！

互角ではない。

光輝はなるべく相対速度を同じにしようと動いて、相手に合わせようとするが、完全にスピードは相手が上だ。

傍目には見えないキメラの爪が、光輝のバリアジャケットを肌を切り裂いていく。

「仕方ねえな……ここは動きを止めるか」

光輝は動きながら、懷に手を入れる。

そして何かを取り出した。

それは細い絃だった。

——八神流絃術『綿毛』——

絃がふわふわと宙を浮遊する。

そのことに気づいたキメラは、警戒しその場に止まる。

そして近づいてきた絃を切ろうと、爪で切り裂く。

だが――

その絃は切れず、逆にその腕にまとわりつく。

光輝の使う魔氣力には、氣の性質である“物体に氣を送り込み、その硬度や鋭さを変える”ということも出来る。

これにより、この絃は絃というしなやかさを持ちながら、鋭さと硬度を持ち合わせることに成功している。

キメラは外そうともがくが、全く切れず、ドンドン巻き付いていく。

「捕らえたぜ！」

絃は完全に巻き付き、光輝はその絃を引く。

しかし、キメラも負けはしない。

引っ張り合いになり、両者互角。

チツ、この絃に巻き付けられながら、体が切れねえってことは、他にゴーレムみてえな堅い奴も合成してやがんな……。

光輝は頭に筋を浮かべながら、キメラとの互角の綱引きを続ける。

その時、キメラの口が開き、光輝にその口が向けられる。

それに光輝は、 なんかやべえ！ と感じ、直感に任せて、横に跳ぶ！

その瞬間――

撃！

まるでレーザー砲のような、砲撃が放たれ、通った地面を抉りながら、風を巻き起こす。

それにより、絃は切れ、光輝は吹き飛ばされる。

直撃は受けなかったものの、余波だけでも結構喰らい、ゴロゴロと地面を転がった。

なんつつ砲撃放ちやがんだよ……。

その惨状を見て、心中驚く光輝。

正直、ここまで手強いとは思わなかった。

「——ッ！」

光輝は上空からの殺気に気づき、地面を蹴ってその場を離れる。

そこにキメラが光輝を踏みつけようと、上から降ってきた。

光輝はそれを避け、瞬時に起き上がる。

——八神流針術『飛燕』——

光輝は腰の方に手を持っていくと、両端が尖っている飛針を取り出し、キメラに投げる！

爆！

その瞬間、飛針は爆発するように魔力量が上がり、スピード、威力共に急激に上がる。

それにより、キメラは避けきれず、その飛針がキメラに刺さる。

【グオオオオ！？】

キメラはそれに痛みを訴えるように、吠える。

この飛針は、以前アインズに相談していたもので、カートリッジシステムのよう、魔力を込めた飛針である。効果は上記の通りだ。流石にこれは通るか……。

光輝とキメラは、再び高速戦に変わる。

どうやら先程の攻撃で、より凶暴性の増したキメラは、光輝に荒れ狂う様に攻撃をしてくる。

光輝はそれに直撃は受けないものの、掠り傷やらは増えていく。完全に躲す事が出来ないのだ。

奴の速さに追い付くには、白亜と融身をするしかない。だが、融身をして倒せるかは分からない。融身をすれば、自身の魔力を持つてかれる。その上、光輝は先天的に魔力の絶対量が少ないのだ。失敗すれば、負けは必至だ。

「飛燕！」

再び、飛針を飛ばすが、キメラはもう学習したのか、そんなものには当たらない。

それに光輝は、舌打ちをする。

やっぱり当たらねえか……。

元々あの素早いキメラに、当たったこと自体が奇跡に近かったのだ。それなのに、この高速戦状態で、当てるなど不可能だろう。

わかってた事だが、やはり悔しいものは悔しい。

さて、どうするかとキメラと殺り合いながら考える光輝。

正直あの装甲を貫くのは、魔力を練るまでに時間がかかりすぎる。なのはやフェイトなら、もう少し楽に倒せるんだろうなあ、とちよつと悲観的になる。

「まあ、考えても仕方ねえか……」

そう呟き、とうとう大太刀——ファルシオンを抜き放ち、キメラの爪と拮抗する。

だが次の瞬間、光輝は力のベクトルを違う方向に向け、キメラのバランスを崩す。

「らあ！」

光輝はバランスを崩したキメラの前右足に向けて、斬りを放つ。しかし、その一撃はキメラの皮膚を傷つけるにも至らない。

光輝は一旦離れる。

キメラはその光輝を追う。

軽く追い付いたキメラの爪が、光輝を襲う。

しかし――

その一撃は、光輝の大太刀とぶつかったと思いきや、爪は方向を変え、地面に振り落とされる。

光輝はその隙に、また前右足を大太刀で斬りつける。

ザッとまた離れる光輝。

キメラは頭が良いのか、先程のように突っ込まず【グルル……】と唸って、警戒するように、光輝の周りを歩く。

光輝は自分からは突っ込まず、動きを止めて、キメラを待つ。

【グオオオオオオ!!】

「く——ッ!」

キメラの突然の雄叫びに、光輝は咄嗟に耳を塞ぐ。

その判断は正しいだろう。この距離でまともに聞いてしまえば、鼓膜が破けるほどの声だったからだ。

【ガア!】

「チッ!」

その隙に、キメラは光輝に突撃し、その爪を振り落としてくる。

光輝は舌打ちし、その爪を大太刀で受け止める。今度は受け流す余裕がなく、正面から受けた。

光輝の耳には、未だキーンと耳鳴りが響いている。

平衡感覚が狂った光輝は、キメラに押され始める。

どうやら、その巨体で、踏み潰すつもりらしい。

その瞬間、横に何かが見え、光輝は鞘を取りだし、何かを防ぐ。

蛇か……!

それはキメラの尻尾となっている蛇だった。

光輝は片手で、キメラの4mという巨体を支える。

だが、段々と足が沈んでいく。

光輝はその細腕に見合わず、握力が200kg以上ある。それだけ、筋力も相当ある。

その為なんとか片手でも保ってはいるが、時間の問題だ。

引くことは、踏み潰されることを意味し、かといって押し返すに

は、せめて両手を使えなければキツイ。
その上、未だ耳鳴りが響くものだから、どうにも思考が纏まらない。

その時――

撃！

どこから放たれたのか、砲撃が進みキメラの体に当たる。
キメラの体は全く傷つかなかったが、一瞬注意が逸れる。
その好機を見逃すはずがなく、光輝は一気に力を入れると、キメラを一瞬浮かす。その隙に光輝はその場を抜ける。

誰が砲撃を放ったのか――

「さ、さっきの借りは返したからな！」

それは光輝を罵った局員であつた。大声で震えながらも、勇気を出して、キメラに砲撃を放ったようだ。

そんなに震えんなら来なけりゃいいのによ、と微笑を浮かべながら、思う光輝。

なんだかんだ言いながらも、少し嬉しいのだ。

だが、キメラはお気に召さなかったのか、グルル……、と唸り、あの局員の方を向く。

光輝は、マズイ！？、と思い、急いで白亜を呼び寄せる。

【グオオオオオオオオ！！】

キメラは吠えた瞬間、その姿を消す。

次に現れたのは、あの局員の目の前。

局員は恐怖に震え、足が動かない。死、という文字が頭に浮かぶ。自分の死にざまは見たくないのかどうか、よくわからないが、とに

かく目を瞑りたくなり、目を閉じた。

しかし——その局員に、死は訪れなかった。
光輝が動けない局員を抱きかかえ、躲した。

「つたく、わざわざ出てくるからこうなんだよ」

「なっ……！ あん——」

「だが、ま、助かった」

光輝の言葉に文句を言おうとしたが、そう言われ遮れる。

光輝は局員に背を向け、キメラと向かい合う。

その際、光輝の背中を見た局員は、思わず言葉を失う。

「……！！」

「気にするな。掠り傷だ」

そんなはずはなかった。

光輝の背中には、バリアジャケットを貫通し、深い爪痕が残っていたのだから。

そんな光輝の洋装は変わっていた。

さっきまで、黒を基調とした衣服が、今は黒と白を基調とした色に変わっていた。さらに足には獣の毛皮のようなブーツを履いている。

「さて、そろそろフィナーレといこうか」

【グルル……】

光輝とキメラは瞬時に駆ける！
スピードは——

激！

互角！

光輝の拳とキメラの爪が、何度もぶつかり合う。

だが、さっきまでと違い、光輝が押し始める。

さらに――

【ガア……！？】

次は腕でキメラの爪の攻撃を受け流し、前右足に掌底を喰らわす。そして光輝は十分に離れた。

すると、キメラは前右足が動かなくなり、その場を動けなくなつた。

「3発か……タフな奴だよ全く……」

光輝のこの攻撃は、衝撃を内部に貫通させる攻撃で、キメラの前右足にダメージを蓄積させていったのだ。

光輝はファルシオンの形状を変える。

それは弓となり、光輝はそれを構える。更に、カートリッジを2発ロード。

「まともに動けないお前が取る行動は一つだ」

【ガア！！】

キメラは大きく口を開け、光輝にその大口を向ける。

あの砲撃を撃つつもりである。

「さあて、どっちがタフか……試してみようぜ！！」

【グオオオ！！】

撃！！

光輝の放った矢が飛び、キメラの砲撃が光輝に突き進む。

キメラの砲撃は、光輝の放った矢を呑み込み、そのまま光輝を呑み込んでいった。

しかし――

【ガ……ア……】

光輝の放った矢は、キメラの砲撃に呑み込まれたかと思いきや、その矢は消えず、そのままキメラの口から侵入して、貫通した。

その矢は、キメラの内側から風の刃で、切り刻んだ。これは白亜と融身を行ったことにより、光輝が“風”の魔力変換資質を得たためだ。

――八神流弓術風式『竜胆・辻風』――

キメラは当然そんな一撃に耐え切れず、ドオツと倒れた。

光輝はというと――

「か……ふ……」

膝をつき、血反吐を吐いていた。

それはそうだ。キメラの一撃は確実に直撃していた。

一応、バリアジャケットの防御力に+αを施してはいたが、キメラの一撃は地面を抉り、風を巻き起こすほどの砲撃だ。

無事なはずがない。

大丈夫か光輝！？

そこにクロノから通信が届く。

「ああ……問題ごふっ……ない……」

光輝がそれに血を吐きながら答える。
まったく大丈夫そうではない。

すぐに医療班が来る！

「……………」

クロノのその言葉に光輝は答えない。

正直、話すのも辛い。てか、話したくない。話す度にズキズキ痛むし。

へへへ、どうだ化け物め。俺の方がタフだったみたいだな。

と、そんな風に勝ち誇る光輝。どっちもどちな状態な気がするが。

そんな光輝の頭に白亜が乗り、朱羅が肩に乗る。

コイツらはご主人様を労わるということを知らんのか……。

とか、思いながら、やってきた医療班に光輝は運ばれていった。

「光輝君、大丈夫？」

「大丈夫だ。問題ない」

「何でそんな状態で、ふざけるかなあ……」

傷だらけで、ベッドに寝ていながらも、猶もネタを放り込む光輝。

「そっちが振るから……」

「振ったんじゃないくて、純粹に心配してるの」

もお、とプンプン怒るエイミ姉さん。そんな貴女が可愛いです。

「な、何言ってるの光輝君!？」

「人の婚約者を誘惑しようとするな」

と、そこにクロノ君登場。今となつては身長も大きくなり、あの小さくて可愛かったクロノ君はどこかに行ってしまった。

「誰が可愛いだ!」

「それより、光輝君。思ってることが全部口から出てるよ……」

「お、ホントだ」

「ワザとだろ! 絶対ワザとだろ!」

あまりにワザとらしい光輝に、クロノが怒鳴りつける。

それに光輝は爽やかに笑って、「そんなわけないだろクロノ君。はっはっは!」と言った。

その光輝の態度に、なんだかどうでもよくなったクロノは、話題を変える。

「それで光輝、聖響騎士団のことだが――」

「ああ、すまなかったな。逃がしちまって」

「いや、あの状況では正しかったさ。それより、確か君はあの団長と知り合いだったな」

「まあな。チーム組んでたから、言っちゃえば、先輩後輩だな」

光輝は少し寂しそうに話す。ちなみに、あっちが先輩である。光輝が後輩だ。

「一体何があったんだ？ 元管理局員が犯罪者になるなんて、よっぽどな理由があったんじゃないのか？」

「……そうだな……しいて言うなら、護るべき者を護れなかったから……かな……」

光輝はクロノとは別方向を向き、悲しげな表情を浮かべる。

その光輝の様子に、これ以上追及しても何も話さないだろうと思いい、エイミィと共に医務室を去った。

その数分後、再び医務室のドアが開く。

光輝は誰かと思い、そちらに顔を向けると――

「お前……」

「……」

いたのは、光輝を罵った局員であった。

その局員は、黙って光輝のそばまで来ると、急に頭を下げた。

「先程は上官にあんな口の訊き方をしてしまい、申し訳ありませんでした」

「……気にしないでいい」

光輝はそれに頭をポリポリとかきながら、ぶっきらぼうに答える。しかし、その局員は顔を上げない。その状態でさらに言葉を紡ぐ。

「訊いてもいいでしょうか？」

「何だ？」

「本当にあの闇の書事件を裏で操って、1つの世界を滅ぼそうとしたのですか？」

それは全局員に伝わっている噂である。

光輝は裁判時にそんなことを口走り、そういうことになったのだが、局員に真実は伝えていない。だが噂だけは流れ、世界を滅ぼそうとした、まで飛躍した。

光輝はそれに真剣な顔となり、答える。

「本当だ」

「……では何故自分を助けてくれたのですか？」

管理局は正義。そして犯罪者は悪。今までそんな風に考えて、この管理局で働いてきた。だがこの人は――八神光輝は管理局局員であり、犯罪者。正義であり、悪。この局員はわからなくなったのだらう。

「ハア……俺の目の前で死なれても、気分わりいだろ」

「……………貴方は正義なのですか？ それとも悪なんですか？」

その発言にさらにわからなくなった局員は、そう訊いた。

「何が悪で……何が正義かは自分で決める。そうじゃないと意味がない。他人の正義にお前の正義はない」

何が悪で……何が正義……。

局員はそれを聞くと、はい……、と言って出て行った。

【チチッ】

【ミ〜】

局員が去ると、朱羅が光輝を突いてきて、白亜が頬を舐めてきた。

「何だお前ら？　もしかして、お疲れ様とでも言ってるのか？」

《何か食べたいだけじゃないですか？》

ファルシオンの言葉によくよく考えてみると、朱羅の突きが案外痛く、白亜の爪が軽く食い込んでる気がする。まるで何かを強請^{ねだ}るように。

光輝はそれに、フッ、と笑い――

「だから……主人をもっと労えや――！！！！」

光輝の怒号が炸裂したのだった。

聖響騎士団基地。

「なんだあ？　なんだか嬉しそうだなあ大将！」

ハルスに話しかける男。ギターを鳴らしながら、近付いてきた。

「そうでもないさ」

それにハルスは、微笑を浮かべながら返す。明らかに嬉しそうだ。

「彼処はどんな研究をしていたんだ？」

そこに凜々しい感じの女性が、話しかけてきた。

「合成獣キメラの研究だ」

「ふんっ！ 相変わらず、いけ好かないな」

「そう言うな」

怒る女性をハルスは宥める。

それに女性がハルスをキツと見る。

「これ以上、奴らを野放しにしていけないのか？ 我らが本気を出せば、きっと管理局も倒せる！ そうすれば、実験で苦しんだ子供だつて救えるだろ！」

そう女性は力を込めて、伝わるように言う。これは結構前から言つたことなのだが、ハルスはダメだ、と言うばかりで、取り合わない。

「ダメだ」

それは今回も同じようだ。

「何故だサバイブ！」

「……………」

理由を訊くが、ハルスは答えない。それに女性が声を荒げようと

して――

「まあ待てよ2人さん」

その間に、ギターを持った男が割り込む。

「ハルスもいい加減教えてやったらどうだ？　じゃねえとコイツは納得しそうにねえぜえ！」

ジャラーンツとギターを鳴らす。特に鳴らした意味はないが、まあノリだろう。

それにハルスは溜め息を吐き、話し始める。

「ではフロア。お前は管理局を倒した後どうする？」

「え……？　それは……」

そう言われて言葉に詰まる。フロアと呼ばれた女性は、言葉が浮かばなかった。

確かに具体的にこうするというプランはないが、こうしている間にも苦しんでいる子供がいる。

それを考えると、管理局を倒さなくては、という思考になるのだろう。

「オレ達には、この次元世界を統治するほどの力はない。そして、統治するものがいなければ、この次元世界は正に混沌の世界と化すだろうな。犯罪者が闊歩する世界だ」

「だ、だが！　それは私たちが片っ端から倒していけば――」

「無理だ。この次元世界がどれほど広いかわっているだろう」

「……………」

ハルスの言うことは正論である。

何も言えなくなったフロアは、大人しく近くのソファに座った。

「まあそう深刻に考えなさるな！　なるべく多くの子供を救うために、こうして違法研究施設をオレ達がぶっ潰して、いつてんだからよあー！」

「ジョアンの言う通りだ。それに全部が全部管理局のものではない」

「それは……わかってるが……」

「まあ悩みなあ！　若い内は悩むのが、一番だっぜ！」

ジョアンと呼ばれた男は、おどけるようにギターを鳴らしながら言う。

フロアは「少し1人で考えたい……」と言って、部屋を出て行った。

「うーん、若い！　若いねえ！　なあ大将！」

「まだ30にもなっていない奴が、言う台詞か」

「はっはっは！　まあいいじゃないのお！」

2人はまるで親友同士のように会話をする。

「それより大将！　今日は誰と会ったんだあ？」

「気づいてたか……」

「大将は分かりやすいからなあ！」

「……昔の部下……いや相棒……？　ふむ、いや後輩か……」

ハルスはどう呼ぶか悩み、最終的に後輩に決めたようだ。

「管理局員なのか？」

「ああ」

「何だ意外だな！ 大将に管理局の奴で、気に入ってる奴がいるなんてよお！」

「……………」

「おっとすまん。これは失言だった」

ハルスの射殺さんとするような睨みで、ジョアンは素直に謝った。

「……オレにあんなことはあったがな。1つが黒いからと言って、全部が黒いとは言わないさ」
「ま、そうだな」

それから会話という会話はなく、聖響騎士団の一日は終わっていた。

第2話 『現れる敵、深まる陰謀 2』

【7月17日】

次元航行艦『アーネスト』。

「参ったねえ」

「どうかしましたか？」

アルラがパソコンの前で、そう声を漏らすのに、ザベルがどうしたのかを訊く。

「いやねえ、実は薬系の補給がなくてねえ。あんまり本局に補給しに行くのは、よくないしねえ」

「……あ！ だったら、ウチに寄りますか？」

「アンタん家にかい？」

「はい」

そうしてザベルの出身世界である管理内世界『アメルダ』に、向かうことになった。

「こんな村の外れに、ザベルの家があるのか？」

「うん。昔色々あって、村から離れたんだよ」

「へえ」

リンとザベルがそんな会話を交わしながら、森の中を進む。他には、静也もいる。アルラは艦の方でお留守番中。

「あつた。アレだよ」

ザベルの家が見えてきた。

そこで樹の影から、誰かが現れた。

それにリンと静也が、警戒を表す。

「お……兄ちゃん……？」

「リース」

樹の影から現れた少女は、そう驚愕するように呟く。

ザベルはよお、といった感じに、その少女——リースに手を振る。そんな2人の様子に、リンと静也は警戒を解く。

「元氣してたか？」

ザベルがリースに近付き、そう訊いた。

それにリースの体は、プルプルと震えだし――

「もお！　今までどうしてたのよ！　ずっと連絡もしないで！」

ザベルに怒鳴った。

そりゃあもう金髪のポニーテールを盛大に揺らしながら、プンプンと怒り、ポコポコと胸を叩く。

「う、ごめん。そんな怒るなよ」

「ずっと心配してたんだから！ どうしていつも連絡の1つもくれないのよ！」

「そっぴうの苦手なんだよ」

「それでも何かあるでしょ！ ホントに勝手なんだから！」

「あノ」

2人の壮絶な言い争いに、リンが気まずそうに、2人の間に入る。リースはそれで初めて、人がいると気づいたようで、顔を赤くして、サツとザベルから離れた。

「え、えと……」

「いやあ、ごめんナ。ワタシ達は、ザベルと同じ部隊の同僚だよ」

「そっぴなんですか。お見苦しいところをお見せしてしまい、申し訳ありませんでした。よかったら、ウチでゆっくりしてってください」

リースは丁寧にそう言うと、3人を自分の家に招き入れた。

そうして家に入ると、リースは「じゃあおじいちゃん呼んでくるから、お兄ちゃんはお客さんをリビングの方に、連れてってあげて」と言って、リースは奥の方に、とてとて歩いていった。

「可愛い子だね、ザベル」

「そっ？」

リンの言葉に、ザベルは疑問符で返し、リンと静也を椅子に座らせる。

それから数分経ち、そこに歳を取った白髪 of 男性が現れる。

「なんじゃ今日は一体どうした？」

「あ、じいちゃん」

「お邪魔してるネ」

「……………」

「お、なんじゃなんじゃ、マブい子じやのう。ちよいと脚を触らせ——」

「お・じ・い・ちゃ・ん？」

「じよ、冗談じゃ……………」

白髪の男性は、後ろからのリースの殺気に、思わず震え上がり、そう言った。

「こほん、では自己紹介でもしようかの。僕はクオル＝グライムじや」

「あ、私もまだでしたね。リース＝グライムっていいいます」

「ワタシはリン＝ミヤオっていうネ」

「俺は剣静也だ……………」

お互い自己紹介を交わす。
すると、リースは「お茶入れてきますね」と言って、その場を去る。

「それで、じいちゃん、今日は菓が欲しくて寄ったんだ」

「おお、そうか。待っておれ。今、適当に見繕ってくるわ」

「ご老人、俺も一緒に行つていいだろうか？」

「構わぬよ」

そうして、クオルと静也は一緒に何処かに行ってしまった。

「静也の奴どうしたんだろう？」

「気にすることないんじゃないか」

くあくつと欠伸をしながら興味無さげに言うリンを見て、ザベルもまあいいか、とだらつと椅子にもたれ掛かる。

「あの女子は、お主の彼女か何かかね？」

「……そういうものではありませんよ」

クオルが薬を選定しながら訊くのに、静也は至って冷静に返す。
ちなみにザベルの実家では、クオルとリースが薬作りをしているのだ。その薬は良く効くと、村では有名である。

クオルは静也に背を向け、薬を適当な箱に入れていく。

「……………」

そして静也は無言で、一切の気配を断ち切り、刀に手を掛けようとして――

「止めときなさい」

止められた。

この無音にして、無の気配の中、まだ刀にも手を掛けてない状態で、感づかれた。

これには静也も驚いたようだ。

「やはり相当な手練れですね、ご老人。是非ご教授願いたいほどです」

「ほっほっほ、老人を誉めても何も出やせんよ。では行こうか」
「はい」

薬を詰め終えたクオルと静也は、ザベルやリンがいる場所まで、戻ることにした。

「おまたせしました、ってあれ？ おじいちゃんと剣さんは？」

ザベルとリンがいるテーブルに、リースがお茶を持ってやってきた。
た。

だがそこで、クオルと静也がいないことに疑問を持つ。

「ああ、今薬を――」
「ほれ持ってきたぞ」

ザベルが答えようとしたら、クオルと静也が丁度そこに現れた。
そして全員が席に座る。本当は用も済んだので、そのまま帰ってもいいのだが、せっかくお茶を出されたために、少しのんびりしていく。

「それにしてもホントにこの子は可愛いネ。ずっと触ってたいネ」
「ちょ、ちよつとどこ触って……！ いや、そこは……だめ……」

何か女子2人はお互いに遊んでいるようである。
とはいっても、リンにリースが遊ばれてるだけの気がするが。
そんな女子2人は無視し、男3人は会話をする。

「成果はどうじゃ？」

だがクオルはちらちらと女子の方を見ながら、訊いた。

「あんまり芳しくないな。あのコアを解析でも出来れば、何か分かるかもしれないけど……如何せん、あのコアがあるとアイツら復活しちゃうから、破壊するしかないし」

「封印処理も効かんのか？」

「うん。試してみたけど、消えちゃったんだよね」

「そうか……まあ、焦っても仕方なかるう。じっくり探すんじゃない」

クオルは言いながら、お茶を啜る。

「それより、じいちゃん達は襲われてない？」

「大丈夫じゃよ。アレからは静かなもんじゃ」

「ならよかった。……ベルガルドは来てないよな？」

「来とらんよ。あの男も今は攻めてこんじゃろう」

「どうして？」

クオルの確信めいた言葉に、ザベルは疑問符を浮かべる。

「あの男の目的は、強き者じゃ。前回の、仕留めたと思っていたお主が、生きていたのだ。あの男にとって、謂わばその運が強者の証。ならば、お主が熟した時こそが、奴の収穫の時期じゃ。奴はお主を狙っておるぞ。いずれ決着を着ける時が来るじゃろうな」

「……………」

つまりはまだまだ未熟な自分では、相手にもならないという事。だけど……必ず強くなつて、お前を倒してみせる。ロード兄ちゃんを取り返してみせる。

そんな決意の元、ザベルは拳を握り締める。

そんな中、口を出さないようにしていた静也が口を開く。

「そろそろ戻った方がいいんじゃないか？」

その言葉で、ザベルも「そうだね」と言つて、お茶を飲み干す。

リンも満足げな顔で、リースから離れた。

リースは「うう……もうお嫁に行けない……」とか、乱れた服を直しながら、嘆いていた。

そんなこんなで、みんなは航行艦の方に戻つて行つた。

「おゝ、おつかれたったねゝ」

戻つてきたザベル達を労うアルラ。

その後も適当に談笑を交わす。

その時――

『――ッ！』

警報が鳴り響き、全員に衝撃が迸る。

「あ、姐御！ ニアSランク級の奴が現れました！ 今、場所のデータを送ります！」

オペレータの者がそう言い、アルラが確認すると、「すぐに出るよ」と言っ、ザベル、静也、リンを連れて、転送装置の場所までいった。

「アルラさん、ニアSランクって……」

「ああ、新しい奴さね。しかも、いるのは無人世界。挑発するように、その場でアンゲロイ達を飛ばして、じっとしてるみたいだね」

「まあつまりはそれだけ気をつけろってことネ」

「……まあ、それだけ自信があるということか……」

そして4人は、転送装置でその世界に降り立った。

4人はアンゲロイが飛び交うその場所まで来た。

その中心には、あのニアSランクのまるで男のような出で立ちの奴がいた。

ただ背中には、アンゲロイ達とは正反対の白い翼を生やしており、だが共通点として、その瞳の色は深紅に染めあがっていた。

「来たぜ……来たぜ、来たぜ、来たぜー！！ ヒャッハー！！！！」

その男は、いきなりテンションがヒートした。

「何だいアイツは？」

そんな男の様子を地面から、見上げるアルラが、呆れ気味に呟く。
だが男はそんな事には構わず、言葉を続ける。

「オレはなあ “セラフィム” つつうんだ！ よろしく——な！」

男——セラフィムがそういった瞬間、アンゲロイ達、更には後ろからアルヒアンゲロイが現れた。

「みんな！？」

だがそれらはザベルは、素通りしアルラ達のみを狙いだした。

「てめえの相手はオレなんだよ——！」

「く——ッ！」

セラフィムの斧による一閃を、ザベルは杖型のデバイス——バラムンクで受ける。

セラフィムはそのままザベルをアルラ達から、遠ざけた。

くっ……！ 俺1人でやるしかないか……！

ザベルは杖を構え、火の球を20個作り出す。

「ファイアボール！」

その火の魔力弾は、まっすぐにセラフィムに向かい——直撃した。

「へ………？」

それにザベルは間抜けな声を出す。

正直、アレはほとんど威嚇みたいなもので、当たるとは思っていなかったのだ。

「くらわねえなあ！」

「がつ！？」

その呆けたザベルに斧の一撃が襲う。

ザベルはその一撃を喰らい、吹き飛んだ。

「まだだろうがよお！！」

更にセラフィムは追撃に、魔力弾を吹き飛んだザベル目掛けて放つ！

その魔力弾はザベルに当たり、粉塵を舞わせる。

「ああ？」

その粉塵の中から、魔力の高鳴りを感じる。

だがセラフィムは全く動く気が無い。

その魔力の高鳴りは、一筋の赤い砲撃となって、粉塵を押しつけ、セラフィムに向かう。

撃！

直撃し、辺りには再び粉塵が舞う。

この砲撃は、ザベルの純魔力を使った魔力砲撃。なのはのディバインバスターより、少し高いぐらいの威力はある。

まともに受けたならば、無事なはずがない。

だが――

「効かねえなあ」

セラフィムはピンピンしていた。

その事にザベルは驚く。

確かにまともに受けたはずである。

ちゃんと奴の胸にもそれを受けた証に、多少跡が残っている。それでも、全く効いた様子が無い。

どういうことだ……？、とザベルは思案顔になる。

「考えてる暇はねえぜえ！」

セラフィムが斧を振り落とした瞬間、魔力の塊が地面を駆け、ザベルに向かう。

「くそっ！」

ザベルはそれを横に飛んで躲す。

そして、セラフィムを確認しようとして――

いない！？

一瞬目を離れた瞬間に、セラフィムの姿は消えていた。

「後ろだよお！」

「――ッ！」

ズドン！ と振り落とされた一撃。

その一撃は地面を割る。

それだけでも威力が半端ではない事がわかる。
ザベルは――

「はあはあ……くっ……！」

ギリギリで躲していた。

しかし躲しきれなかったのか、肩を押さえて、息を切らしていた。

「なんだあ？ よええなあ！ そんなもんかあ！」

セラフィムはザベルに挑発するように、言い放つ。

まるで、自分に敵う者なんかいないと言う風に。

それにザベルは、フッ、と笑みを浮かべる。

それにセラフィムは、ピクツと反応し、機嫌が悪くなり、ザベルに言い放つ。

「何がおかしいんだよ？」

「おかしいさ」

ザベルはスツと立ち上がり、軽く肩を止血する。
そして続ける。

「何で勝ち誇ってるんだ？ この程度の実力で、舐められちゃ堪らないんだよね」

「ああ……！ 減らず口を――叩くじゃねえか！」

セラフィムは再び斧を叩きつける。

魔力の塊が、地面を突き進む。

「同じ技が喰らうと思ってるのか？」

「な——ッ！」

ソニックムーブにより、いつの間にか後ろに移動したザベルの聲が、セラフィムに届く。

セラフィムは反応できず、ザベルの杖から展開された斧の形をした魔力刃に斬り裂かれ、飛ばされた。

硬い……。

ザベルは自身の腕を見る。それはアイツを斬り裂いた反動か、震えていた。

そして斬り飛ばしたセラフィムが、立ち上がりザベルを愉しげに見る。

「へっ！ 案外やるじゃねえか。おもしれえ！」

立ち上がったセラフィムは、一直線にザベルに突撃する。ザベルはそれに避けるでもなく、真正面からぶつかった。斧と斧が、ぶつかり合う。

「1つ訊きたい。お前もあのアンゲロイ達と同じなのか？」

「あ？ そうだよお！ だからどうしたあ！」

ドンツとセラフィムがザベルを押し出していく。

ザベルは顔を伏せ、重苦しげに声を出す。

「そうか……じゃあお前も造られた存在なんだな……」

「だからどうしたあ！ オレはなあ！ その中でも選ばれた存在なんだよお！」

ザベルはドンドン押し出されていく。
それでもまだ言葉を続ける。

「お前はいいのか？　そうやって、勝手に造られて、それで捨て駒にされて、それで本当にいいのか？」

「うるせえ野郎だなあ！　戦いの最中にそんなくだらねえこと気にしてんじゃねえぞお！」

セラフィムの力が増し、ザベルを突き飛ばす。

ザベルは地面を挟りながら、ズズズと下がっていく。

そして止まる——かと思われたが、更にセラフィムがその斧を振り下ろし、襲いかかる。

それをザベルはシールドを張って、受け止める。

「さっきの威勢はどうしたあ！　オレにダメージが喰らわせられなえから、ブルツちまったかあ！」

「……お前の体は、恐らくバリアジャケットみたいに魔力で、鎧を作ってるだけだろ。まあ、その防御力はバリアジャケットの比じゃないみたいけど」

「てめっ——ッ！」

凶星を突かれて、思わずセラフィムはザベルから離れる。

ザベルはゆらりと構える。

その雰囲気、セラフィムは攻めあぐねる。

さっきと雰囲気が違う。

「俺も死ぬわけにはいかない。やってくるなら、全力で倒す。でもお前には意思がある。なるべくなら、奴らについて話を聞きたい」

「は、はっ！　バカかてめえは！　教えるわけねえだろ！　大体なあ、オレ達は元々命を握られてるから、捕らわれた時点で、コアな

んざ関係なく光になんだよお！」

「……！」

ザベルはその言葉に、拳を握りしめる。

この組織は、どれだけ命を弄べば気が済むんだよ……！
怒りに拳を振るわせる。

だが、そんなザベルに出来ることは1つしかない。

「わかった……」

「——ッ！」

殺すこと。自分が殺されないためには、相手を殺すしかない。
矛盾なのはわかっている。

ザベルはこの組織を調べたことを、自分から志願した。

つまりは、殺されに行きながら、殺されないため、という妙な矛盾がある。

だが、それでも、ザベルの仲間である光輝が、奴らに確実に狙われている。

何もわからないまま、仲間が殺されるかもしれないのに、じつと
なんかしてられなかった。

だから、こうして、ザベルは決意して、苦しくてもこの道を進んでいる。

ザベルの身体からは、溢れんばかりの魔力が現出する。

「俺の全力で消してやる」

「……へへへ、やる気になったじゃねえかあ。面白くなってきたあ
！」

ドンッとお互い地面を蹴り、相手に突撃する。いや、したかに見えた。

激！

ザベルはセラフィムの目の前には居らず、いたのは上。
上からの斧による振り落しで、セラフィムを地面に叩き落とす。
そこから宙に滞空。

撃！

ザベルは地面に倒れ伏すセラフィムに、一瞬で炎を纏った魔力弾
を30個生成すると、全弾セラフィムにぶつける。
まだ止まらない。

ザベルは地面に向かって、デバイスを投げる。
デバイスは地面に突き刺さった。

「イラプション！」

その瞬間、セラフィムがいるであろう地面が盛り上がり――爆発！
その爆発で、セラフィムの体が浮く。
そこに――

「はぁ！」

全力で殴りかかった。
無抵抗で殴られたセラフィムは、吹き飛び地面を撥ねながら、飛
んでいく。
ザベルは更に、デバイスを拾うと、その杖の先端に魔力を溜めて
いく。

その杖の先には、環状魔方陣が浮かび、凄まじい魔力量となる。

「燃えろ！ インフェルノ……！」

照準を倒れ伏すセラフィムに合わせる。

ごめん……。

「ブラスタラー……！」

火炎を纏う大砲撃は、セラフィムを呆気なく呑み込んだ。

「……………」

ザベルは冷静に、放ったときに出了た煙を見つめる。

まだ終わってない……。

そう感じた。

あの大砲撃だ。普通なら終わっているだろう。

なんといっても、あの砲撃はAAAランク級の威力は確実にあるのだから。

だがそれでもザベルは、油断せずに構え続ける。

そして――

「ヒャーハー……！」

上から襲った斧の一撃を、ザベルは受け止めた。

「残念だったなあ！ オレもアンゲロイ共と同じように、コアを潰さねえとすぐ回復するんだよお！ だがなあ、この装甲に場所もわ

からんじやお手上げだろうがぁ！ ヒヤッハー！！」

セラフイムは言いたいことを言うと、ザベルを弾き飛ばす。
ザベルは体勢を整え、油断なく構える。

「いいねえ、まだやる気だ。愉しませてくれやぁ」

「もう終わりだよ」

「あ？」

セラフイムは斧を肩で担ぎ、ザベルの言葉に疑問符を浮かべる。
何言ってんだコイツは？、と。

「アイツが言ってたよ。『どんな生物にも、それが生物で、意思があるならば、恐怖心がある。だったら、弱点を突かれそうになったら、どういう行動を取るだろうな』って。答えは簡単だ。避けるさ」
「何が言いてえ……！」

「お前、さっきの砲撃のとき、咄嗟にある場所を守ろうとしたな？」
「——ッ！」

その事実セラフイムが、体を硬直させる。

業火……！

「が……あっ……」

一閃！

ザベルは身を固まらせた瞬間を見逃さず、一瞬にして、距離を詰めると、展開させた炎の魔力刃で、右目を斬り裂いた。

「ちく……しょう……！」

「良い隠し場所だったよ。目の紅と同化し、かつ、その硬い体を逆手にとつて、無意識の内にその体にコアがあると、思わせる。全然気づかなかった。でも最後に檻褸が出たな」

「ちくしょおおおお！！」

その瞬間、セラフイムには炎が燃え上がり、そのままその体を光へと変えた。

「終わったみたいだね」

そこにアルラが現れて、ザベルを労うように、手を肩に置く。どうやら、アルラ達の方は、もうあらかた片付いてたらしい。後は残り香程度である。

ザベルはそんな風に労うアルラに、少し寂しげに微笑み、「はい」と言った。

そうして、4人は航行艦に戻った。
相手はあと少しでやって来る。
そんな予兆を感じながら。

何処だろうか。

そこは広い空間で、何本もの柱が立ち並ぶ。
その場所の数歩の階段の上には、玉座のようなものがあり、そこには人が座っている。

その人は、眼鏡を掛けており、その瞳が見えない。服装は、紅い衣を纏い、ゆつたりとした服装である。その頭には、紅い烏帽子のようなものを被っていた。

そんな男の前に、1人の男が膝を着き、頭こぶしを垂れていた。

「報告します。先程、セラフィムはザベルⅡグライムにより、撃墜されました」

「そうかい」

頭を垂れている水色髪の男は、紅い衣の男にそう言う。

紅い衣の男は、微笑を崩さずに、それに答える。

「それにより、データは取れたために、すぐにでも量産は可能との事」

「それはよかった」

それで報告は終わりだ。

だが水色髪の男は、まだその場を立ち去らなかった。

「どうかしたかい？」

紅い衣の男は、優しく水色髪の男に問い掛ける。

「質問がございます」

「話してみなさい」

「はっ」

水色髪の男は返事をして、顔を上げる。

「何故、王は紅鬼アカウではなく、ザベルⅡグライムにセラフィムを仕向

けたのでしょうか？ 確かにザベル・グライムも怨敵の家系。しかし、優先して殺すべきは、やはりあの紅鬼。更に、これまで、泳がせてきました。真意をお聞かせ願いたい」

「何も難しいことじゃないよ。ただなんとなくさ」

「王！ どうか！ どうかわたくしめに王の真意をお聞かせ願いたい。紅鬼は殺さねばなりません！ なんに何故、これまで生き長らせてきたのですか！」

「辰星、まだその時じゃないんだよ」

辰星と呼ばれた水色髪の男の必死の懇願も、王と呼ばれた紅い衣の男には届かなかったようだ。

更に王は続ける。

「セラフィムは造ったまま待機。他の“ケルビム”、“スローンズ”の製作に取り掛かってね」

「……はっ……」

王の言葉に、それ以上の追及は無駄と感じ、辰星はその場を去っていく。

「そう……まだその時じゃないんだよ……」

1人になった王のにやっとした口から、そんな言葉が漏れた。

第2話 『現れる敵、深まる陰謀 3』

【7月17日】

その日、獅童蓮弥はテストとかいう名前の下らないものをやって、精神的に疲れた。

そのためまっすぐ家に帰り、一眠りしようと思った。

明日もテストがあるが、はやて達の誘いを全力で退けて、今は――

「で？ 誰だデメエら」

裏路地の人がないような場所で、数人の男たちに囲まれていた。その男たちは、手にナイフやらバットやら、何だか物騒なもんを持っている。

こうなったのも、帰っている途中で、明らかに誰かにつけられると感じ、面倒だが家まで来られても困るので、人目のないところまで来たところ、こうしてぞろぞろと現れてきた。

「へへへ……一緒に来てもらうぜ……」

蓮弥の問いに答えたのは、何だか目がイッてる奴で、ナイフを一舐めしている。

気持ち悪……、と思ったのも束の間――

「ヒヤア！」

そいつが急にナイフで、刺そうとして来た。
流石にその程度に当たるわけにもいかない蓮弥は、スッと横に避ける。

だが、そいつを皮切りに、他の奴等も一斉に襲いかかってきた。

ちっ……。

心の中で、舌打ちをして、奴らに対応する。

まずはバットを振り回してきた奴。

バットを振り回した瞬間、膝で腹を蹴り飛ばす。

次にナイフを突き刺してきた奴。

そいつのナイフを持った方の手首を持ち、そのまま背負い投げに移行し、投げ飛ばす。

次に来た男は、体を半身にして避け、その顔を手のひらで覆い、壁に叩き付けた。

次は——次は——

そう対応していき——

「はあはあ……」

やっと片付いた。

蓮弥は肩で息をする。

まあ、数10人はいたのだ。

それは疲れるだろう。

パチパチパチ。

「……！」

そこで拍手する音がして、そちらを向く。
そこにいたのは、白と紫が混じった髪で、その目はどこか狂気のようなものを孕んでいる男だった。

「お前は……？」

「オレっちはあ、ドラッグビリーバー“麻薬信者”つつうんだあわあ。そいつらあはあ、オレの部下あなんだあがなあ……まああ別にただのゴミだあかあらいんだあけどよ」

正直、なんだこいつ、と思う蓮弥。

まず、話し方から気持ち悪い。

なんなんだ？ 俺はこんな奴らの反感買うようなことしちゃいねえぞ。

「そついうわあけで、おまあえ連れてくぜ」

「——ッ！」

どういうわけかよくわからないが、その“麻薬信者”と名乗った男は、急に近づいたかと思いきや、思い切り首めがけて、手刀をかわしてきた。

蓮弥はそれをギリギリで、屈んで避ける。

その一撃は、空を切りそのまま、壁にぶつかり——

斬——！！

斬り裂いた。

はいい？

と疑問を浮かべたのもつかの間、もう一方の腕で更に斬り裂いてきた。

それをバックステップで躲す。

すると、麻薬信者——ドラッグは止まる。

そして不思議そうに蓮弥を見る。

「おまあえなあんでしなあねえの？」

「あ？ そんな簡単に死ねるかよ。てか、お前、俺を連れてくとか言いながら、完全に殺す気じゃねえか」

「ん？ ああそうだなあ、別におまあえらあの生死なあんかあどっちでもいいんだあよ」

「お前ら？」

その複数の部分に疑問を持つ。

嫌な予感がする。

そしてそれは当たる。

「ああのさあん人娘にも、ああいつらあ、はあなあつといたあかあらあなあ。まああオレっちはあ殺したあいだあけだあし、おまあえなあああ殺し——」

「デメエ——！」

ドラッグがすべてを言い切る前に、全力でぶん殴る。

その一撃はドラッグを吹き飛ばし、地面に転ばせる。

蓮弥はそんなドラッグを無視し、裏路地を飛び出し、急いで、はやて達の元へ向かった。

ドラッグは蓮弥が行った後、ムクツと立ち上がる。
大して効いた様子はない。適当に首をコキコキ鳴らすと、にた
と笑い、蓮弥の後をゆつくりと追った。

「なんなんやこいつら……」

こちらも状況は、ほとんど同じだった。
蓮弥と別れた後、仕方ないので3人で、明日のテストの勉強をす
るために、翠屋に向かっていた。

だがその途中、勘の鋭いフェイトが、誰かがつけてきていること
に気づく。

このまま、翠屋に行けば、店に迷惑がかかるかもしれない。それ
は避けたい。

そのため、なるべく人目のつかないところに行き、終わらせよう
と思った。

そして、そう思ったのは、理由がある。

相手は魔法使いだと思っていたのだ。

自惚れとかではなく、正直なところ私たちは、有名人だ。

なので、出身世界も結構バレている可能性が高い。

時々だが、命を狙われることもある。

言ってしまうえば、名声やらが欲しいのだろう。

所詮は小娘と高を括った奴等が、やってくるのだ。そんな奴等は、
結局返り討ちに会っただが。

今回もそれだと思った。

しかし違った。

相手は完全な一般人。その手には、ナイフやらバットを所持しているが。

若干目が異常なまでに、血走ってたりしたが、歴とした一般人。流石に一般人相手に、魔法を使うわけにも見せるわけにもいかず、訓練校での訓練を思い出しながら、なんとか耐えているのだが、それも時間の問題だろう。

今もこうして大分追い詰められている。

逃げ回ってはいても、そこは行き止まりで、もう逃げ場はなかった。

はやて！ 何処だ！

蓮弥……！

そこに蓮弥からの念話が届く。

い、今、変な奴等に囲まれてもって……

やっぱりか……！ くそっ！ いいから、もう魔法で逃げろ！

でも相手は一般人なんやで！

そんなこと言ってる場合か！

あの真面目っ娘どもは……！ と独り憤慨しながら、はやて達を探す。

はやて達は、その間も何とか相手の攻撃を防いでいた。

だが魔法が使えなければ、所詮は女の子である。

これほどの数の男に、そう何分も持つまい。

どうすれば……！？、と焦る蓮弥。

そこに――

ここだ蓮弥。位置情報はお前のデバイスに送る
アイさん！？

突如アインスからの念話が届いた。

恐らく主のピンチに、反応したのだろう。

アインスは階級はあるが、管理局で働いているというより、はやてのお付きの者なのだ。

そのため大体は家で留守番をしている。

とにかく蓮弥は、その位置情報を元に、はやて達の元へ急いだ。

「結界……？」

なのはが呟いた。

どうやら結界が張られたようで、辺りに色がなくなる。

「アイが張ったみたいや！とにかく、アイと蓮弥が来るまで耐えるで！」

「う——ッ！ はやて！」

「——ッ！」

フェイトの切羽詰まった声が響く。

はやての後ろから、ナイフを持った男が、振りかぶっていた。気づいたのははやてだが——遅い。

凶刃が振り落とされ、はやては思わず目を瞑る。

「……？」

しかし衝撃は一向に來ない。不思議に思い、はやてが目を開けると――

「アイ……？」

「だ、大丈夫でしょうか、主はやて？」

相当急いできたのだろう。

息を切らして、辛そうにしている。

アインスはナイフを持った男を、殴り飛ばし昏倒させた。

「アイ！？ その傷……！」

「掠り傷です。主はやてが傷つかなくて、本当によかった……」

アインスは、泣きそうな主はやてを慈しむように見遣り、安心してように呟いた。

「全員、私の傍によってくれ」

アインスの言葉で、全員が傍による。

アインスは全員を包み込むように、プロテクションを張り巡らせた。

「アイさん、魔法は……！」

なのはがアイが魔法を使った事に対して、注意しようとし――

「私は主はやてが、護ればそれでいい」

そう言い返された。

アインスは、守護騎士達とほとんど同じ感情を共有している。

そのため主を護るためならば、そんな一般人に魔法など気にしない。

だがそんな一般人達は、それを見ても顔色1つ変えずに、プロテクションにナイフやらバットやらを、叩き付けてくる。

叩きつけられる毎に、段々とアインスの顔が苦痛に歪む。流石に長い時間展開するのは辛いみたいだ。

それにはやて達も魔法を使おうとして――

「大丈夫です」

アインスが制する。

「主たちが使えば、上から何か言われるかもしれませんが」

先刻も話した通り、はやて達は有名人だ。

一般人に魔法を使うのは、管理局の法律違反である。

そうすれば、有名人の3人は何を言われるかわからない。

そのため、アインスは1人で耐えることにした。

「でもこのままじゃ……！」

なのはが今のままじゃ現状が変わらない、といった風な声で言う。それにアインスが、フツと笑う。

「大丈夫だ。アイツが来る」

「えっ？」

アインスの自信たっぷりな声に、なのはが間抜けな声を出す。その時――

「おおおらああああ!!」

ドオン! と何かが叫びながら、降ってきた。

それはアインス達の周りにいた男どもは、全員吹き飛んだ。

「獅童蓮弥! 只今推算!!」

「漢字がちゃうわ!」

「しまった!？」

カッコつけて降ってきた蓮弥だったが、はやてにツッコまれ己の失態に気づき、カッコ悪……、と嘆いた。

「嘆いとる場合か!」

「そうでした!」

はやてに言われ、シャキッと復活し、デバイスを構える。

「——って、蓮弥君、一般人に魔法は……!」

「言ってる場合か! 殺されかけてんだぞ! アインスは、なのは達を護っててくれ!」

蓮弥はそう言って、駆け出すと奴等と対峙する。

魔法、更には氣を使い、魔氣力を生み出し、相手を昏倒させていく。

まあ、流石にものの数分で片が着いた。

「終わりか?」

それにアインスが少し警戒を解いて訊く。

「まだだ」

しかし、蓮弥は終わっていないと言う。
だが、もう全員倒したはずで、誰もいないはず。

「いやあ、全員たぁおしちまぁいやあがぁあったぁなぁ」

どうやら、まだのようだ。

相手はラスボスのようである。

紫と白が混じった髪の子——ドラッグヒリーパー麻薬信者。通称ドラッグ。

その男に、はやて達は気持ち悪さを感じたようだ。
若干引き気味である。

「よお、何だっけ？ ドラッグヒリーパー 麻薬信者とか言ってたっけか？ 舐めた真似し
てくれんじゃねえか」

「オレっちはあ、おまぁえなぁんかぁなぁめてねえぞ」

「そっちじゃねえ！ 俺だつてなめられてたまるか！」

ドラッグの言動が、一々蓮弥をイライラさせる。

ふざけてるのか本気なのかもわからない。

だが——

強い……。

それはわかる。

さつきも少し手合いをしたし、光輝にも相手のレベルは、すぐに
自分と天秤に掛けると言われている。

ソイツが持つ何の要素でもいい、それと自分を天秤に掛けて、相
手のレベルを測れと。

それで、さっきの手合わせを思い出す。

あの一瞬にして間合いを詰める速さ、全力で殴ったにも関わらず、対して喰らった様子がないところ、何よりあの手刀。

ホントに人間か？ とさえ思う。

少なくとも、一般人の域を出ている。

そんな奴に——手加減は不要！

「はあ！」

蓮弥は自身の籠手型デバイス——ミストラルで殴りかかる。その一撃には、魔氣力を込めていた。

撃！

見事にヒットし、ドラッグが飛ばされて、地面を跳ねる。

「蓮弥君！？ それはやり過ぎ！」

なのはが驚く。いや、他の皆も顔は、大分驚愕に彩られている。何といっても、蓮弥は本気で殴ったのだ。

魔法を使えない一般人を。

そんなことをしたら、相手がどうなるか分からない蓮弥ではない。なのに何故！？

『——ッ！』

しかし、その問題はすぐに払拭された。

何故なら、ドラッグは立ち上がったからだ。

しかも、対して喰らってないのか、適当に首を回して、にたぐつとした顔を浮かべる。

それに、はやて達は背筋に寒気が走った。

「やっぱり効いてねえな」

蓮弥は吐き捨てるように言う。

なんとなくわかってたことだが、現実として見ると、酷く気持ち悪い。

生身でこれを受けて、立っていられるという、その事実。

「ひゃひひ、おまあいいなあ、いいぜ、まあじで潰すわあ」

外見上何かが変わったようには見えないが、何か雰囲気が変わったように感じる。

そして蓮弥には、それがわかる。

“同じ”ものを使うからだ。

それは――

「氣術……」

「ご名答」

その瞬間、ドラッグが蓮弥に向かって、駆けだす。

同様に蓮弥も駆ける。

そして、拳と手刀がぶつかり合い、拮抗――はしないで、ドラッグが吹き飛ばされる。

それもそうだ。

蓮弥が使っているのは、魔法も組み合わさった魔氣力。

対するドラッグは、どうやら氣術は覚えたてのようで、そこまで使いこなせていない様子。

それなら、勝つのはどちらか火を見るに明らか。

しかし――

「いいね。さあいこうだあ」

何ともないかのように立ち上がる。

なんなんだこいつは……、と嫌悪感が、全身を支配する気持ちになる。

正直なところ怖い……、この得体の知れない感じ。たまらなく逃げ出したくなる。

だが、逃げ出すわけにはいかない。

ドラッグが蓮弥に駆ける！

蓮弥も同時に飛びだす。

今度はドラッグは、蓮弥の拳とのぶつけ合いはせず、避けながら、時々手刀をかましてきた。

蓮弥もその一撃を避けると、拳を振り上げるが、ドラッグはぐにやぐにやと動き躲す。

蓮弥はそれに舌打ちして、とにかく早く仕留めたい。その一心で

わざと隙を作る。

そこにドラッグの大振り of 攻撃が来た。

蓮弥はそれをギリギリで避ける。頬に掠めたのか、少し血が飛ぶ。だが、そんなものは気にしない。

一気に肉薄すると――

「波動掌・衝破！！」

拳をその身体に打ち込んだ。

その一撃の衝撃は、ドラッグの身体の内側にダメージを与え、外へと突き抜けた。

まるで、弾丸のような一撃だ。

その一撃にドラッグは仰け反り、そのまま倒れる——そう思った。

「ひゃひー！」

しかし、そうはならず、急に態勢がグンツと元に戻り——

しまっ——！

蓮弥の身体を斜めに斬り裂いた。

「蓮弥！！！」

はやての悲痛な叫びが響きながら、蓮弥は地面に倒れた。

その光景に、はやて達が呆然とする。

信じられないのだ。友人が目の前で、倒れているという事象が。

「ひゃひ」

そんな状態のはやて達に、ドラッグが近付こうとする。

それに一足早くその状態から脱したアインスが、身構える。

「オイ……」

その時、ドラッグの後ろから、声がして肩を掴まれる。

「はやて達に近付こうとしてんじゃねえ！！！」

その声の男は、そのまま後ろへと投げ飛ばし、ドラッグをはやて達から遠ざけた。

その声の男は、蓮弥だった。

斬り裂かれた部分から流れ出る血を片手で押さえている。

だが、そんなことで止まるはずもなく、ドンドン血は流れていく。

「蓮弥君！ もういいよ！ アイさんと一緒に逃げて！ 後は私たちが！」

その様子に我を取り戻した、なのはが、慌てて言って前に出ようとする。

正直、このままでは蓮弥は死んでしまふと感じたのだろう。

俺様を出せ。

蓮弥の頭に響く声。

それに蓮弥は、ちっ、と舌打ちをして――

「は……やて！ 全員飛んで逃げろ！ 俺はこいつは倒してから、逃げる！」

「な、なに言つて……！」

「なのはちゃん……行くで……」

「は、はやてちゃん！？ どうして!？」

「どうしてもや、とにかく全員逃げるんや！」

はやての真剣な眼差しに、誰も何も言えなくなった。
それだけ、はやての言動には鬼気迫るものがあった。

「ありが……とよ。はやて……」

「……絶対帰ってくるんやで」

「任せとけ」

そう会話を交わし、全員その場を飛んで逃げた。
蓮弥はそれを確認する。

俺様を出せつつつてんだよ。腰抜け。

また響く声。

「なあんだあ、逃げちまあったあぜ。まああおまあえ潰してかあらあゆつくりさあがあすかあ」

ドラッグは起き上がり、その場を見てそう言った。
とにかく、蓮弥を殺したいらしい。

蓮弥はそれに勝ち誇ったように、フツ、と笑う。
それが癪に障ったようで、少しドラッグの顔が歪む。

「アイツが出てきたら……容赦はないぜ……お前がやられることになる……」

「やあってみろよ。その傷でまともに動けるなあなあ」

ドラッグが駆けだし、一瞬にして、蓮弥との距離を縮める。
そして、その手刀が振り落とされる。

その一撃は、蓮弥の身体を斬り裂き、確実に仕留めるはずだった。
しかし――

「はは！」

それは“二刀の短剣”に止められていた。

更におかしいことがある。

明らかに雰囲気が違う。

それは容姿からもう違うのだ。

その髪は短くなり、オールバックになっており、三白眼のような眼になっている。

「おらぁ！！」

ソイツはドラッグの一撃を撥ね退ける。

その一撃は、明らかに身体に大きな傷を負っている者の力ではない。

バリアジャケットは血に染まってはいるが、恐らくその服の下は無傷だろう。

「おまぁえなぁにもの？」

流石にその異変に気付いたのか、ドラッグがそう尋ねる。

「ああ？ 狂真様だよ、クソ虫が！」

狂真と名乗った男は、一気に駆けだす。

先程とは段違いのスピード。

そのスピードにドラッグは、知覚できない。

そのスピードは、魔力変換資質である“風”を使った移動である。風が狂真の身体をアシストすることで、そのスピードを上げている。

狂真は一瞬にして、ドラッグの後ろに移動。

そして、腰に差した短剣に手を添える。

―八神流二刀術―

「死ねや！」

―芹麗斬・双嵐！―

引き抜かれた短剣は、ドラッグを容赦なく斬り裂き、その瞬間、風が渦巻き、それは嵐となって、ドラッグの身体を斬り刻んだ。

狂真は終わったか……、と歩き去ろうとして――

「ひゃひひ」

瞬時に身構える。

ドラッグは生きていて、尚且つ立ち上がった。

なんというタフさだろうか。

普通あそこまで直撃したら、動けるはずがない。

「そうかあ、おまあえ覚醒遺伝者あかあ。ひゃひひ、通りで強い思ったあ。オレっちはあここで終わありだあけどよ、おまあえもきつと来ることに、なあるだあろうよ。裏になあ。ひゃひひ、ひゃひひ、ひゃーひつくふっ！」

だがやはり限界だったようで、そんな言葉を言い残し、ドラッグビリーバー麻薬信者は血を吐いて倒れた。

なんだってんだあ？

狂真はそんな言葉に、疑問符を浮かべるが、すぐに面倒くさくなつたのか、考えるのを止めた。

よお、甘ちゃん、気分はどうだ？

最悪だよ……。

あんな雑魚一匹倒せねえなんてなあ。ホントカスいぜおめえは。

うるせえ。それより、本当に殺したんじゃないだろうな？

ああ？ さあな？ 少しは手加減してやったから、生きてんじやねえか？

お前な……。

おつと出迎えだぜ。

意識が蓮弥のものに戻ってゆく。
髪は長髪になり、元の女のような中性的な顔に戻る。
そして怪我也戻ってきた。

「ぐっ……！」

「蓮弥！」

蓮弥は、はやての呼ぶ声を聞きながら、その意識を手放した。

「……………」

蓮弥が次に目を覚ましたのは、ベッドの上だった。
だが家ではない。

なんとなく病院特有の臭いがしたので、恐らく病院の方に運ばれたか、本局の医務室に運ばれたかのどちらかだろう。

多分後者だな……、そんなことを思いながら、身体を起こす。周りには誰もいなかった。それを少し寂しいと思う自分がいた。

《マスター、大丈夫ですか？》

「ミストラル、ああ、平気だ」

そこに近くに置いてあったデバイス——ミストラルが心配の言葉を蓮弥にかける。

ミストラルは女性型のAIなのだが、他のAIと比べ、多少過保護なところがあるようで、よくマスターの心配をする。

「他のみんなはどうしたんだ？」

《先程までいたのですが、シャル医師が“大した怪我ではないし、蓮弥君の目が覚めたら、連絡するので、この場は帰ってください”と言って、帰らせました》

「そのシャル医師は？」

《ついさっき他の医師に呼ばれて、何処かに行きました》
「そうか」

蓮弥はそう言うと、徐に立ち上がり、ストレッチを始めた。なんとなく、身体を動かしたくなったらしい。

《マスター、病み上がりなのですから、あまり動き回らない方が》
「まあまあ、気にするな。ちょっと自分の身体に違和感がないか、確かめるだけだ」

《ですが……》

「大丈夫だって。そんなに激しく動く気はないし」

《はい……》

ミストラルは渋々了承した。

しかし、その後、シャルがやってきて、身体を動かしてる蓮弥を見て、無言で頭を叩いてから、ベッドの上に強制連行した。

その時の蓮弥はこう語る。

素敵な笑顔は、時に鬼をも黙らせる武器になる。

と。

そうして終わったかに見えた戦い。

しかし、それは序章にしか過ぎず、若者達是否応なしに、巻き込まれていく。

運命の齒車は廻り出した。

ここには、パソコンやらモニターやらが、沢山ある。

広い空間だ。

そんな空間の外堀を埋めているのが、モニターなのである。

何個ものモニタに、様々な情報や映像が流れている。

そこに2人の男女がいた。

男の方は、子供のような容姿をしていて、短い金髪である。

女の方は、優しいお姉さんのような雰囲気を持っており、長い茶髪をしている。

男は女に膝枕をされて、目を見つめあっていた。

「エクス、何故あんなお触れを出されたのですか？」

女がそう尋ねた。

男——エクスは手を伸ばし、その女の髪を撫でて言う。

「僕の意思じゃないよ。これは“アーカイバ倉庫”の意思さ。僕はそれを言葉にしたに過ぎないよ」

「しかし、せつかくの催しを邪魔でもされれば……」

不安そうな女の声が、エクスの耳に届く。

しかし、エクスは気にした風もなく、女の髪を撫でていた手を顔の方へ持っていく。

「あみは亜美葉、催しには、余興が必要だとは思わないかい？」

「エクス？」

女——亜美葉はエクスの目を見て、エクスが一体何を考えているのか、全く読めなかった。

エクスの瞳は、確かに亜美葉の方を向いてはいるが、その目線には入っていないような。

何か奇妙な感覚が起こる。

その間も、エクスの手が亜美葉の顔をなぞる。

「ねえ亜美葉、僕はね、怖いんだ。自分が本当にここに在るのか」

エクスの人差し指が、亜美葉の瞳のすぐ傍にある。

亜美葉の鼓動が早くなる。

目の前の少年の雰囲気、呑み込まれそうになる。

「いつそのこと、死んでしまおうかと思えるほどに」
「エクス！」

エクスの人差し指が、亜美葉の瞳に吸い込まれる直前で、亜美葉が叫び、エクスの指が止まる。

エクスはそれにクスツ、と笑う。

「冗談だよ」

エクスの手が地に落ちる。

それに亜美葉は、ほっと胸を撫で下ろした。

この少年は、時々こうなる。

どこか狂気めいた雰囲気を醸し出し、すべてを呑み込まんとするような、威圧感。

それが酷く恐い。

「まあ楽しもうよ。祭りの前の余興をね」
「はい……エクス」

そうしてエクスは眠りについていたのだった。

第3話 『拐われし姫君』

【7月20日】

やっとテストが終わり、今日は終業式だ。

ん？ 終業式だっけか？ まあいい。

とにかく、夏休みに怪我をするなよみたいな校長の話がある儀式だ。

今はどうして学校に向かっている。

蓮弥が歩きながら、考えるのは3日前のことだ。

あの事については、光輝達には言っていない。

余計な心配をかけたくはなかったためだ。

どうやら、奴の言動によると、はやて、なのは、フェイトは確実に狙われてると思って良さそうだ。

だが、蓮弥の場合はどちらでもいいといった感じだった。

ちなみに今は、シグナム達には事情は話しており、アインスやザフィーラといった比較的管理局で、仕事をしない2人が、警備を行っている。

とりあえず、気になるのは奴の言葉である。

覚醒遺伝者。裏。

この2つのワードが気にかかる。

覚醒遺伝者なんて言われたことはねえし、裏なんか知りもしねえ。

だが、蓮弥にこの2つのワードは聞いたことがなかった。

もしかしたら、師匠なら知っているかもしれない……、その考えが、蓮弥の脳裏を過る。

しかし、すぐに首を振る。

いや、師匠に迷惑をかけるわけにはいかない。

そうして、学校へと行くのだが、なんだか周りが騒がしくなってきた。

なんだ？　と思い、蓮弥はどこかに向かう野次馬根性共の会話に聞き耳を立てる。

—なんかでけえ屋敷が、朝になったらボロボロになって、発見されたらしいぜ—

—住んでた人も全員死んでるんじゃないかってよ—

その会話を聞いた。

この辺で、デカい屋敷って……まさか……風鳥院家！？

そう見当を付けると、蓮弥はいつの間にか駆けだしていた。

「なんだよこれ……」

蓮弥は呆然とした。

その惨状に。

昨日まで立派な屋敷が立っていた。

だが今はどうだ？ 屋敷は所々崩れ落ち、もう見る影もない。

蓮弥は人垣を掻き分け、更に近寄り――

「美咲さん！」

叫んで、警察が張った線を越えようとした。

「コラ君！」

だが捕まった。

「離せ！ 美咲さん！ いるんでしょ！ あなたほどの人が負けるわけない！」

「くっ……なんて力だ……！ オイ！ 手伝ってくれ！」

警察は応援を呼び、蓮弥を無理矢理取り押さえる。

蓮弥は信じられなかった。

美咲の実力は知っている。

手合わせをしたこともある。

師匠も自分より強いと言っていたほどだ。

そんな人が……死んだなんて……。

そつだ……秋平さん……！

蓮弥はそれを思い出すと、気合いで警察を撥ね飛ばし、再び人垣を掻き分けて戻った。

警察達は何だったんだ？、と呟きながら、仕事に戻った。

「秋平さん！ 秋平さん！」

おかしい……！

蓮弥は急いで、箕の家まで来た。箕の家は、風鳥院家とは家が近くすぐそこだった。

風鳥院家よりは、大きくはないが、道場がある分、普通の家の敷地よりは、大きかった。

しかし、その家には、人のいる気配がなかった。

だが、家には何の損傷も見受けられない。

蓮弥は嫌な予感がし、悪いとは思ったが、無断で箕の家に入り込んだ。

だがその家には、誰もいなかった。

もしかしたら、全員出払っているだけかもしれない。

だが何か違う。これは……ここにはもう誰も帰ってこない。

わかってしまった。

この感じは、もう誰も帰ってこない……何があつたっていうんだ……。

蓮弥はその事実にも然然自失としながら、足は学園へと向かってい

た。

蓮弥はふらふらした足取りで、学園に着くと、教室を目指した。ガラツとドアを開ける。

しかし、そこには誰もいなかった。

恐らく全員、終業式にでも行っているのだろう。

蓮弥は自らの席に座る。

それから少しして、廊下がガヤガヤしてきた。皆が戻ってきたのだろう。

だが蓮弥は身動き少しせず、ただただ椅子に座る。そこに、はやて達5人組が現れる。

「蓮弥！ また遅れ…… どうかしたんか？」

はやてが例のごとく説教しようとしたのだが、蓮弥の態度がおかしいことに気づく。

他の4人もそれに気づき、蓮弥に近寄る。すると、蓮弥は急に立ち上がると――

「へっ？」

はやてに抱き着いた。

はやてはあまりの出来事に間拔けな声を上げ、女の子たちは黄色い声を出し、男からはどす黒い怨嗟が響いた。

だが、蓮弥が震えているのに気づき、はやては何かあったんだと直感で察し、みんなにあまり人がいない場所へとジェスチャーした。なのは達も、はやての様子に何か感ずいたか、蓮弥を連れて教室を出ていくはやてに、ついて行った。

そしてついたのは、学園の屋上。

今いるのは、はやて、なのは、フェイト、すずか、アリサである。

「蓮弥、何があつたんや？」

蓮弥は、すではやてから離れており、フェンスに指を絡めて、握りしめている。

「みんな……落ち着いて聞いてくれ。風鳥院家と笥家が、何者かに滅ぼされた」

その蓮弥の言葉に、皆が沈黙し、理解したくないというように、え？、と訊いた。

「事実なんだ」

「ど、どういふことなんやそれ!!」

「俺だつて知るかよ!!」

『!!』

蓮弥の大声に皆が、ビクツと体を震わせた。

「……ごめん」

蓮弥は思わず声を荒げたのを謝る。

その顔はどこまでも辛そうに歪んだ。

「今日の朝だよ。風鳥院家はボロボロの壊滅状態。笥家はもう家には、誰も帰ってこないと思う」

蓮弥は話しながら、フェンスがちぎれるんじゃないかというほど、

握りしめる。

「そんな……」

はやてが愕然として呟く。

他の皆も声が出ないほどに、驚きや絶望が入り交じったような顔をしている。

「ちくしょう……何が起こつてんだよ一体……！」

前回の襲撃に加え、今回の事件。

何かが自分達の周りで起こっている。

だが、それが何もわからない。

ただただ事実のみが、心の中を占めていく。

風鳥院家が滅び、笈家が消えた。その事実。

「……生きてる」

なのはが呟いた。

それに全員が、なのはの方を向く。

なのはは、手を組み祈るようなポーズを取っていた。

「きつと……死ぬわけないよ……絶対……」

そう言うなのはの手は震えていた。

なのはも怖いのだ。

だけど、そう信じた。

美咲と秋平は、生きてると。

そのなのはの言葉に、皆もそうだ、と思い直し、少し元気が出てきた。

ただ蓮弥だけは、まだ辛そうだったが。

「……これは……兄さんに伝えた方がエエよな……」

「うん……ザベルにも」

はやてとフェイトがそう言って、通信……は正直今は話せる気がしなかったので、蓮弥にある程度のことを教えてもらい、纏めたものをメールとして送った。

「ん？ メール？」

艦船アースラに用意された部屋でくつろいでいた光輝は、突然のメールに少し驚きながらも、改造携帯電話を手取る。

「おお！ まいびゅーていふるぷりていどうーたーのはやてじゃな
いかあ！」

《坊ちゃん……》

その相手を見た光輝の発言に、ファルシオンが呆れたように呟いた。

もう慣れっこではあるが、どうにかならないものかとも思っ

「……！！」

光輝はその内容に、先程までのチャラけた表情を止め、真剣な表情になる。

「ファル、すぐに出るぞ」

《え？ どうしたんですか、坊ちゃん？》

そのファルの問いには答えず、光輝はクロノとの通信を開く。

「クロノ、すまねえが少し出る」

……は？ 何言つて――

そこで通信を切った。

光輝は個人で転送を行い、世界を経由しながら、地球を目指した。

「これって……！ そんな……」

一方、同時刻、艦船アーネストの部屋でくつろいでいたザベルにメールが届く。

その内容に、ザベルは信じられないといった表情をして、少し果然としながら、瞬時に我に戻り、何処かに向かった。

「アルラさん！」

「どうしたんだい、そんなに慌てて？」

「お願いします！ 第97管理外世界『地球』に向かってください！」

ザベルは真剣な顔で、アルラに言い放つ。

アルラもその表情に、何かを感じたのか、頷いた。

「いいさね。まあ彼処にはこの前来たって前例もあるしねえ。少し

調べてみる価値もあるさね」

「ありがとうございます！」

そうして、艦船アーネストは全速力で、地球に向かった。

あれから2時間後。

人払いの結界が張られた風鳥院家。

そこにバリアジャケット——騎士服姿の八神光輝がいた。結界を張ったのは、光輝である。

屋敷の様子を見て、光輝は苦々しい顔をする。

「酷いなこりゃ」

光輝は中を調べだそうとして——

「——ッ！」

何者かの気配に、自らの姿を見られないよう柱に隠れる。どうやら、相手もこっちには気づいているようだ。様子を窺っている。

誰だ？ 俺の結界内に入ってるってことは、魔導師か？

光輝は相手の動きに気を配る。

来る！

光輝と相手が同時に突っ込み――

「テムエ……！？」

「お前……！？」

お互いの武器が、当たるか当たらないかの直前で、2人の動きが止まる。

「ザベル！？」

「光輝！？」

その相手にお互いが、驚きの声を上げた。

その存在に気づいたところで、お互い武器――デバイスを引っ込めた。

「テムエもメールが送られてきたのか？」

「うん。信じられなかった……でもこれは……」

「ああ、だが悲観しててもしょうがねえ。お前はあつちを調べろ」

「あ、ああ」

ザベルは大分気が気でなかったが、光輝は冷静でザベルにそう言うのと、屋敷の中に入っていた。

ザベルも光輝が行った後、中の探索に向かった。

そんな光輝とザベルが、風鳥院家の探索をしている頃。

フェイトは地球にある家の自分の部屋のベッドで、今でもどこか信じられないような表情で、寝転がっていた。

フェイト達6人は、あの後、風鳥院家を見に行き、その惨状を見た。

その後、なんだか一緒にいる雰囲気でもなく、なんとなく解散になった。

テレビを点けるとそのことがやっており、生存者は今のところ1人もいないとか。

「通信？」

そこにフェイトに通信を知らせる音が鳴った。
誰だろう……、と思いながら、通信を開く。

フェイト、クロノだ

それはクロノ〃ハラオウンだった。

クロノ、どうかしたの？

いやな、光輝が血相変えて、艦を出て行ってな。フェイト達は何かしらないかと思ってな

光輝が……

まだ少し虚ろなフェイトは、答えが出るまでに多少時間がかかった。
だが、気づいたときは速かった。

ごめんクロノ！ 切るね！

お、おい、フェイ――

フェイトはクロノとの通信を切るとはやてに携帯電話で電話をしながら、家を出て行った。

フェイトに事情を聞いたはやては、蓮弥に電話をし、フェイトは更になのはに電話をした。

調べ始めて、30分後。

光輝とザベルは、屋敷の中を出て、玄関付近に集まっていた。

「それで？ 何か分かったか？」

「いや……とにかくすごい戦闘があつたのはわかったけど……」

「……よくそんなんで今まで、働いてきたな」

「お前な……正直こんな心持ちで、まともに調査なんてできないよ」

ハア……、と光輝は溜め息を吐くと、自分分かった限りのことを話し出す。

「まずおかしいのは、戦闘の跡だ」

「戦闘の跡？ 何かおかしかったか？ 絃特有の跡しかなかったと思っけど」

「それだよ。絃特有の戦闘の跡しかなかったんだよ」

光輝の言葉に、あ……！、とザベルもわかったように声を出す。

「そうか……アレほどの戦闘の跡なら、普通相手の武器の跡も残りそうだけど、それが無い……」

「そういうことだ。確かに一撃で仕留めて行ったってんなら、残ら

ねえかもしれないが、風鳥院家を相手にそんなことが出来る奴は、
そうそういない。いや、いないだろうな」

「それってつまりどういうことなんだ？」

「つまり……同じ使い手の仕業ってことだよ」

ザベルが、まさか……！、という表情を浮かべる。

「ただな、風鳥院家ってのは、ここ宗家以外にも、東風鳥院家、西
風鳥院家がある。もしかしたら、そこが反乱を起こしたのかもしれない」

光輝が淡々と可能性を話していく。

しかし、まだ何かあるのか、少し表情が歪む。

「だがな、もう1つ気になることがある」

「何だ？」

「おかしいとは思わねえか？ これほどの戦闘があって、気づいた
のが“朝”ってのは？」

「た、確かに……なんでだ……こんだけなったら、普通周りが気
付いてもおかしくないのに……」

ザベルもその違和感に気づいた。

何度も言うようだが、屋敷はボロボロだ。

なのに、たとえば深夜だろうと、ここまでなっていたら、恐らく隣
などに気づかれてもおかしくはない。

それなのに、見つかったのは今日の朝だ。

そして光輝は続ける。

「こんなことが出来るなんざ1つしかねえ」

「何？」

「今、張つてんのは何だ？」

「……結果？」

「ああ」

「じゃ、じゃあ相手は魔導師だつていうのか！？ でもさっきは同じ使い手って」

「そこだよ。そこがわからねえ。考えられる可能性は、超凄腕の魔法が使える暗殺者が、風鳥院家の者達を一撃で殺したとか」

「で、でもこんな管理外世界の一流派に何の恨みがあつて……！」

ザベルはそこまで話して、思いつき、まさか……！、と声を上げる。

「ああ、もしかしたら、あの俺たちを狙っている組織かもしれないな」

「そんな……あいつら……！」

ザベルは怒りを露わにして、拳を握りしめる。

だが……、と光輝は考える。

いくらあいつらでも、風鳥院家をすべて相手にして、一撃で確実に仕留めるなんて、芸当出来るのか……？ もう1つの可能性もないこともないんだよね……他の風鳥院家に魔導師が潜り込んだ……最悪の予想なら、あの組織と他の風鳥院家が手を組んだ……ハア……まさかな……考え過ぎだ。最近は疑り深くてダメだな……。

光輝は頭を掻き、自分の考えを改めた。

美咲、秋平、生きてろよ……。

そうして、光輝は天を仰ぎ見る。

そこには、結界内のため、ただ色のない空が広がっていた。

「マジでいやがったぜ」

そこに光輝には、馴染みの声が2人の耳に届く。

壊れた屋敷の屋根の上に、2人組がいた。

1人は今話しかけてきた男で、白髪で長めのコートを来ている。顔はジツと光輝を見つめており、その目はまるで獲物を狙っているようだ。

もう1人は女で、青髪でどこか感情を押し殺したような瞳をしている。その瞳はザベルを見ていた。

ザベルは瞬時に構え――

「誰だ！」

2人組に叫ぶ。

だが、2人組は答えない。

そして光輝は驚いたまま、固まり――

「……サトリ……だと……」

呆然として呟いた。

それにサトリと呼ばれた男が、凶悪な笑みを浮かべ、屋根から跳んで降りてきた。

5 m以上はあるはずだが、軽々と着地した。そして再会を喜ぶかのように、手を広げる。

「久しぶりだなあ！　ゼルよお！　再会を喜ばうじゃねえか！」

その凶悪な笑みを浮かべながら、そう言い放つ。

それにザベルは懐かしい名前に、どういうことだ？、と疑問符を浮かべる。

ゼルという名前は、以前、ジュエルシード事件と闇の書事件時に光輝が使っていた名である。

だが、何故その名をこの男が知ってるのかわからない。

あの名を知っているのは、この2つの事件に関わったものしか知らないはずと、ザベルは思っているからだ。

だがそうではない。

光輝はゼルという名を、もっと以前から使っていたのだ。

「何でデメエがここにいる!？」

そんなザベルは無視し、光輝はサトリに向かって叫ぶ。

だがサトリは興が削がれたように、頭を掻くと話し出す。

「なあに言ってたんだよ？　ンなどうでもいいこと……話してんじやねえぞ！」

その瞬間、男が地面を蹴り、突貫！

その速さに光輝は、受けるしかなく、大太刀——ファルシオンで相手の持っていた剣を受ける。

「光輝！」

「あなたの相手はわたし……」

ザベルが加勢しようとする、いつの間に降りてきたのか、もう1人の女性が、立ちふさがった。

「ぐっ……」

「どうしたあ？　なあ！」

「がつ！？」

得物をぶつけ合った状態で、蹴り飛ばされ地面を転がる光輝。
光輝は転がりながらも、体勢を整え立ち上がる。

「はあ！」

そこに再びサトリが、上段から剣を振り落としてきた。
光輝はそれを受ける。

氣術……何故こいつが……！

そんなことが頭を過るが、今油断すれば確実に殺られると思い、
戦闘に集中する。

そして光輝のファルシオンに、魔氣力が渦巻き始める。

「ナメんなあ！！」

光輝はサトリの剣の上に弾く。

そのまま、ファルシオンを水平にし――

斬！

駆け抜け、斬り裂いた……はずだった。

「ぐっ……！」

だが斬り裂かれたのは光輝だった。

サトリは無傷である。

光輝はダメージを負った左肩を押さえる。幸い、利き手は右だったので、大太刀を振る分には不自由はないが。

光輝がサトリの方を見ると、サトリの手は鉄鋼爪になっていた。それも右腕ごと。

どうやら、その腕で光輝の一撃を防いだ上に、一撃を加えたようだ。

「いい感じだろあ？ お前に斬られた右腕の代わりだよ。今じゃあ元の腕より、具合がいいぜえ」

「ハッ！ どうせなら、その腐った脳みそごと、機械にしちまえばよかったんじゃないか？」

やられていても余裕を崩さない光輝は、サトリにそんな挑発を吐く。

「言ってくれんなあ……！ いいぜえ、完璧に殺してやるぜ。“ワ
ンセコンド”だ」

来やがった。

サトリは意味ありげな言葉を口にする。

光輝はそれを聞き、浮かない顔をしている。

先に仕掛けたのは、サトリ。

上段から、鉄鋼爪を振り下ろす。

光輝はそれを避け、下段から斬り上げる。

しかし――

「どこ見てんだよ？」

「ちっ！」

斬り上げた地点にサトリはおらず、声は光輝の横からだった。

光輝は剣の軌道を瞬時に、横に変えサトリに放つ。

だがそこにもサトリはいなかった。

「がつ！」

その瞬間、後ろから斬り裂かれた。

光輝の背中に、4本の傷が出来上がる。

光輝は思わず膝を着いた。

それにサトリは冷ややかに光輝を見遣る。

「オイオイどうしたよお？ お前はそんなに弱かったかあ？ あの時の力を見せてみるよ？」

そしてそう言う。

あの時の力……、と光輝は考えるが、正直コイツと戦った時は、死なないように無我夢中だったため、よく覚えていないのだ。

何か対応策はないか……！、と策を探すが、対抗できるものがない。何せコイツの“覚醒能力”が、厄介すぎるのだ。

加減は出来ねえ……！

「来い、朱羅！」

光輝が叫ぶと朱羅が、瞬時に飛んできて、融身を行う。

すると、光輝の背中からは、炎の揺らめく翼が生え、バリアジャケットは朱を貴重とした色に変わった。

これにより、光輝は魔力変換資質“火”を得て、魔力も若干だが上がる

光輝は翼をはためかせると、一気にサトリへ突貫する。

サトリもそれを向かい打つために駆ける。

撃！

2人の姿が交差し、お互いの腕から、血が垂れる。

だがそれには構わず、更に駆ける！

しかし、次の光輝の突進方法は違った。

光輝の背中に生えた翼が、光輝を包み込んでおり、炎を纏う。

―八神流刀術炎式『蒲公英・焰返し』―

自らを巨大な火の玉とした光輝の突貫が、サトリに向かう。

だがサトリはその技を見越していたように、見事なまでにその突進をいなした。

しかしその瞬間――炎の翼が急に解放！

火炎のつぶてが、サトリに襲いかかる。

だがそれもサトリの鉄鋼爪で、斬り裂かれ効かなかった。

しかしそれでいい。

「……！」

それで光輝の姿が隠れたことにより、サトリは光輝の姿を見失った。

―八神流刀術炎式―

「芹麗斬・炎舞！」

激！

サトリの後ろから、絶大な魔氣力を込めた炎の居合いが放たれ、サトリはまともにくらい吹き飛んだ。辺りには、炎の残滓さんしが飛び交い、まるで舞っているようだった。

光輝はそれに一旦融身を解除する。

「フワッハッハッハ！　なんだあ、やれば出来るじゃねえかあ！」

しかし、サトリは効いた様子はなかった。

だがそれは光輝にもわかっていたのだが。あまり手応えがなかったためである。

マズいな……。

光輝はそう思いながら、油断せずサトリを警戒する。

光輝はすでに朱羅と融身を行ったため、もう融身を行うのは、正直辛い。

出来ないわけではないが、魔力が足りない。

その時――

「ザベ――ッ！」

ドゴオン！　と凄まじい爆発音のようなものが、ザベルが戦っているらしい場所から聞こえて、光輝は思わずそちらに意識を向けてしまった。

その結果――

「オイオイ」

しまっ……！

「お前の相手は俺だろうがぁ……！」

た……。

光輝の腹を、サトリの鉄鋼爪が深々と貫いた。

光輝とサトリが戦い始め、こっちの方は――

「そこを退いてくれ！」

ザベルが目の中の少女を説得していた。

しかし、少女――見た目から言って、大体16、7歳くらいかといつたところ――は、身動き1つせず、ただザベルの前に立ちふさが

仕方ない……気は進まないけど、気絶させて……通る！

《ソニックムーブ》

ザベルは高速移動魔法で、瞬時に少女の後ろに移動……したはずだった。

「えっ？」

しかし、目の前に少女はいなかった。
その気配は、更にその後ろ。

「くっ!？」

いつの間にか、後ろにいた少女に瞬時に反応したザベルは、少女のパンチを杖型デバイス——バルムンクで受けた。

しかし、思った以上に威力が高く、吹き飛ばされてしまう。
吹き飛ばされたザベルは、瞬時に構え、少女の追撃に備えるが、少女の追撃はなかった。

ただ光輝のところに行かせないように、立っているだけ。

絶対に通さない気が……どうする……？ さっきはよくわからなかったけど、あの子のスピードが俺より断然速いってことだよな。

ザベルは少女の隙がないかを探しつつ、攻略法を考える。

もう1回、試してみるか……。

ザベルは再びソニックムーブを使用。

ザベルの姿は霞のごとく消え、今度は少女の右に回り込む。

今度こそ……！

「無駄……」

「がっ!」

だが少女を捉えることはなく、逆に少女の蹴りを、脇腹に思い切り喰らう。

ザベルはその威力に吹き飛び、腹を押さえながら立ち上がった。少女の追撃は、またなかった。

「ねえ、ホントに通してくれない？」

ザベルがそう訊くのに、少女はコクツと頷いた。

ザベルはそれにハア……、と嘆息すると杖を前方に構える。

「最後通告だよ。通してくれ」

ザベルの杖の先端に魔力が、凝縮されていく。

ザベルは本気で撃つ気だ。まあ非殺傷設定なため、死ぬことはないが。

だがそれでも少女は、首を縦には振らなかった。それにザベルは、カッと目を見開き――

「メネースバスター！」

純魔力砲撃が放ち、少女を呑み込んだ。

……そのはずだった。
放った直後だった。

少女はその瞬間、ザベルの完璧な死角に潜り込み――

先程と同じ、脇腹に蹴りを一発。

それにザベルが、小さく呻く。

だが今回はそれで終わらなかった。

少女はいつの間にか、ザベルの目の前に移動する。

打！

正拳突きが、ザベルの腹に容赦なく突き刺さる。

「がっはっ！」

撃！

そのザベルが怯んだところで、少女のアップercutがザベルの顎を直撃。

「——ッ！」

ザベルは声も出ず、空中に放られる。

意識が……！

ザベルの意識が、一瞬途切れかけるが——

激！

空中に放られたザベルの下に潜り込み、その背を蹴り上げる。それにより、ザベルの意識は、再び戻り、更に宙へ放られる。ザベルは意識は覚醒せど、身体は動かない。それでも少女の攻撃は終わらない。

撃！

少女はザベル向かって跳躍すると同時に、膝で背を蹴る。

打！

そこから更に、肘で腹を殴る。

だがザベルの身体は、宙に浮いたまま。

恐らく、先程の膝の攻撃の上ベクトルが残ってる間に、肘で攻撃の下ベクトルの力を放ったため、相対的に消え去ったのだろう。

そのザベルに――

激！

めり込むような正拳突きを腹に喰らわし、蹴りを脇腹に喰らわし、右手に左手に右足に左足にと喰らわしていく。

それらをすべて空中で行っている。もちろん落ちながら。相当なボディバランスがなければ出来ない芸当だろう。

そして、地面が近づいてきたところで――

「さよなら……」

激！

かかと落としがザベルの頭に炸裂し、流星のごとく落ちていったザベルは、爆音を響かせ、地面にクレーターを作り倒れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0115t/>

魔法少女リリカルなのは～永久に受け継がれる意思～

2011年11月13日20時29分発行